

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和58年度

昭和59年

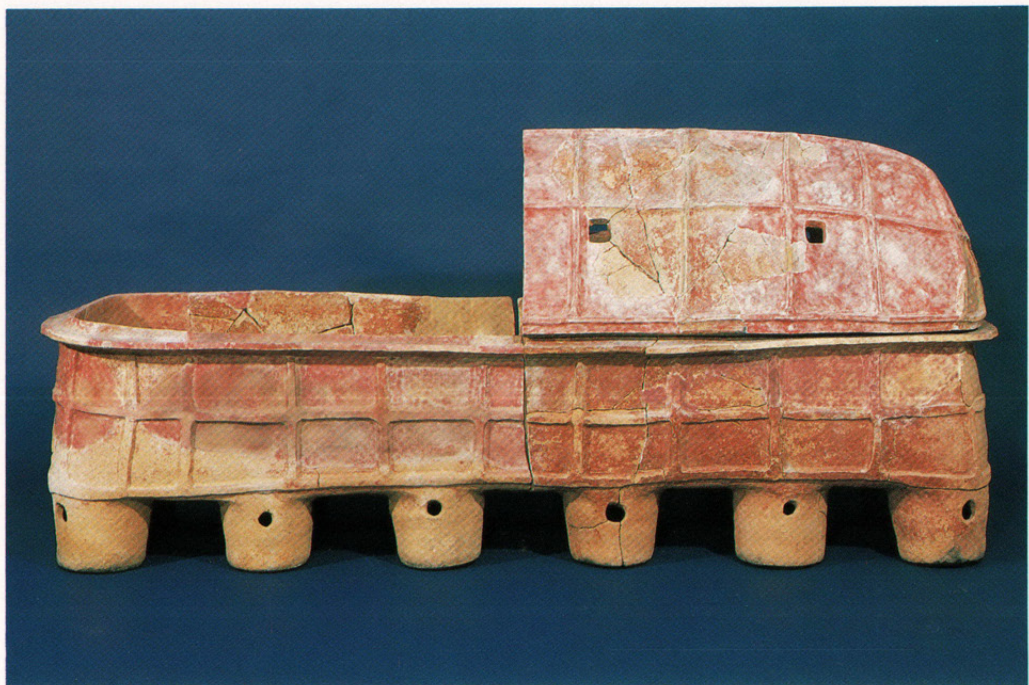
奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和58年度



赤田横穴群 一号横穴玄室（南から）



赤田横穴群 一号横穴陶棺

序 文

奈良市の地下には多くの遺跡が埋れておりますが、とりわけ奈良時代の都として栄えた平城京跡は広大なもので、現在の市街地の大部分はこの範囲に含まれております。

このような奈良市において、近年の人口急増に伴ない、大規模な開発あるいは市街地の再開発が盛んになってきており、これが遺跡の破壊につながるケースが年々増加してきております。このため、当教育委員会では五年前から主体的に平城京跡の発掘調査を実施してきており、特に、今年度は年々増加する発掘調査に対応するため、長年の念願であった発掘調査の基地というべき奈良市埋蔵文化財調査センターを設置し、調査体制の充実をはかっております。

このような中、昭和58年度は36件の発掘調査を行ない、うち東市跡の調査をのぞく他の調査をここに一括して報告いたします。内容その他、不備不足の点もお目にとまることかと存じます。ご批評、ご教示をおよせいただければ幸いです。

最後に、日頃ご指導、ご協力を賜っております奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

例 言

1. 本書は、昭和58年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。

なお、昭和58年度には、本書に収録した調査以外に平城京左京八条三坊十一坪（東市跡推定地）においても発掘調査を行なっているが、これについては別に概要報告を刊行する予定である。

1. 本書に集録した報告は次頁の目次に記したとおりである。なお、調査地の位置は折り込みの発掘調査地位置図に示した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター（所長：三好良則）が行ない、各調査の担当者は次頁の目次に示した。調査にかかわる庶務は、文化財課庶務係（係長：前川宏充、森 光彦）が担当した。

1. 現地の調査及び、本書の作成に伴なう遺物整理作業には下記の方々があった。

行天優貴子、小坂田育子、大野佳子（大学卒業生）

飯野公子、岡本広子、桑原幸則、長谷川一英、服部芳人、後藤勝功

平井由賀里、遠藤昭浩、草原孝典、鈴木景二、浅村 隆、川端 恵

楠本真紀子、前嶋祥江（以上、奈良大学学生）

鷹田志津、和田素子（奈良女子大学学生）

斎藤順子、藪久仁子（奈良文化女子短期大学学生）

吉田野々（龍谷大学学生）、上村紀子（上智大学学生）

鍋木 顕（早稲田大学学生）

1. 赤田横穴群の調査では、奈良市文化財保護審議会委員 伊達宗泰氏（花園大学教授）・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 西村 康氏の御指導、御協力を得、また、西村氏には玉稿を賜わった。記して感謝いたします。

1. 本書の作成は、文化財課長 田辺征夫の指導の下に、調査担当全員が分担して行ない各報告の末尾にその文責を明らかにした。

1. 本書の編集は、篠原豊一が行なった。

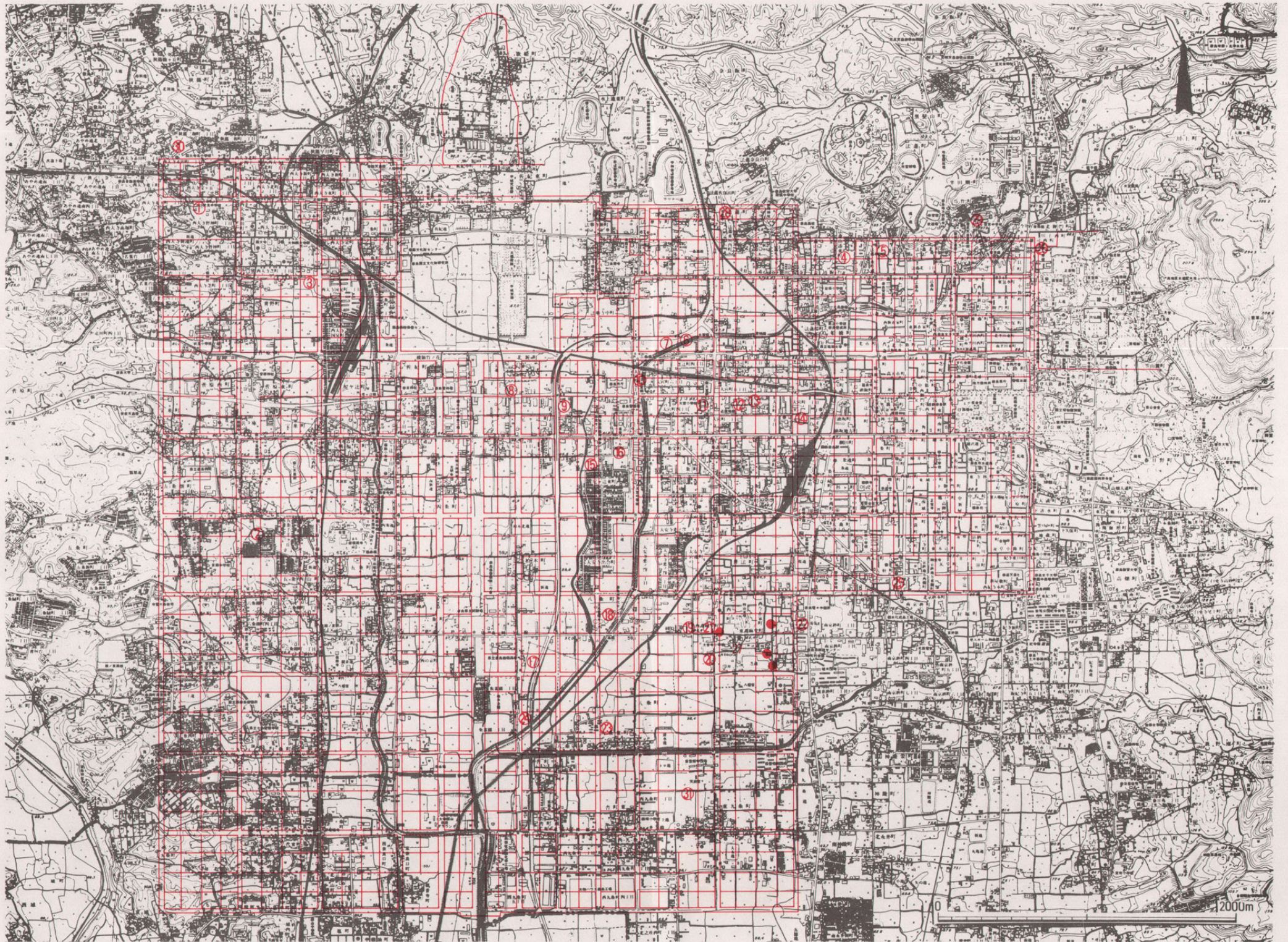
目 次

1. 平城京右京一条四坊八坪の調査	(篠原豊一)	1
2. 平城京右京五条三坊十六坪の調査	(森下恵介)	1
3. 平城京右京二条三坊一坪の調査	(立石堅志)	2
4. 平城京左京二条五坊北郊の調査	(森下恵介・立石堅志)	4
5. 平城京左京二条六坊北郊の調査	(西崎卓哉)	9
6. 平城京左京二条三坊十二坪の調査	(中井 公)	10
7. 平城京左京二条三坊五坪の調査	(中井 公)	10
8. 平城京左京三条一坊七坪(東一坊坊間路)の調査	(篠原豊一・奈良美穂)	11
9. 平城京左京三条二坊三坪の調査	(立石堅志)	15
10. 平城京左京三条三坊二坪の調査	(篠原豊一)	16
11. 平城京左京三条二坊十四坪の調査	(立石堅志)	17
12. 平城京左京三条四坊六坪の調査	(篠原豊一・立石堅志)	18
13. 平城京左京三条四坊六・十一坪(東四坊坊間路)の調査	(森下恵介)	21
14. 平城京左京三条五坊四坪の調査	(中井 公)	23
15. 平城京左京四条二坊七坪の調査	(篠原豊一, 奈良美穂)	28
16. 平城京左京四条二坊十六坪の調査	(森下恵介・立石堅志)	40
17. 平城京左京六条一坊十二坪の調査	(中井 公)	42
18. 平城京左京六条二坊九・十坪の調査	(篠原豊一)	44
19. 平城京左京六条三坊十坪(東堀河)の調査	(森下恵介)	48
20. 平城京左京六条三坊十三坪の調査	(篠原豊一・奈良美穂, 立石堅志・森下恵介)	50
21. 平城京左京六条三坊十五坪の調査	(中井 公)	67
22. 平城京東四坊大路の調査	(森下恵介)	70
23. 平城京左京七条二坊十一・十二坪の調査	(森下恵介, 奈良美穂)	70
24. 平城京左京七条一坊十一坪(東一坊坊間路)の調査	(森下恵介)	71
25. 平城京左京五条六坊五坪の調査	(西崎卓哉)	74
26. 史跡東大寺旧境内の調査	(篠原豊一)	74
27. 史跡大安寺旧境内の調査	(奈良美穂, 立石堅志, 篠原豊一)	75
28. 不退寺境内の調査	(森下恵介)	79
29. 多聞城跡の調査	(篠原豊一)	81
30. 赤田横穴群の調査	(西崎卓哉・森下恵介)	82
付章 赤田横穴群の定常波探査	(西村 康)	89

調 査 地 一 覧

	調 査 地	調 査 期 間	調 査 面 積	備 考
1	平城京右京一条四坊八坪	西大寺野神町一丁目6番地の1	58年8月22日～8月30日	120㎡ 伏見中学校
2	平城京右京五条三坊十六坪	平松町273番地の2	58年11月21日～12月1日	130㎡ 明光商事
3	平城京右京二条三坊一坪	西大寺南町2387番地の1	58年10月20日～11月7日	203㎡ 明光開発
4	平城京左京二条五坊北郊	法蓮町757番地の8	58年8月3日～10月12日	1125㎡ 佐保幼稚園
5	平城京左京二条六坊北郊	法蓮前ノ町923番地の1	58年1月27日	25㎡ 関 ふじ
6	平城京左京二条三坊十二坪	法華寺町141番地の1, 他	58年9月3日～9月9日	114㎡ 美幸産業
7	平城京左京二条三坊五坪	法華寺町129番地の1, 他	58年9月8日～9月12日	64㎡ 読売新聞
8	平城京左京三条一坊七坪	二条大路南二丁目173番地の1,2	58年4月11日～5日7日	155㎡ 吉川 文男
9	平城京左京三条二坊三坪	三条大路一丁目600番地の1	58年8月23日～9月10日	120㎡ 仲西 英次
10	平城京左京三条三坊二坪	大宮町七丁目518番地の1, 他	58年11月1日～11月25日	300㎡ 三交不動産
11	平城京左京三条二坊十四坪	大宮町四丁目223番地の1	58年7月13日～7月23日	44㎡ 大宮小学校
12	平城京左京三条四坊六坪	大宮町三丁目161番地の1, 3	59年3月1日～3月10日	61.5㎡ 大西 初雄
13	平城京左京三条四坊六・十一坪	大宮町三丁目154番地の1	59年2月1日～2月9日	117㎡ エヌ・ケー企画
14	平城京左京三条五坊四坪	大宮町一丁目654番地, 他	58年11月4日～12月14日	1000㎡ 近鉄不動産
15	平城京左京四条二坊七坪(1)	四条大路一丁目772番地の1	58年6月24日～7月22日	208㎡ 森田 繁一
	同 (2)	四条大路一丁目742番地の1	59年1月26日～3月3日	249㎡ 扇田 嫩子
16	平城京左京四条二坊十六坪	四条大路一丁目720番地の3	58年4月15日～5月10日	162㎡ 柳田 弘之
17	平城京左京六条一坊十二坪	柏木町410番地の3, 他	59年1月13日～2月7日	450㎡ シヤロン
18	平城京左京六条二坊九・十坪	大安寺西二丁目281番地	58年7月27日～8月29日	107㎡ 奈良市 浄化センター
19	平城京左京六条三坊十坪	大安寺町79番地の1	58年10月24日～11月17日	423㎡ 楠木 英彦
20	平城京左京六条三坊十三坪(1)	大安寺町29番地の1	58年5月11日～6月8日	160㎡ 大西 保治
	同 (2)	大安寺町24番地の3, 他	58年11月28日～1月27日 59年	560㎡ 大安寺小学校
21	平城京左京六条三坊十五坪	大安寺西護麻堂町92番地の7	59年2月23日～3月1日	72㎡ 今井 良守
22	平城京東四坊大路	大安寺町五反田930番地の1, 他	59年1月21日～1月27日	72㎡ 永保 安雄
23	平城京左京七条二坊十一・十二坪	八条町814番地の4, 他	58年6月27日～7月12日	1060㎡ 八条運動場
24	平城京左京七条一坊十一坪	柏木町355番地の1	58年5月13日～6月2日	135㎡ 坂本 正文
25	平城京左京五条六坊五坪	西木辻町134番地の4	59年3月2日～3月3日	17㎡ 山中工務店
26	史跡東大寺旧境内	雑司町字上ノダン74番地の4	58年10月21日～10月24日	6㎡ 三好 嘉明
27	史跡大安寺旧境内(83-1次)	大安寺町1138番地の2	58年5月27日～6月8日	20㎡ 今井 迎子
	同 (83-2次)	大安寺東今在家町996番地	58年8月2日～8月5日	18㎡ 楠木 重一
	同 (83-3次)	大安寺町字ヒラキ1237番地の4	58年10月5日～10月19日	45㎡ 大西 敏子
	同 (83-4次)	大安寺町字ヒラキ1254番地の1	59年1月9日～1月21日	64㎡ 東井 敬三
28	不退寺境内	法蓮東垣内町517番地の1	58年12月8日～12月16日	45㎡ 不退寺
29	多聞城跡	法蓮町1416番地の1	58年9月9日～9月21日	160㎡ 若草中学校
30	赤田横穴群	西大寺赤田町一丁目556番地の1	58年5月26日～6月15日	吉田病院
	平城京左京八条三坊十一坪 (東市跡推定地)	東九条町441番地, 442番地	58年4月20日～6月24日	203㎡

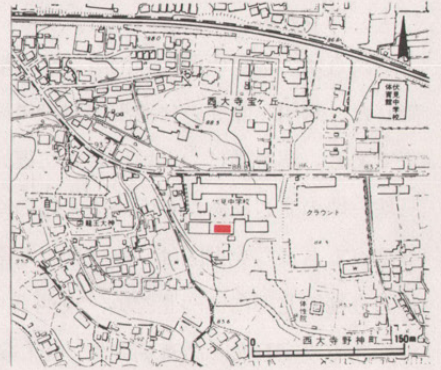
※ 掲載番号は、発掘調査地位置図に対応する。



発掘調査地位置図

1. 平城京右京一条四坊八坪の調査

本調査は、奈良市西大寺野神町1丁目6番地の1において実施した伏見中学校校舎改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は称徳陵兆域に推定されており、伏見中学校の北側には称徳天皇御山荘の園池と推定される池が残っている。これらの推定地は、標高84~92mほどの丘陵部分にあたる。発掘調査はこの丘陵の頂部にあたる部分に東西16.0m、南北7.5m（発掘面積120㎡）の東西トレンチを設定して行なった。調査の期間は昭和58年8月22日から30日までである。



発掘区の位置 1/7500

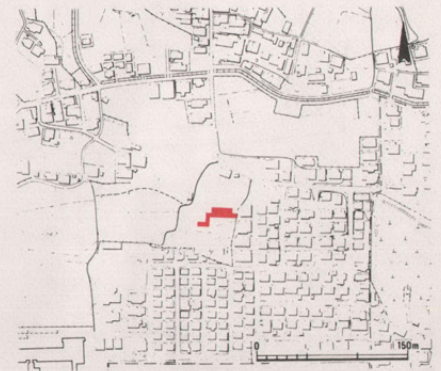
発掘区はすでに地山面（明黄色粘質土）が露出しており、旧校舎の基礎以外の遺構はみられなかった。今年度、奈良国立文化財研究所から、右京一条北辺四坊六坪（伝称徳天皇御山荘跡）で行なった調査では顕著な遺構の発見されていることをみれば、今調査地は校舎造成によって大幅に遺構が削平されたものと考えられる。（篠原 豊一）

2. 平城京右京五条三坊十六坪の調査

本調査は、奈良市平松町273番地の2で行った榊明光商事の宅地造成に伴う事前調査である。調査地は西の京丘陵の一画で、右京五条三坊の十六坪と九坪、同じく十六坪と十五坪のそれぞれ坪境小路の確認を目的として調査を行った。発掘区は約130㎡で、調査期間は、昭和58年11月21日から12月1日までである。

発掘区の土層は、耕土の下、黄色砂質土、灰褐色砂質土、淡黄色粘土があり、以下は砂層となる。砂層を掘り下げると地表下約2mで地山の白黄色砂礫層に至る。

地山の上に推積した砂層からは、奈良時代の土器が若干出土したが、目的とした条坊遺構は地山面でも検出できなかった。調査地の北側は、西から東へのびる丘陵支尾根の頂部となっており、調査で確認した地山面も北から南へ傾斜していることから、起伏ある地形をそのまま京内にとりこんでいたものと思われる。遺存地割の存在や、これまでの調査での条坊確認例はあるにしろ、やはり右京の条坊施工は、完全ではなかったものとみておきたい。（森下 恵介）

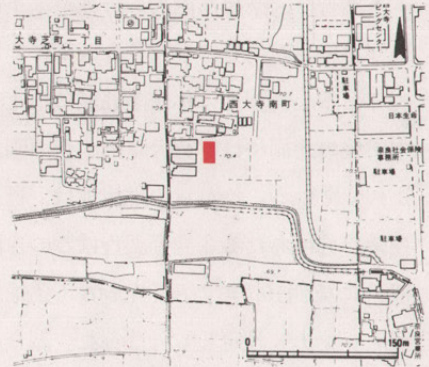


発掘区の位置 1/7500

3. 平城京右京二条三坊一坪の調査

I はじめに

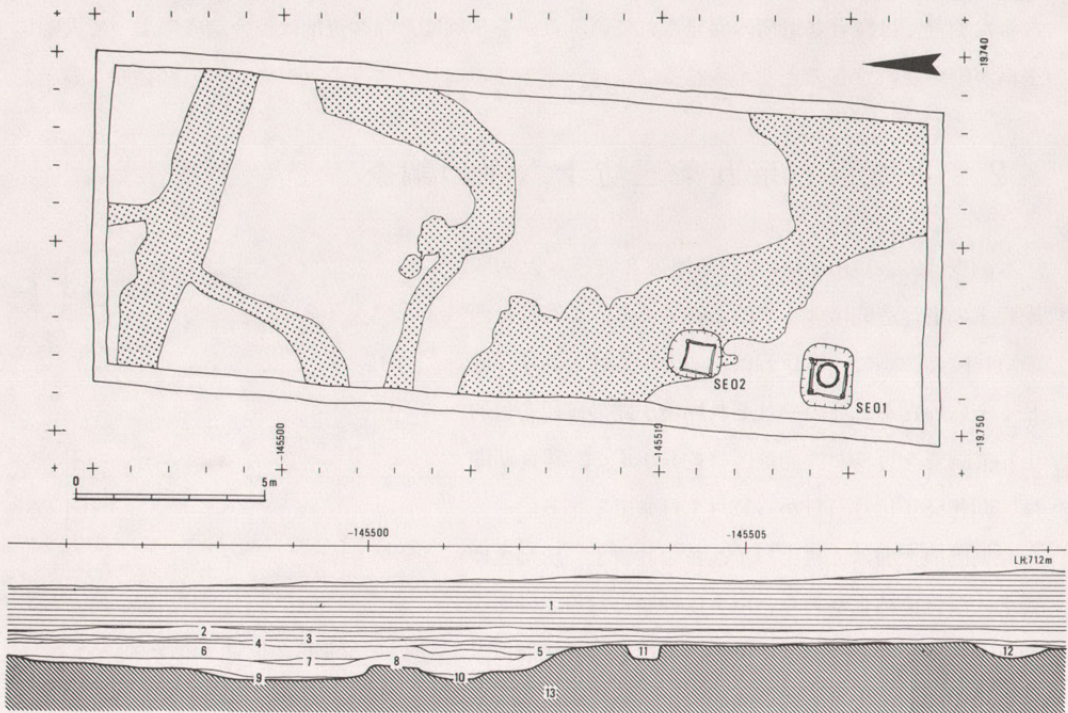
本調査は、奈良市西大寺南町2387番地の1において実施した、**明光開発**の公衆浴場建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、右京二条三坊一坪の北辺にあたり南一条大路の南側溝が想定される地点である。発掘区は、南一条大路南側溝の確認のため調査地の北部に、南北23m、東西9m（面積203㎡）の範囲で設定した。調査期間は、昭和58年10月20日から11月7日にかけてである。



発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

発掘区の土層堆積状態は、地表下約60cmは駐車場造成の際の盛土であり、以下、耕土、暗灰色



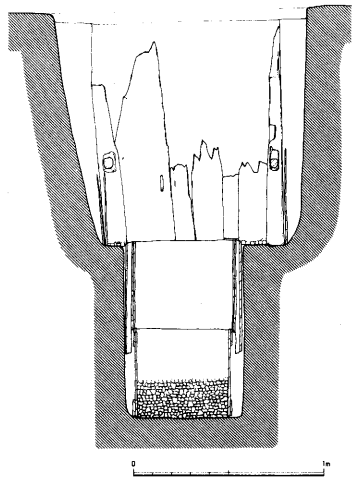
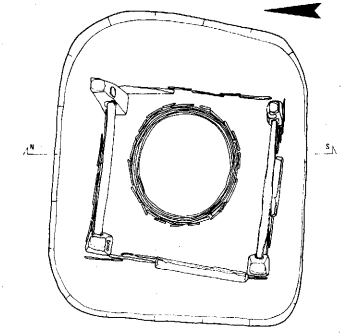
- | | | |
|------------|-----------|---------------|
| 1. 盛土 | 6. 茶褐色砂質土 | 11. 淡灰褐色砂質土 |
| 2. 耕土 | 7. 茶褐色砂 | 12. 淡灰褐色砂質土 |
| 3. 暗灰色砂質土 | 8. 暗茶褐色砂 | 13. 黄灰色粘土（地山） |
| 4. 黄褐色粘質土 | 9. 黄褐色砂 | |
| 5. 暗灰褐色砂質土 | 10. 青灰色砂 | |

検出遺構平面図 1/200・東壁推積土層図 1/100

砂質土，黄褐色粘質土と続き，地山の黄灰色粘土に至る。遺構はいずれも地山上面で検出した。発掘区では自然流路の形跡はみられたが，調査当初想定した南一条大路南側溝の確認はできなかった。検出した遺構は，S E 01，S E 02の井戸2基である。

S E 01 発掘区の南西隅で検出した井戸。短辺約1.1m，長辺約1.6mの隅丸方形の掘形をもち，検出面から約1.2m掘り下げたところで，中央部を更に径70cmの円形に約90cm掘り下げる。井戸枠は，下部を曲物2段で組み，上段部と掘形の間隙を長方形の板材で塞ぐ。上部は四本柱で縦板組とする。隅柱は2段の横棧で接合するが，上段部は遺失し，下段部が残るのみである。枠板は，厚さ5cm程度の扉材を転用したと思われる部材が見られる。井戸底には，約30cmの厚さで砂利を敷きつめている。埋土から，土師器皿・壺が出土した。遺物から，奈良時代末に廃絶したと考えられる。

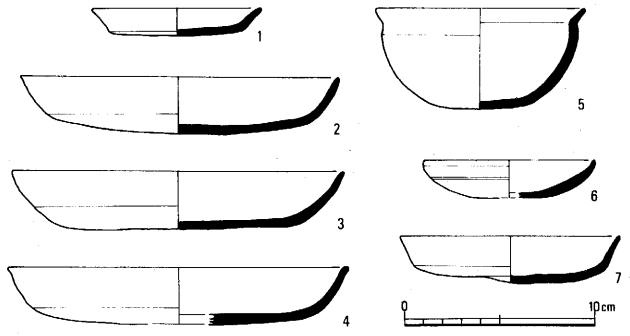
S E 02 発掘区の南西，S E 01の北で検出した井戸。径約1.3mの円形の掘形をもち，検出面から約40cm掘り下げたところに井戸枠を据付け，中央部を更に25cm程掘り下げている。井戸枠は四本柱の縦板組で，横棧を渡し縦板を支える構造になる。枠板は厚さ約1cmで，下端から約25cm，及び横棧は1段残存する。埋土及び掘形から土師器皿が出土した。遺物から，13世紀中頃から末にかけての時期に構築され，13世紀末から14世紀初頭の時期に廃絶したものと考えられる。



S E 01平面・立面図 1/40

III 出土遺物

遺物は全てS E 01，S E 02から出土した。1～5は，S E 01埋土内出土。1～4は土師器皿で大きさにより小皿（1）と大皿（2～4）に区別できる。1は口縁部をよこなで，底部外面をへら削りする。5は土師器壺。いずれも奈良時代末に位置づけられよう。6・7はS E 02出土の土師器皿。6は掘形裏込め，7は埋土から出土。6は13世紀中頃から末，7は13世紀末から14世紀初に位置づけられる。（立石 堅志）

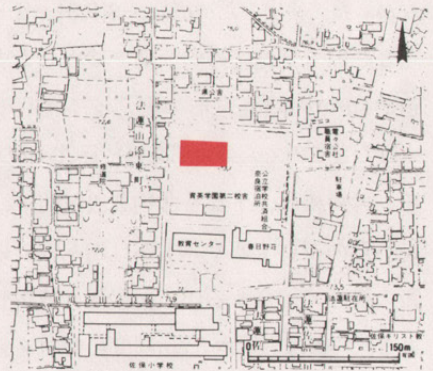


S E 01・02出土土器 1/4

4. 平城京左京二条五坊北郊の調査

I はじめに

本調査は、奈良市法蓮町757番地の8において実施した奈良市立佐保幼稚園移転予定地の事前調査である。調査地は、南一条大路を踏襲する一条通りの北側で、昭和29年、奈良高等学校校庭拡張に伴い奈良時代遺構が発見されてから、南一条大路と奈良山丘陵との間に南北二分の条坊設定の有無が問題となっている地域である。発掘区は南北25m、東西45m（面積1125㎡）で、昭和29年調査地のほぼ西側に設定した。調査は昭和58年8月3日から10月12日まで行った。

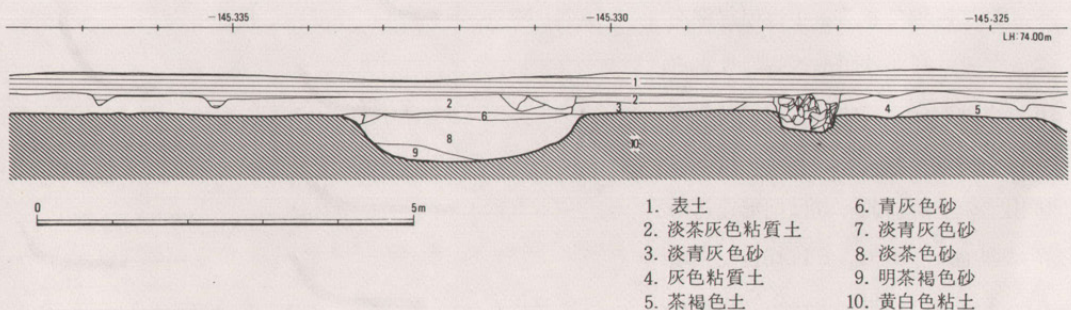


発掘区的位置 1/7500

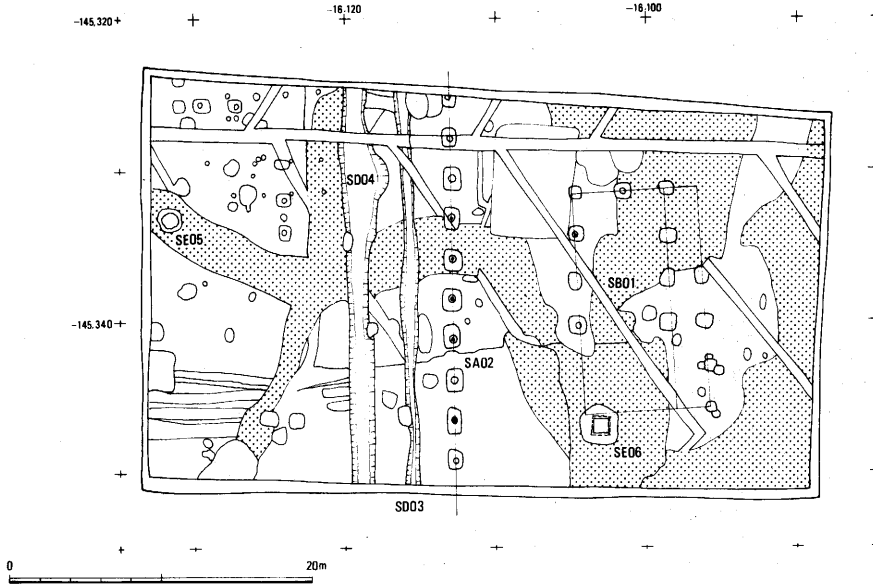
II 検出遺構

調査地周辺は、昭和初頭、奈良中学校建設に際し、削平を受け、当時、敷地内から多くの柱根、土器、瓦類が出土たと伝えられており、高校校庭であった間にも排水のための暗渠敷設など、かなりの削平、攪乱を受けている。このため検出した遺構の遺存状態はかならずしも良好なものではなく、土層の堆積も、表土（旧校庭盛土）の下に淡茶灰色粘質土がみられるだけで、地表下約60cmで地山である黄白色粘土層となる。また地山は発掘区南側では、30～40cmの段をもって低くなっており、東部分は旧流路の砂層となり、粘土層はみられない。旧流路は3本以上あるものと思われるが、発掘区東部分では、幅も広く、重複関係を明らかにするまでには至らなかった。奈良、平安時代の遺構としては、建物1棟、柱列2条、井戸1基を検出した。

S B 01 桁行5間（15m）、身舎梁行2間（6m）の南北棟。東面に廂（2.7m）をもつ。柱間寸法は、桁行、梁行とも3m等間である。建物の東北部分および西南部分は旧流路にかかり、砂層中に柱穴を掘るが、削平のためか検出できなかった柱穴もあり、この点、建物規模を断定す



西壁堆積土層図 1/100



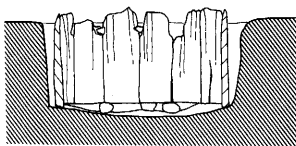
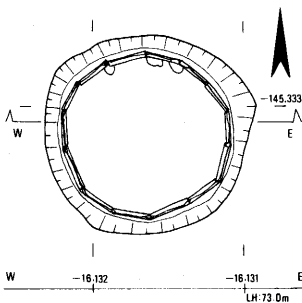
検出遺構平面図 1 / 500

るには、検討の余地もある。柱穴内よりの出土遺物もほとんどなく、時期を決めがたいが、柱間寸法、周辺から出土した軒瓦などから、昭和29年に検出された建物と同じく奈良時代とみられる。

SA02 建物SB01の西側で検出した南北方向の柱列。9間分(24.3m)検出した。柱間は2.7mの等間で、5柱穴に柱根が遺存していた。

SD03 柱列SA02の西側、3mの間隔をおいて並行する南北溝(幅1~1.5m、深さ40~50cm)。埋土より少量の奈良時代の瓦類、土器類が出土した。

SD04 溝SD03のさらに西側3mの間隔をおいて並行する南北溝(幅1~1.5m、深さ40~50cm)。埋土より奈良時代の瓦類、土器類が出土したが、細片が多い。



SE05平面・立面図 1 / 50

SE05 発掘区西寄りで検出した円形井戸(径1.1m、深さ60cm)。14枚の縦板のそれぞれ側面上部に柄穴をつくり、柄で連結し井戸側とする。側板は幅20~24cmで厚さ約5cmある。長さは上部が削平されているため不明だが、昭和29年の調査で検出されたI号丸井戸と構造上まったく同じのものである。井戸内より、平安初頭の土器類が出土し、廃絶の時期が求められる。

この他に、発掘区東寄りで縦板組井戸SE06を検出したが、構造材の材質や、出土遺物から近代のものであることがわかった。またSE05の北側で柱穴を数ヶ所検出したが、削平、攪乱等により建物規模を明らかににはできなかった。(森下 恵介)

Ⅲ 出土遺物

瓦類 瓦類のほとんどは遺構面を覆う淡茶灰色の粘質土から出土したが、出土量は発掘面積に比して小量である。通常の丸瓦、平瓦が大多数を占めるが、軒丸瓦4点を軒平瓦8点がある。

軒丸瓦 2型式3種に分類できる。1は間弁が界線状にめぐる複弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房には1+6の蓮子を配し、外区は内縁に珠文、外縁に線鋸齒文がめぐる。平城宮6285B型式軒丸瓦と同範で、天平年間の法隆寺東院の造営では、これと同6691A型式軒平瓦との組み合わせが創建瓦に使用されている。^{注1)} 2・3はともに1とは対照的に間弁が独立した複弁8弁蓮華文軒丸瓦。2は弁の反転が比較的大きく、弁区よりやや突出した中房には1+6の蓮子を配する。外区には、内縁に珠文、外縁に線鋸齒文がめぐる。3は弁が細長く扁平で、突出したやや小さめの中房には1+5の蓮子を置く。外区内縁は間隔の疎な珠文帯、外縁は欠損が著しく明らかでない。両者とも平城宮6308型式軒丸瓦に属し、2はI種と同範、3は先の旧奈良高校跡地の調査に類例がある。^{注2)} 2が1点、3が2点出土。

軒平瓦 7型式に分類できる。4は偏行唐草文軒平瓦。主文の唐草は変形忍冬唐草文と称されるもので、左から右に七回反転する。外区には、上外区に珠文、下外区に線鋸齒文を飾る。平城宮6649C型式軒平瓦と同範である。2点出土。同型式の軒平瓦は、京内では右京九条一坊十二坪の南辺で、同6272型式軒丸瓦と組んで多数出土しているが、^{注3)} 旧奈良高校跡地の調査では以前にも同型式の両者が出土している。5～9は三回反転の均整唐草文軒平瓦。5は二条の基軸で垂下される花頭を中心飾りにもち、外区には二重の界線がめぐる。平城宮6663A型式軒平瓦と同範である。6は5と同形の中心飾りをもつが、花頭の基軸は上界線から遊離し、外区は珠文帯となる。平城宮6664H型式軒平瓦と同範で、同軒瓦編年ではI期に位置づけられている。7は小形の軒平瓦で、唐草の各单位が上下の界線から発しているのも特徴的である。中心飾りは5・6と同一の意匠であるが、花頭が丸味を帯びている。外区には珠文がめぐる。平城宮6666A型式軒平瓦と同範で同軒瓦編年のII期に位置づけられる。8は基軸一条で垂下される十字形の花頭を中心飾りにもち、外区には珠文を配する。平城宮6682B型式軒平瓦と同範である。同型式の軒平瓦は京内では左京二条二坊十二坪から多数出土しており、そこでは上述した6308I型式軒丸瓦と組み合わせることが判明している。^{注4)} 9は短かな基軸で垂飾されるY字形の花頭を中心飾りにもつ。外区には珠文がめぐるが、その間隔は粗い。平城宮6728型式軒平瓦と同範で、京内では唐招提寺に類例がある。10は四回反転の均整唐草文軒平瓦。二度押しのために文様が乱れ、中心飾りは半分以上を欠き形状不明である。外区には珠文がめぐる。宮、京を通じてこれまでに類例の出土はない。

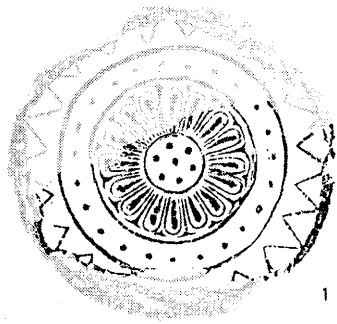
(中井 公)

注1) 法隆寺発掘調査概報編集小委員会「法隆寺発掘調査概報I」1982

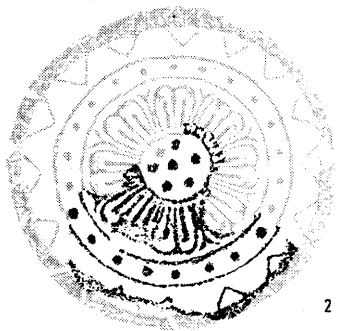
注2) 奈良県公立学校共済組合「平城京左京二条五坊北郊の調査」1970

注3) 奈良国立文化財研究所「平城京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報I」1981

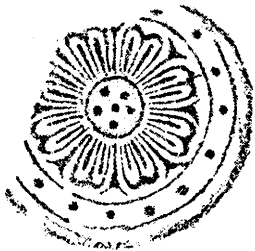
注4) 奈良市教育委員会「平城京左京二条二坊十二坪発掘調査概報」1984



1



2



3



10



4



5



6



7

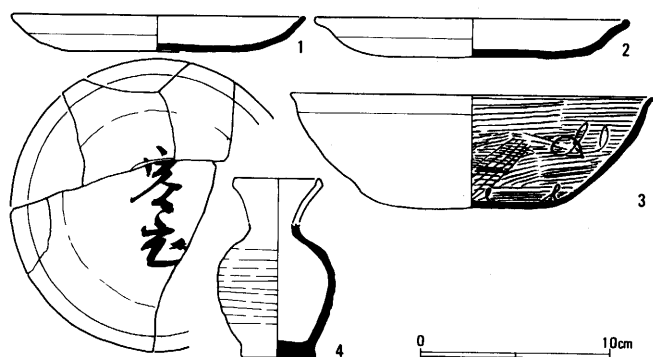


8



9

出土軒丸瓦・軒平瓦 1/4



SE05出土土器 1/4

土器類 今回の調査で出土した土器には、旧流路砂層中より出土した古墳時代の土師器、須恵器、溝S D03・04から出土した奈良時代の土師器、須恵器、井戸S E05から出土した平安時代初頭の黒色土器、土師器、須恵器などがある。

旧流路砂層中より出土した土師器には、いわゆる布留式の二重口

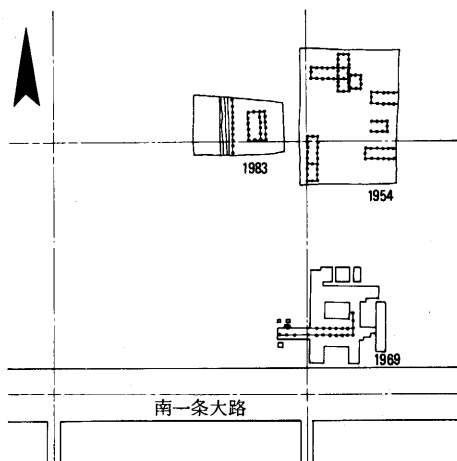
縁の壺、須恵器には6世紀代の杯、高杯などがあり、旧流路の時期の一端がうかがえる。しかしながら、奈良時代の溝S D03, 04から出土した土器類と同様、小片であり、遺存状態も悪い。

SE05の出土土器は、少量であるが、時期的にもまとまっており、これを図示した。1・2は土師器皿で、いずれも口縁内外面をよこなで仕上げ、底部外面には成形時の凹凸を残す。1の底部外面には「客宅」と読める墨書がある。1の口縁端部はわずかに内側へまき込み、上端がやや突出する。2は口縁部が上部で屈曲し、端部を内側へまき込み、丸くつくり、底部内面にハケ調整の痕跡を残す。3は黒色土器の杯で、内面に炭素を吸着させている。外面は口縁上部を除きへら削り、内面は底部に平行のへら磨き、口縁部に横方向のへら磨きを行い、その後、口縁内面3ヶ所に渦状暗文、底部内面にラセン状暗文を配している。4は全体にロクロ痕跡を残す小型の須恵器壺。軟質で、平底の底部には糸切り痕を残す。このような土器の諸特徴や組み合わせは、東三坊大路東側溝S D 650 Bからの出土土器^{注1)}と共通し、9世紀後半にその時期が求められる。

IV まとめ

今回の調査で検出した遺構とこれまでの周辺での調査成果との関係をまとめておく。昭和29年^{注2)}の調査地に今回の発掘区が隣接することはさきにふれたが、昭和44年には、昭和29年調査地の南側で公立学校共済組合奈良宿泊所（春日野荘）建設時に調査が行われ、12間以上×3間の南廂をもつ東西棟が検出されている^{注3)}。これらの検出遺構と今回の調査で検出した建物S B01、柱列S A02、溝S D03・04との位置関係は、おおよそ図示したようになる。29年の調査で検出された建物群と今回検出した建物S B01は、柱間寸法が3m前後と共通し、柱列S A02も規模の点で同時代と考えられる。このことから柱列S A02はこうした建物群の西側を区画する柵および塀などの施設とみることができる。溝S D03・04もS A02と並行することから同じく区画施設としての性格をもつものと思われるが、同時期に存在したのかどうか、出土遺物からは確認できない。しかしながら、その間隔から3mと等間であり、計画的につくられたものであることはうかがえる。

またこれらの柱列や溝は発掘区外へさらに南北にのびており、出土した軒瓦に共通するものが見られることから昭和44年の調査で検出された建物も同一の敷地内に含まれる可能性も考えられ



左京二条五坊北郊の占地

る。南一条大路やその他の周辺の条坊が検出されていないため、条坊との正確な位置関係は不明だが、今仮に、平城宮西面中門と東大寺転害門とを結んだ線を中心に南一条大路を設定し、北へ一坪分（450尺）の条坊を仮定した場合、それは、今回の発掘区と29年の調査地内に位置する。また左京二条五坊九坪と十六坪との南北の坪境小路を北へ延長し、仮定すると、それは、44年の調査で検出された建物にかかり、29年の調査地にもかかる。今回の調査を含め、これまでの調査では、いずれも条坊遺構は検出されておらず、このことは、左京五坊では南一条大路以北に条坊が設定されていなかった可能性をもち、反対に条坊が設定されていても、四坪以上を同一の宅地とする大規模な敷地の利用があった可能性も考えることができる。建物群の時期については、29年の調査成果をみる限り3時期以上あり、今回の調査での出土遺物からは、奈良時代初頭から平安時代初頭までの期間が知り得る。29年の調査で「小治田寺」の墨書土器が出土したことから寺院跡とする考えもあるが、京内のこれまでの調査成果と比較するならば、宅地と考えるのが妥当であり、宅地の規模は今後の課題としても、建物規模からは、かなり有力貴族の邸宅を想定することが許されるであろう。（森下 恵介）

注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』1974

注2) 鈴木嘉吉「奈良高等学校校庭における掘立柱建物遺跡」（『大和文化研究2-5』）1954

注3) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条五坊北郊の調査』1970

5. 平城京左京二条六坊北郊の調査

本調査は奈良市法蓮前ノ町923番地の1で行なった関ふじ氏届出の宅地造成工事に伴う事前発掘調査である。調査地は奈良山丘陵から南へ向ってなだらかに下る斜面に位置する水田で、周囲はすでに住宅にとり囲まれている。調査は遺跡の有無を確認することを主目的に南北1.2m、東西21mの発掘区を設定し、昭和59年1月27日に実施した。発掘区内の層位は以下のようなものであった。耕土以下、黄灰色やや砂質土、黄灰色粘質土と続き地表面下約70cmで地山である黄白色粘質土層に達する。黄灰色粘質土から土師器の細片若干が出土したものの、何ら遺構は検出できなかった。（西崎 卓哉）

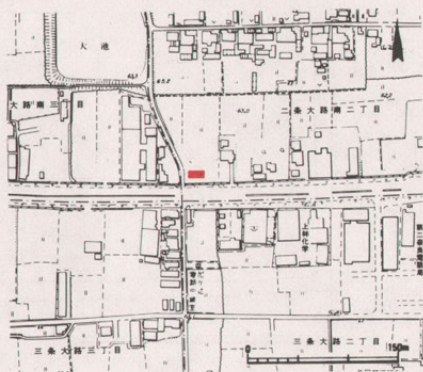


発掘区の位置 1/7500

8. 平城京左京三条一坊七坪（東一坊坊間路）の調査

I はじめに

本調査は、奈良市二条大路南二丁目173番地の1・2において実施した吉川文男氏届出による展示場建設に伴なう事前の発掘調査である。調査地は、平城京左京三条一坊七坪及び東一坊坊間路に推定される。東一坊坊間路は平城宮南面東門（壬生門）に面する南北道路である。調査は、敷地の西側に東西16.5m、南北7.0m（発掘面積155㎡）の発掘区を設定して行なった。調査の期間は、昭和58年4月11日から5月7日までである。



発掘区的位置 1/7500

II 検出遺構

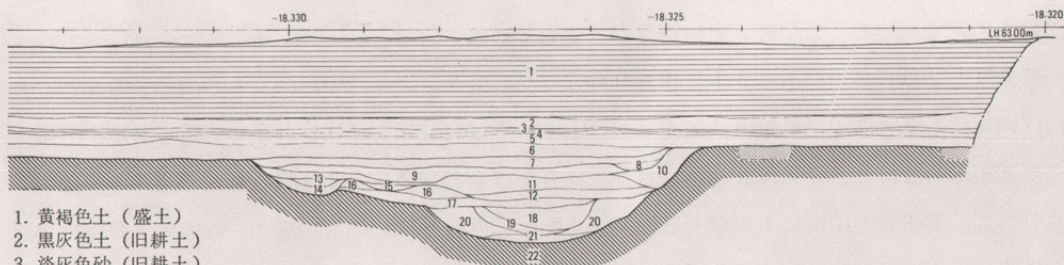
調査地は、既に約1mの深さで黄褐色土によって盛土されている。土層堆積状態は、この盛土以下順に、旧耕土、床土、黄灰色砂質土、黄褐色土と堆積し、地表下約1.4mで黄褐色砂質土の地山に達する。遺構は、この層の上面で検出した。

遺構には、東一坊坊間路、西側溝、築地塀1条がある。

S F 01 発掘区東側で検出した約7m幅の東一坊坊間路西端路面。

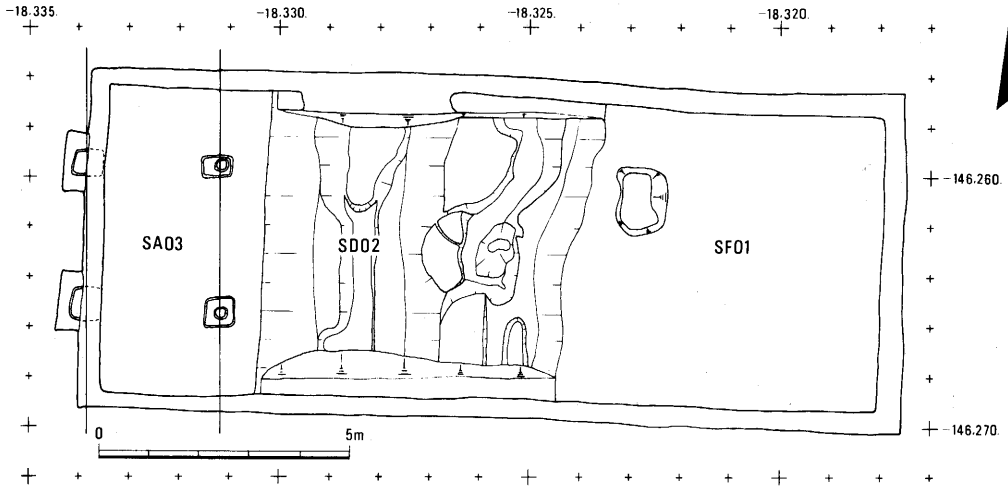
S D 02 発掘区の中央で検出した東一坊坊間路西側溝と考えられる南北素掘溝。溝は幅約6.0m、深さ1.4mで、長さ7m分を検出した。東岸部分は大きく削り取られ、幅約1.5mの段がつく。

溝の埋土は大きく上下二層に分けられる。上層は、東岸部分が大きく流水によって削り取られた後に埋まった層で茶褐色や黄褐色の粘質土が互層となって堆積する。埋土からは、奈良時代の土師器片、須恵器片や、軒平瓦（平城宮6663A、6671B、6691A型式）などが少量出土した。下



- | | | |
|---------------|-------------|----------------|
| 1. 黄褐色土（盛土） | 11. 暗茶褐色粘質土 | 17. 灰色砂質土 |
| 2. 黒灰色土（旧耕土） | 12. 灰色粘質土 | 18. 青灰色砂 |
| 3. 淡灰色砂（旧耕土） | 13. 淡茶褐色土 | 19. 暗青灰色砂 |
| 4. 黄褐色粘質土（床土） | 14. 黒灰色粘質土 | 20. 黒灰色粘質土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 15. 暗茶褐色砂質土 | 21. 青灰色粗砂 |
| 6. 黄褐色土 | 16. 黄褐色砂質土 | 22. 黄褐色砂質土（地山） |
| 7. 茶褐色粘質土 | | |
| 8. 茶褐色粘土 | | |
| 9. 明黄褐色粘質土 | | |
| 10. 黄灰色粘質土 | | |

南壁堆積土層図 1/100



検出遺構平面 1/150

層は溝の底面中央に堆積したと考えられる層で、幅は約3.0mを測る。埋土は、灰色の砂層と粘質土層が互層となって堆積したもので、最下層の青灰色粗砂からは奈良時代の軒丸瓦（平城宮6625A，6275C型式）、丸瓦，平瓦，土器，木製品などの遺物が多く出土した。

SA03 発掘区西端で検出した南北築地塀。左京三条一坊七坪の東辺築地塀と考えられ、既に盛土本体の痕跡はなく、構築時の堰板留めの添柱痕跡を2条残すのみである。柱列は1間分を検出するにとどまったが、柱穴心々間の幅は2.7m（9尺），南北3.0m（10尺）を測る。柱穴は検出面から深さ20cmと浅い。西側溝心から築地心までの距離は4.46m（15尺）となる。

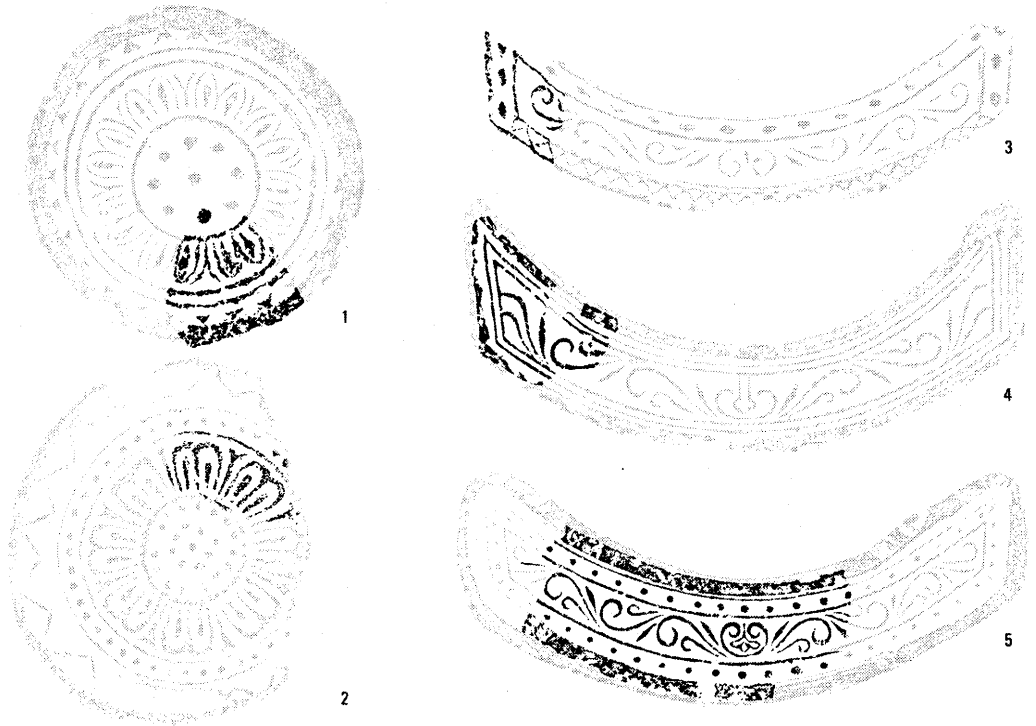
Ⅲ 出土遺物

遺物の大部分は、SD02の下層から出土したもので、奈良時代の軒瓦，平瓦，丸瓦，塼，土師器，須恵器，木製品，銭貨などである。SD02出土の遺物を，瓦類，土器類，木製品の順に記す。

瓦類 瓦類は東一坊坊間路西側溝SD02を中心にかかなりの量が出土した。通常の丸瓦，平瓦がほとんどであるが，5型式6点の軒瓦が含まれている。

軒丸瓦 2型式2点がある。1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。大きな中房に1+8の蓮子を配し，内区内縁に二条の圏線，外縁に凸鋸歯文がめぐる。平城宮6225A型式軒丸瓦と同範である。平城宮軒瓦編年の改訂^{注)}で，従来のⅡ期からⅢ期に繰り下げされている。2は藤原宮式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+9+15の蓮子を配し，外区内縁には密な珠文，外線には線鋸歯文がめぐる。平城宮6275C型式軒丸瓦と同範である。

軒平瓦 3型式4点がある。3はいわゆる「興福寺式」と称される均整唐草文軒平瓦。上から下へ巻込む中心飾りの左右に三回反転の唐草を飾る。外区には，上外区と脇区に隋円珠文を，下外区に線鋸歯文を配する。平城宮6671B型式軒平瓦と同範で，平城宮軒瓦編年のⅡ期に位置づけられている。4も三回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りは，上方に開くC字状の中心葉内に二



出土軒丸瓦・軒平瓦 1/4

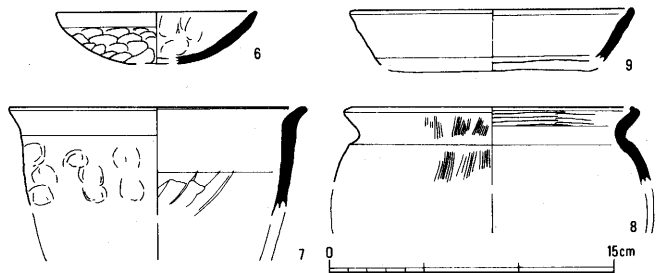
条の基軸で垂下される花頭をもち、外区には二重の界線がめぐる。平城宮6663A型式軒平瓦と同範である。5は四回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、C字状中心に葉内に杏葉形の花頭を垂飾し、外区には珠文がめぐる。平城宮6691A型式軒平瓦と同範である。恭仁宮造営時に使われたことが判明し、平城宮軒瓦編年ではⅡ期に繰り上げる改訂がなされているが、平城宮内での使用は平城遷都後のⅢ期であるとみられている。2点出土。 (中井 公)

注) 奈良国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告Ⅺ」

土器類 土器類は瓦類に比べて少量である。S D02からは、奈良時代の土師器、黒色土器、須恵器のほか、弥生土器片や古墳時代の須恵器片、埴輪片なども出土した。

奈良時代の土師器には、椀D(7)、甕A(9)、甕X(10)、皿Aがある。椀D(7)は浅い椀で、口縁部外面はへら削りし、口縁部外面上端はよこなでを施す。口縁部内面には指頭圧痕が残る。

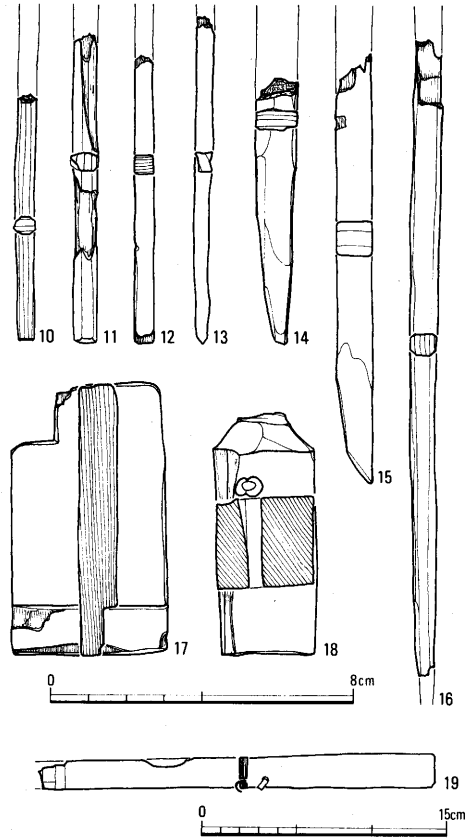
奈良時代の須恵器には、杯(10)、杯蓋、高杯、壺がある。



S D02出土土器 1/4

木製品 S D02から出土した木製品は20点を数える。これらのほとんどが一部に加工痕跡をとどめるもので、その用途は不明である。

棒状木製品(10~16)は断面が四角、もしくは円形にちかい棒。10~13は細い棒で、従来から箸と考えられているもの。直径は0.5cm前後で原形をとどめるものはない。14・15は一辺が1cm前後の角材で、一端を尖らす。16は断面が隋円形の丸棒で両端を欠く。板状木製品(17)は、木口の一端を凹状に切り欠き、他端は逆L字状に切り欠く、幅4cmの板目材。19は、断面方形(一辺2.5cm)の角材で、木口の一端を直裁し、他端はV字状の切り込みをいれて折り欠いたもの。切り込み寄りに、径0.3cmの小孔をもつ。小孔内面は焦げており、熱した金属棒のようなもので穿孔したと考えられる。折敷(20)は、隋円形の底板に丈の低い側板を綴じつけたもので側板のみが残る。底板に固定した綴り穴が下辺よりに残り、樺皮の残片をとどめる。



S D 02 出土木製品 1 / 4

錢貨として、神功開寶が1枚出土した。

VI まとめ

平城宮南面東門(壬生門)の中軸線が、東一坊坊間路心に当たると仮定して坊間路の幅員を考えてみる。S D02心は国土方眼位を介して壬生門心から西に9.44mの位置にあたるが、平城京の条坊は朱雀大路心で国土方眼位に対して、北で西へ $0^{\circ} 15'41''$ 振れていることから、坊間路も同様振れていると仮定して、修正を加えると東西距離は10.65mとなり、西側溝心々間の復元距離は約21.3mとなる。また、S A03心から築地心々間の復元距離を求めると約30.2mとなり、延喜式にみられる平安京の一坊坊間路の築地心々間距離10丈 \approx 30mに近い値を示す。(篠原 豊一)

地点名	X	Y	備考
壬生門心	-145,994.10	- 18,318.60	平城宮第122次調査
S D 02 心	-146,260.10	- 18,328.04	今回の調査
S A 03 心	-146,260.10	- 18,332.50	同

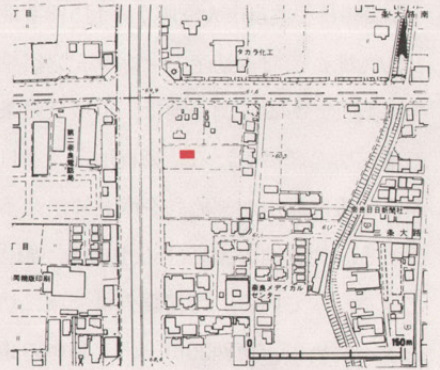
計測座標表

注1) 奈良市教育委員会 「平城京朱雀大路発掘調査報告」 1982

注2) 奈良市 「平城京朱雀大路発掘調査報告」 1974

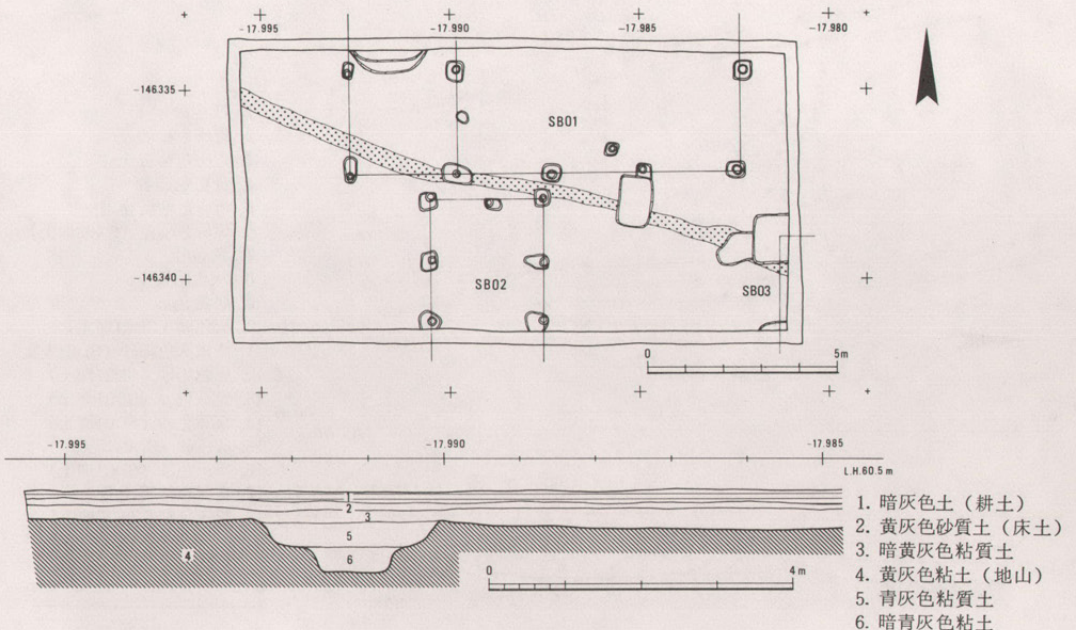
9. 平城京左京三条二坊三坪の調査

本調査は、奈良市三条大路一丁目600番地の1において実施した仲西英次氏届出の店舗新築工事に伴う事前調査である。調査地は、平城京条坊復元では左京三条二坊三坪の中央部にあたり、坪内分割施設の存在も想定された。発掘区は、東西15m、南北8m（面積120㎡）である。調査期間は、昭和58年8月23日から9月10日までである。



発掘区の位置 1/7500

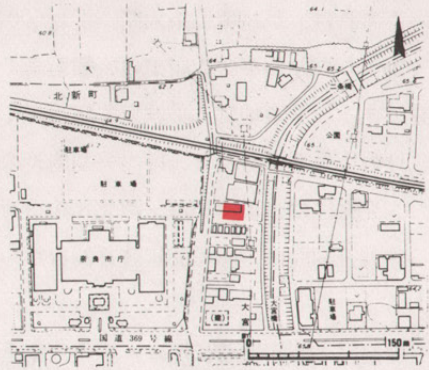
発掘区の土層堆積状況は、耕土、床土、暗黄灰色粘質土と順次堆積し、地表下約50cmで地山である黄灰色粘土に達する。遺構は黄灰色粘土上面で検出した。検出遺構は建物3棟、土壇2である。建物S B 01は、発掘区北側で検出した1間以上×4間の西廂南北棟建物である。柱間は、桁行2.8m、梁行2.4m等間となり、廂部分は柱間2.8mである。建物S B 02は、発掘区南側で検出した2間以上×2間の南北棟建物である。柱間は桁行1.6m等間、梁行1.6m等間となる。S B 03は、発掘区東南隅で検出した南北柱列で、柱間は2.5m程度となろう。東西、南北方向へ伸びる建物の北西隅にあたるものと考えられる。当初想定した坪内分割施設は確認できなかった。（立石 堅志）



検出遺構平面図 1/200・北壁堆積土層図 1/100

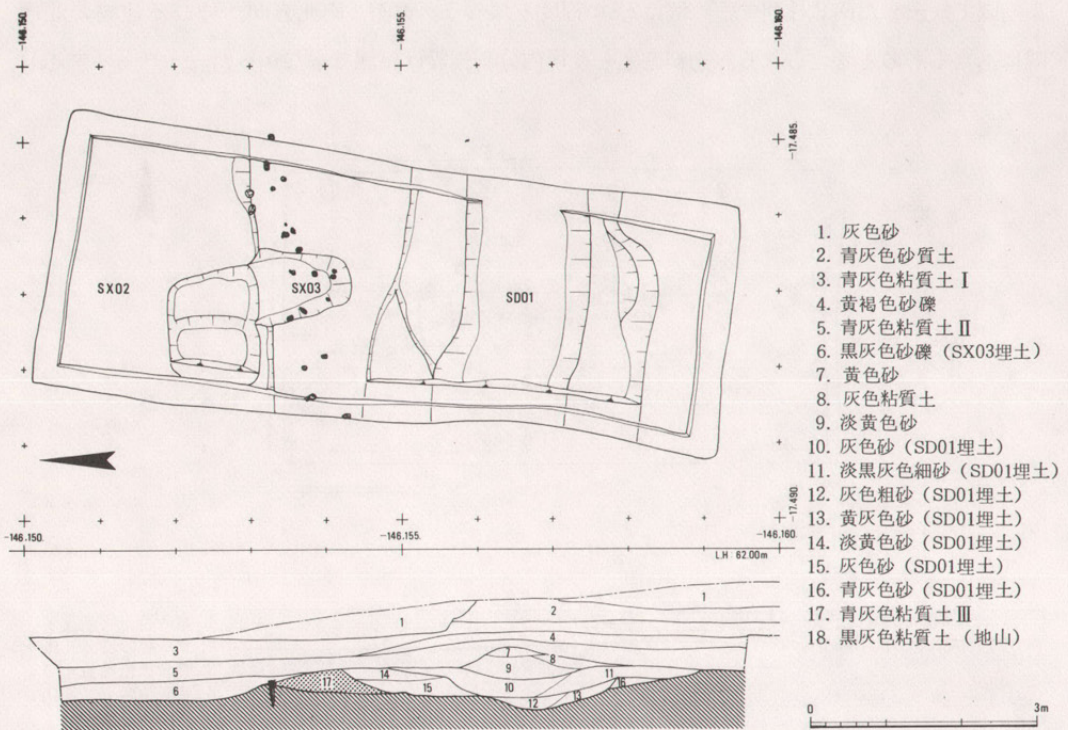
10. 平城京左京三条三坊二坪の調査

本調査は、奈良市大宮町7丁目518番地の1他で行なった(株)三交不動産のマンション建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京三条三坊二坪にあたる。調査地は、春日山に水源を發し西流する佐保川が、流れを南北にかえる自然堤防上に位置する。調査地の標高は66.4mで、周辺よりも約3mほど高くなっている。当初調査は、東二坊大路東側溝を確認するために、東西20m、南北15mの東西トレンチ(発掘面積300㎡)を設定して行なった。しかし、左京三条



発掘区の位置 1/7500

二坊十五坪の調査や今回のマンション建設会社が行なった事前のボーリング調査でも、遺構面と考えられる層が、地表下約4.4mの深さで検出されている。このためトレンチを掘り下げるにしたがって傾斜を充分にとったため、遺構検出面での調査面積は、東西3.8m、南北9.0m(発掘



検出遺構平面図・東壁堆積土層図 1/100

面積34.2㎡)となった。調査の期間は、昭和58年11月1日から11月25日までである。

発掘区の土層堆積状態は、地表面から約1mは暗灰色土(盛土)、黒色土(旧耕土)、暗灰色粘質土(床土)となっており、この層以下遺構検出面までの約3.1mは、自然堤防を形成している灰色砂層と青灰色粘質土層が互層をなして堆積している。これらの灰色砂層の中からは、中近世の土師器羽釜片や陶磁器片などが出土した。遺構検出面は黒灰色粘質土の地山である。検出した遺構には、溝1条、木杭列などがある。

S D 01 発掘区の南側で検出した東西素掘り溝である。溝の幅は最大4.2m、深さ0.4mで、長さ3.2m分検出した。溝の埋土は、灰色砂層と黄灰色砂層が互層となって堆積する。最下層の灰色砂、青灰色砂からは、古墳時代の土師器と思われる高杯片が出土した。この溝は、左京三条二坊の調査で検出された古墳時代の溝に流れるものと考えられる。

S X 02 発掘区の北側で検出した東西方向の溝の南岸と考えられる地山の落ち。埋土は黒灰色の砂礫層で奈良時代の瓦片、土器片や中世の瓦器片、陶磁器片を含む。

S X 03 S D 01とS X 02の間で検出した東西に並ぶ木杭列で、長さ3.5m分を検出した。木杭は19本をかぞえ、いずれも広葉樹の丸棒で、先端を尖らして打ち込んだものである。S D 01かS X 02の護岸を目的として打ち込まれたものと考えられる。(篠原 豊一)

注) 『平城京左京三条二坊奈良市庁舎建設地発掘調査報告』 奈良市 1975

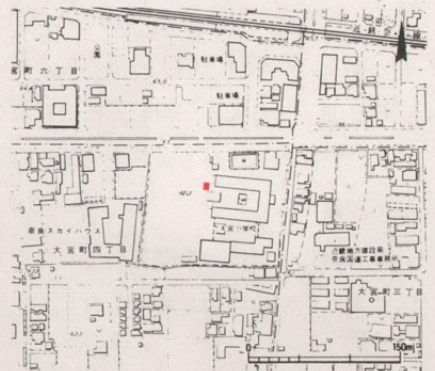
11. 平城京左京三条二坊十四坪の調査

本調査は、奈良市大宮町4丁目223番地の1において実施した、奈良市立大宮小学校校舎増築工事に伴う事前発掘調査である。発掘区は、南北10m、東西4.4m(面積44㎡)である。調査期間は、昭和58年7月13日から、7月23日にかけてである。

発掘区の層位は、現地表から約80cmは校庭整備の際の盛土であり、以下、旧耕土、床土と続き、その下は砂礫層が続いて堆積している。砂礫層の堆積状況を確認するため、発掘区西側を幅1.5mで南北に、更に約1m掘り

下げたが、同様に砂礫層、砂層が続き、かなりの湧水があったため掘り下げを断念した。発掘区北西端で、茶褐色粘質土の地山の落ち込みを検出した。砂礫層は、この地山を浸蝕した形で堆積している。調査地は、遺存地割等の検討から、旧佐保川の流路に推定される地域にあたり、今回検出した地山の落ちは、旧佐保川の右岸の落ちにあたると思われる。(立石 堅志)

注) 岸俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市 1974

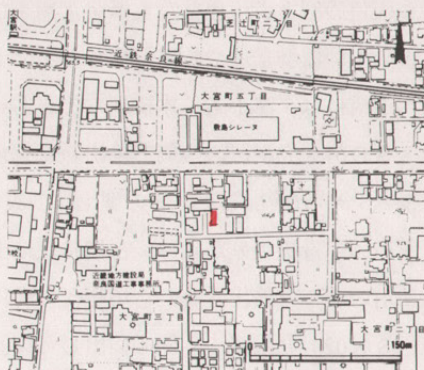


発掘区の位置 1/7500

12. 平城京左京三条四坊六坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大宮町三丁目161番地の1・3で実施した、大西初雄氏届出のマンション建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元で平城京左京三条四坊六坪のほぼ中央部に位置している。調査は調査地南側の空地部分に、東西50m、南北12.3mの発掘区（発掘面積61.5㎡）を設定して行なった。調査の期間は、昭和59年3月1日から3月10日までである。



発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

発掘区は、既に駐車場として使用されていたために、地表下約0.6mまで黄灰色土によって盛土されている。土層堆積状態はこの層以下順に、旧耕土、床土、淡黄灰色砂質土と堆積し、地表下約0.9mで黄灰色粘質土の地山に達する。遺構はこの上面で検出した。

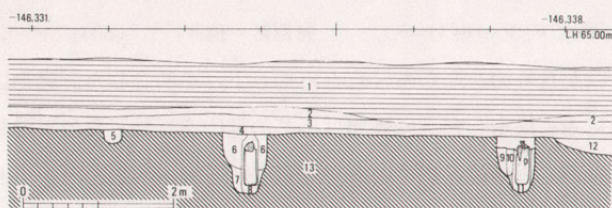
遺構には、柱列2条、掘立柱建物8棟、井戸1基、土塀1がある。

SA01 発掘区の中央で検出した5間（10.2m）以上の南北柱列で、柱間は1.95～2.2mと不揃いである。主軸は、国土方眼方位北に対して西偏する。

SA02 SA01と重複する4間（7.5m）以上の南北柱列で、柱間は1.1～2.0mと不揃いである。柱穴掘形は一辺0.3m前後とSA01に比べて小さく、重複関係からSA01より新しいことがわかる。主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

SB03 SB02と重複して検出した2間（3.9m）以上の南北柱列で、柱穴が北へ伸びないため、発掘区西へ広がる建物と考えられる。柱間は1.95m等間である。主軸は国土方眼方位北に対して西偏する。

SB04 発掘区の東隅で検出した1間（約2m）以上の柱列で、柱穴が南へ伸びないため、発掘区北東へ広がる建物と考えられる。主軸は国土方眼方位北に対して西偏する。



東壁堆積土層図 1/100

1. 黄灰色土（盛土）
2. 黒灰色土（旧耕土）
3. 灰色砂質土（床土）
4. 淡黄灰色砂質土
5. 暗茶褐色土（SB09柱穴埋土）
6. 茶褐色粘質土（SB09柱穴埋土）
7. 黄褐色粘質土（SB09柱穴埋土）
8. 灰色粘質土（SB09柱穴埋土）
9. 灰色粘質土（SB09柱穴埋土）
10. 茶灰色土（SB09床柱埋土）
11. 灰色粘質土（SB09柱穴埋土）
12. 茶褐色粘質土（SK13埋土）
13. 黄灰色粘質土（地山）

S B 05 S B 04と重複して検出した南北2間(約3.6m)以上、東西1間(約2.4m)以上の南廂をもつ建物で、廂の出は1.5mである。主軸は、国土方眼方位北に対して西偏する。

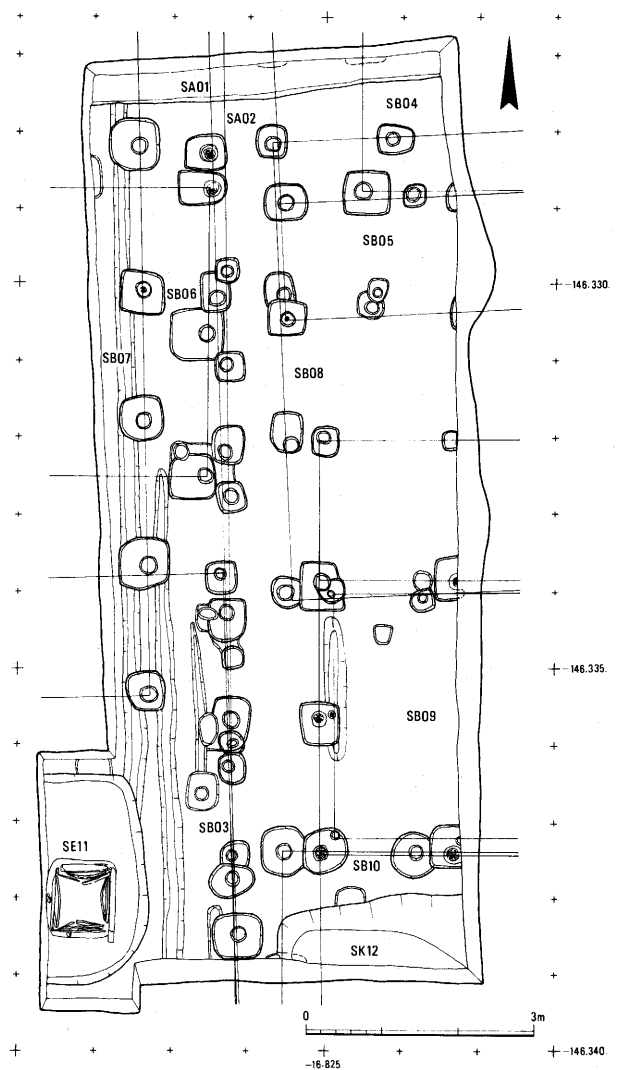
S B 06 S B 05の西で検出した桁行1間(1.8m)以上、梁行2間(3.7m)の東西棟で、梁行柱間は1.85m等間である。主軸は、国土方眼方位と一致する。重複関係からS A 01より古いことがわかる。

S B 07 S B 06の西で検出した4間(7.05m)以上の南北柱列で、柱穴が南へ伸びないため発掘区西へ広がる南北棟と考えられる。北から3間の柱間は1.8m等間であるが、1間は1.65mと短い。主軸は国土方眼方位と一致。

S B 08 S B 05の南で検出した南北3間(5.85m)、東西1間(1.65m)以上の建物で、3間×2間の南北棟と考えられる。南北柱間は1.95m等間である。重複関係からS B 05よりも古いことがわかる。主軸は、国土方眼方位北に対して西偏する。

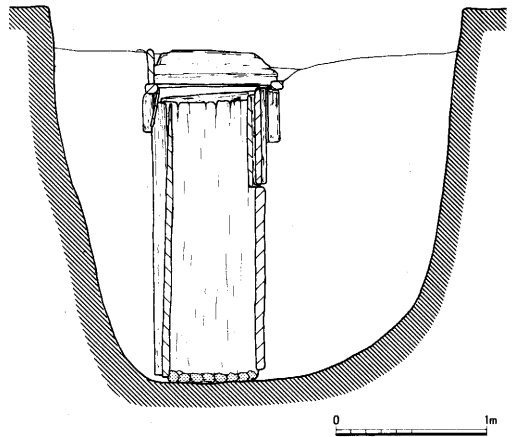
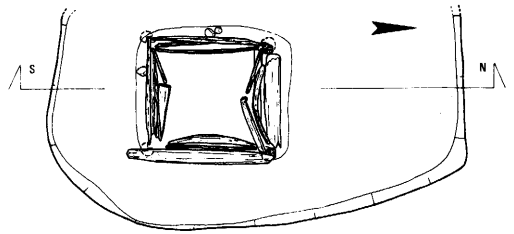
S B 09 S B 08の南で検出した。桁行1間(1.8m)以上、梁行3間(5.4m)以上の北廂をもつ東西棟で、両面廂の建物と考えられる。身舎柱間は1.8m等間で、廂の出も1.8mである。廂の柱穴掘形は、身舎の柱穴掘形よりも小さく浅い。身舎の柱穴には床束の痕跡が残り、西妻中央の柱穴には、柱痕跡の東側約15cmの所に床束の柱根が残る。このことから、身舎部分には床が張られていたことが考えられる。床束の柱間は、桁行方向で1.65m等間、梁行方向で1.5m等間である。主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

S B 10 発掘区の南端で検出した東西1間(1.65m)以上、南北1間(約1.5m)の建物で、発掘区南へ広がる。主軸は、ほぼ国土方眼方位と一致する。重複関係からS B 09より古いことがわかる。



検出遺構平面図

S E 11 発掘区南西隅で検出した南北2.8m、東西1.4m以上の隅丸方形の掘形をもつ井戸で、検出面から深さ2.5mを測る。掘形南寄りに方形の井戸枠が遺存する。井戸枠は上下二段に構築され、下段は縦板組の井戸枠でその上に井籠組の井戸枠を据える。縦板組の井戸枠は内法一辺65cmで井戸枠の遺存状態は良く、底部から178cmを測る。東西側板はいずれも1枚板で、南側板をはさみ込み、側面に北側板をあてがい、仕口をもたずに組み合わせる。南側板は2枚並べたもの、北側板は上下に2枚重ねたものである。縦板の隙間は、裏から1重の縦板をあてて塞いでいる。井戸枠底部には拳大の自然石を敷きつめて下端を固定する。縦板組上端は外側の四方から横板をあてがい、断面L字状の溝を切り込んだ長さ30cm前後の柱でその四隅を固定する。西側板は最大で幅75cm、長さ183



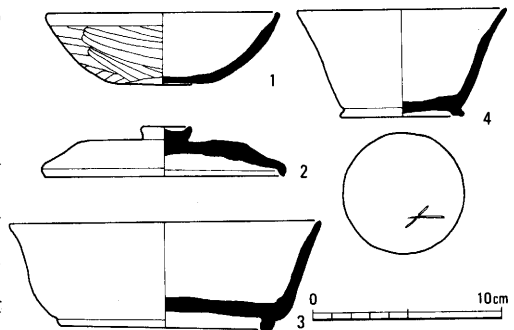
S E 11平面・立面図

cm、厚さ4cmを測る。縦板組の上端部四辺に幅10cm、厚さ5cm前後の角材を置き、井籠組の井戸枠を据える。井戸枠の遺存状態は悪く、最下段のみが残るが、腐蝕が著しくその端部の仕口は不明である。側板上面には履納が残る。枠内埋土からは奈良時代末の遺物が出土した。

S K 12 発掘区南端で検出した東西2.5m以上、南北1.0m以上の土壌で発掘区南へ延びる。土壌は南へ向ってゆるやかに斜傾し、深さ0.3mとなる。埋土からは奈良時代の土器が少量出土した。重複関係からS B 10よりも古いことがわかる。

VI 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、木製品などがある。いずれも奈良時代の遺物で細片が多い。S E 11の枠内埋土の遺物には、軒平瓦（平城宮6663F型式）、丸瓦、平瓦、土師器碗A（1）、須恵器杯B（3）・杯蓋（2）、曲物底板などがある。1は底部外面から口縁部までをへら削りしたのち、口縁部上端によこなでを加える。4はS K 12から出土した須恵器碗Bで杯Bを深い形態にしたもので、口縁部がやや外反する。底部外面には「×」のへら記号がある。



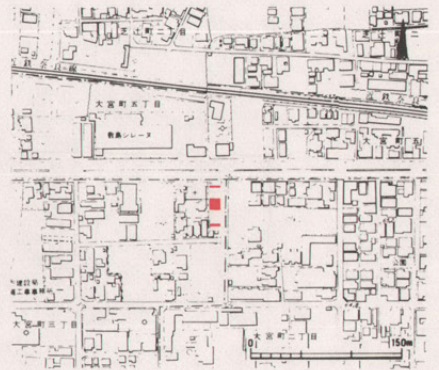
S E 11・S K 12出土土器 1 / 4

（篠原 豊一）

13. 平城京左京三条四坊六・十一坪(東四坊坊間路)の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大宮町3丁目154番地の1において行ったエヌケー企画のビル建設工事前の事前調査である。調査地は、東四坊坊間路の遺存地割を留める南北に長い水田で、坊間路の確認を目的として、南北9m、東西13mの発掘区(面積117㎡)を設定し、南端と北端にもそれぞれ幅1m、長さ14mの東西方向のトレンチを設定し、調査を行った。調査期間は昭和59年2月1日から2月9日までである。



発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

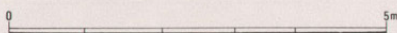
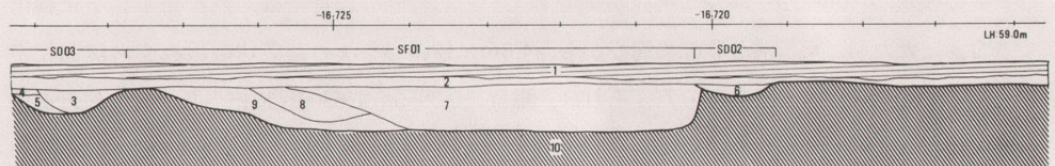
発掘区の層序は、耕土の下に灰褐色砂質土が約10cmの厚さであるだけで、すぐ地山である茶褐色粘質土となる。東四坊坊間路とその両側溝はこの層の上面で検出した。

S F 01 左京三条四坊の六坪と十一坪とを画する東四坊坊間路。発掘区北端では、幅約7mにわたり、地山面が、北方へ下がり窪地になっており、この部分は、造成、盛土して路面としている。発掘区内での路面幅は7.6~8.4mを測る。

S D 02 坊間路S F 01の東側溝と考えられる南北方向の素掘り溝(幅1.2~1.3m、深さ10~15cm)で、削平のため底部分のみが遺存していた。埋土から若干の瓦類、土器類が出土した。

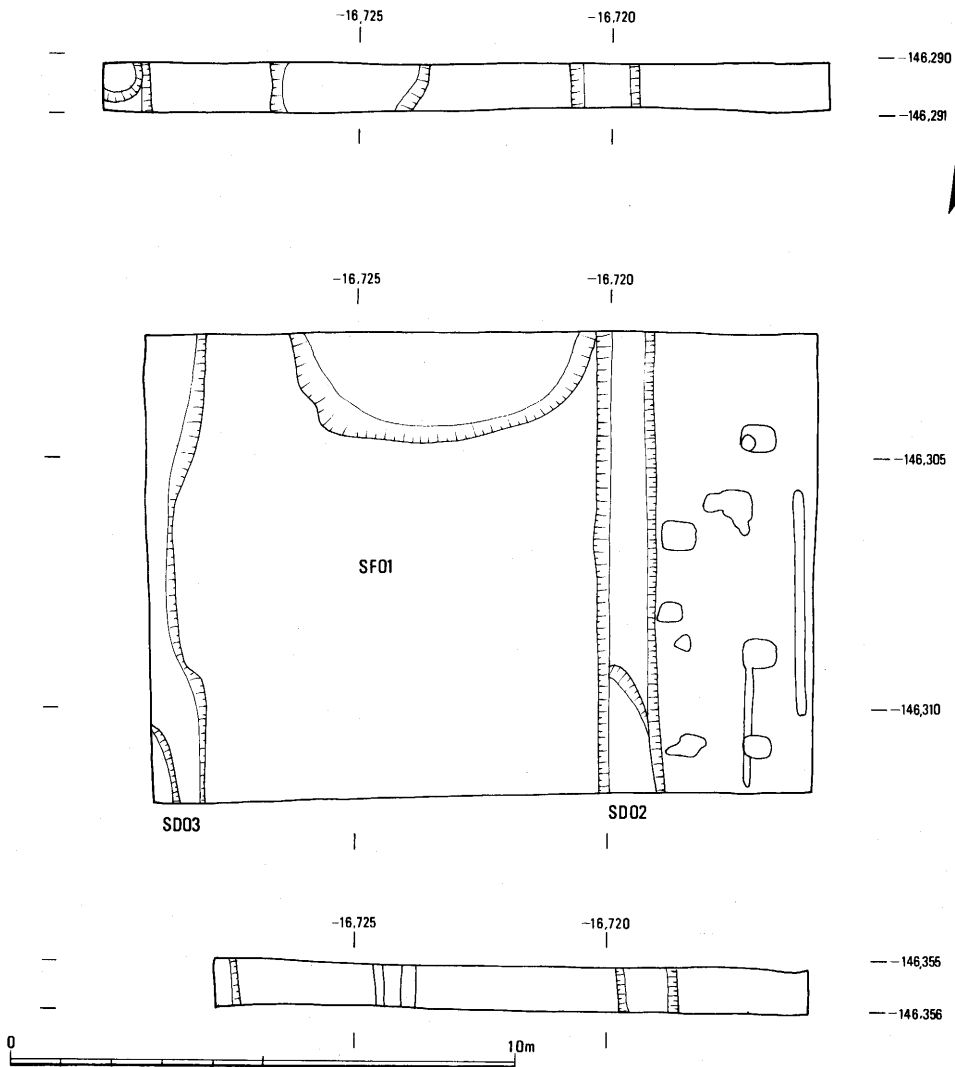
S D 03 坊間路S F 01の西側溝と考えられる南北方向の素掘り溝。発掘区西端には隣接地のブロック塀があり、このため、溝の西岸は検出できなかった。溝S D 02と同じく削平のため、ほとんど痕跡程度にしか遺存しておらず、埋土中からも若干の土器片が出土したにすぎない。

なお、東側溝S D 02の東側において、柱穴をいくつか検出したが、削平のためか、浅く、対になるものもなく、柵、塀等の存在した可能性をあげておくにとどめたい。



- | | |
|------------|----------------|
| 1. 耕土 | 6. 青灰色砂質土 |
| 2. 灰褐色砂質土 | 7. 黄褐色粘質土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 8. 茶灰色粘質土 |
| 4. 黄褐色粘質土 | 9. 灰黄色砂質土 |
| 5. 暗灰褐色粘質土 | 10. 茶褐色粘質土(地山) |

発掘区北壁堆積土層図 1 / 100



検出遺構平面図 1 / 150

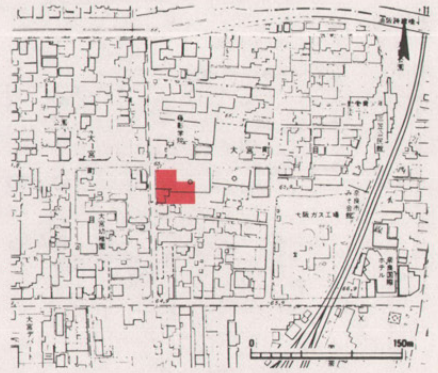
東四坊坊間路については、昨年度、左京四條四坊九坪^{注)}で、すでに検出されており、その両側溝心々間の後員が9.0mであることが明らかにされている。今回の調査では、西側溝が完全に検出できなかったため、東側溝SD02の溝心から西4.5mに道路心を決め、条坊の振れを考慮した上で、朱雀門心との距離を求めてみた。それは、単位尺0.2953mで6300尺に相当し、検出した道路SF01は、朱雀門心(朱雀大路心)から、三坊(5400尺)と二坪(900尺)東に設定された東四坊坊間路であることが裏づけられる。またその路心と四條四坊で検出された路心とは、国土方眼方位北に対して0°04'程度西偏していることがうかがえ、朱雀大路などの振れよりもやや小さな数値を得ることができる。(森下 恵介)

注) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』1983

14. 平城京左京三条五坊四坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大宮町1丁目654番地他において近鉄不動産株式会社が計画したマンション建設工事に伴って実施した事前調査である。調査地は、国鉄奈良駅にほど近い市街地にあり、平城京の条坊復元では左京（外京）三条五坊四坪の北西部に相当する。調査前には自動車会社の整備工場として利用されていたために、地下遺構がかなり失なわれている恐れはあったが、規模の大きい再開発であることから、計画建物の位置に1000㎡の発掘区を設定して調査を行なった。調査期間は、昭和58年11月4日から12月14日までである。



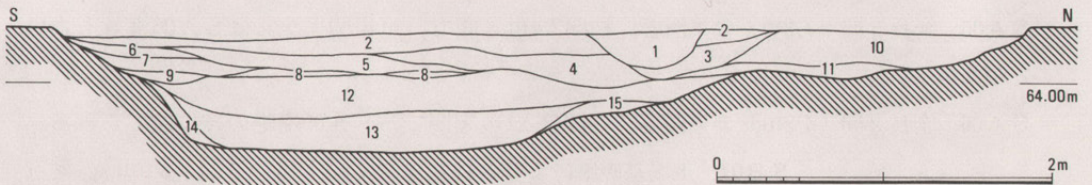
発掘区的位置 1/7500

II 検出遺構

まず、発掘区内の堆積土層について概観しておく。調査地は工場跡地であるため地表から50cmほどまではコークスガラの造成土がある。以下順に、黒色腐蝕土（旧耕土）、灰色砂質土、灰褐色土と続き、地表下約83cmで黄灰色粘土の地山に達する。遺構を検出したのはこの地山上面においてである。工場関係の基礎壁のために地山の掘抜かれた部分が数箇所あったが、遺構の残存状態は比較的良好であった。主な検出遺構は、小路側溝1条、掘立柱塀4条、掘立柱建物9棟などであるが、このほかに弥生時代から古墳時代にかけての流路を確認している。

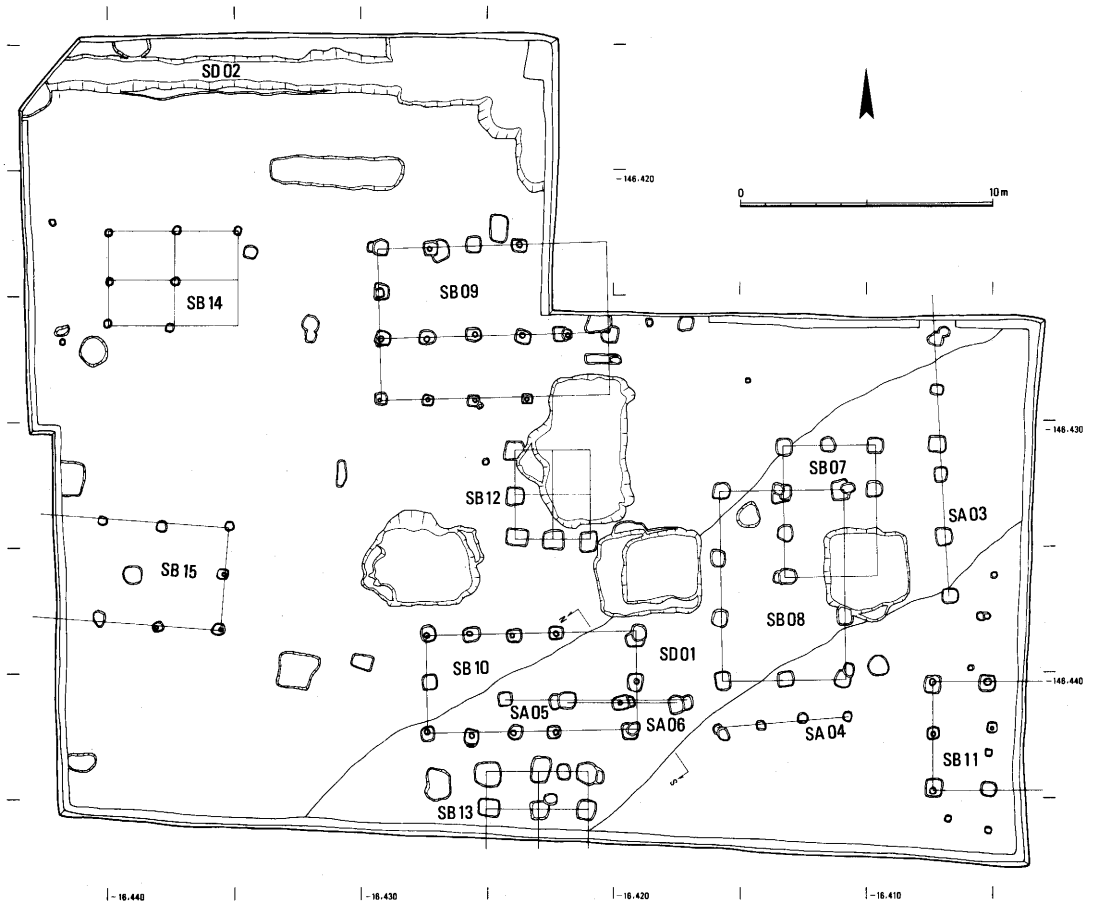
S D 01 発掘区内を北東から南北にかけて流れる流路。幅6～8mを測り、河底は、北岸から南1.8～2mの間は30cmほどの深さで、その南で段となり、南側では70～90cmと深い。埋土は、灰色もしくは褐色系の粗砂と礫とが互層になった堆積で、中からは弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての土器、木製品が出土した。

S D 02 発掘区北端で検出した東西方向の素掘り溝で、左京三条五坊三、四坪間の坪境小路南



- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 淡茶褐色砂 | 6. 淡灰色土 | 11. 黄褐色粗砂 |
| 2. 淡青灰色細砂 | 7. 灰白色土 | 12. 淡灰色粗砂 |
| 3. 淡青灰色砂 | 8. 黄褐色砂礫 | 13. 淡灰色粗砂 |
| 4. 淡黄褐色砂礫 | 9. 紫灰色粘質土 | 14. 黒灰色粘土 |
| 5. 灰褐色砂礫 | 10. 褐色粗砂 | 15. 黒灰色砂 |

S D 01堆積土層図



検出遺構平面図 1/300

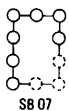
側溝に相当する。幅1.4~1.8m、深さ30cm内外で、溝内には灰褐色砂質土が堆積する。少量の土師器、須恵器片が出土した。

SA03 柱間4間(10.1m)以上の南北塀で、発掘区外北へのびる。柱間は2.1~3.0mと不揃いである。主軸は国土方眼方位に対して西へ振れている。

SA04 全長3間(5.4m)の東西塀。柱間1.8m等間で、主軸は方眼方位東に対し北偏する。

SA05 全長3間(7.2m)の東西塀。柱間2.4m等間で、重複関係からはSA06よりも古いことがわかる。

SA06 全長2間(4.2m)の東西塀。柱間は2.1m等間で、SA05廃絶の後に建てられる。

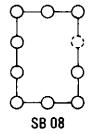


SB07

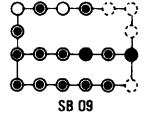
SB07 工場基礎壊により3柱穴を欠くが、桁行3間(5.9m)、梁行2間(3.6m)の南北棟に復元できる。柱間は桁行、梁行とも1.8m等間である。重複関係からSB08よりは新しいことがわかる。建物の主軸は方眼方位北に対して西へ振れている。

※ 建物模式図凡例 ●柱根残存 ●柱根跡を確認 ○掘形のみ確認 ○推定 (上が北を示す)

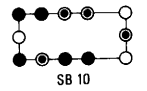
S B 08 桁行3間(7.5m), 梁行2間(4.8m)の南北棟。柱間な桁行2.5m, 梁行2.4m等間である。重複関係からS B 07の前身建物であることがわかる。建物主軸は方眼方位北に対して西偏する。



S B 09 桁行5間(9.3m), 梁行3間(6.0m)で, 南廂のつく東西棟。柱間は, 桁行が1.8~1.9mと若干不揃いであるが, 身舎梁行は1.8mの等間, 廂の出は2.4mである。身舎の2柱穴に柱根が残存したが, うち東南隅柱穴のものは角柱であった。建物主軸は方眼方位北に対して西偏する。



S B 10 桁行4間(8.2m), 梁行2間(3.8m)の東西棟。柱間は梁行が1.9m等間, 桁行は西から三間分は1.7m等間であるが, 4間目は3.1mと広い。5柱穴に柱根が残存した。建物主軸は方眼方位北に対して西偏する。



S B 11 桁行1間(2.1m)以上, 梁行2間(4.2m)の東西棟で, 発掘区外東へ続く。梁行柱間は2.1mの等間である。2柱穴に柱根が残存した。



S B 12 工場の基礎場で4柱穴を欠くが, 東西2間(3.0m), 南北2間(3.6m)の建物に復元できる。柱間は東西1.5m, 南北1.8m等間である。柱穴掘形が大きく柱間が狭いことからみて, 総柱の建物であった公算が高い。

S B 13 東西2間(4.2m), 南北1間(1.5m)以上の建物で, 発掘区外南へ続く。東西の柱間は2.1mの等間である。現状での柱穴の配列や掘形の規模からみて, S B 12同様に総柱建物となる可能性がある。



S B 14 東西2間(5.0m), 南北2間(3.6m)の総柱建物。柱間は概ね東西2.5m, 南北1.8m等間。柱穴は小さくて浅く, 削平で2柱穴を欠く。

S B 15 桁行2間(4.9m)以上, 梁行2間(4.2m)の東西棟。柱間は, 梁行はほぼ2.1mの等間であるが, 桁行は東から2.6~2.3mと不揃いである。柱穴は小さく, 不整形のものがある。主軸は方眼方位北に対し東偏する。



ところで, 上述の建物は, 主軸方向の相異によって2つのグループに大別してとらえることができる。すなわち, 建物主軸が方眼方位にはほぼ一致するもの(S B 11・12・13・14)と, 方眼方位北に対して西偏するもの(S B 07・08・09・10)とである。これらは建物の時期差を反映しものであろうが, その前後関係は明らかにし得ずにいる。ただそうした中で, 後者の建物群については, 主屋と思われる廂つき建物を中心に, 付属屋が内庭をつくるような「コ」の字型配置の同じ一群であるとみることも可能ではある。いずれにせよ。建物自体が小規模なうえにその配置にもさほどの計画性が認められない状態からすれば, この坪はいくつかの宅地に分割されて利用されていたものと考えるのが妥当なのではあるまいか。



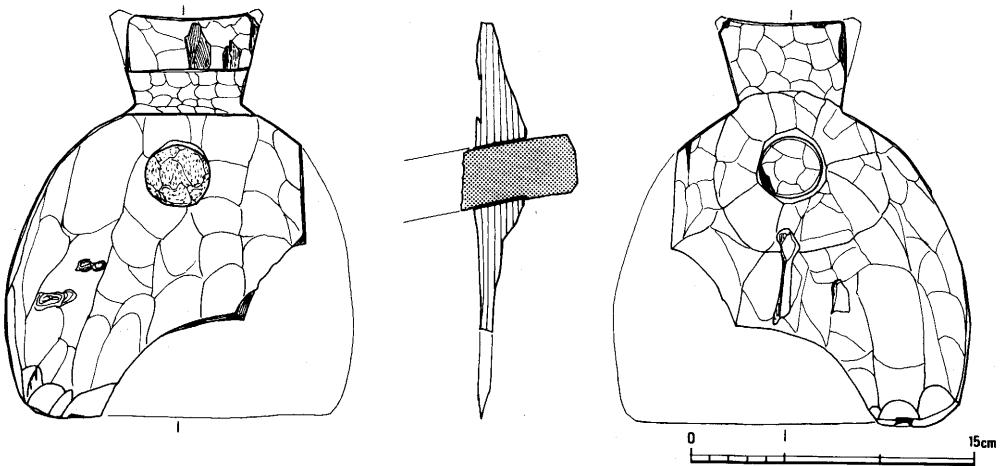
(中井 公)

VI 出土遺物

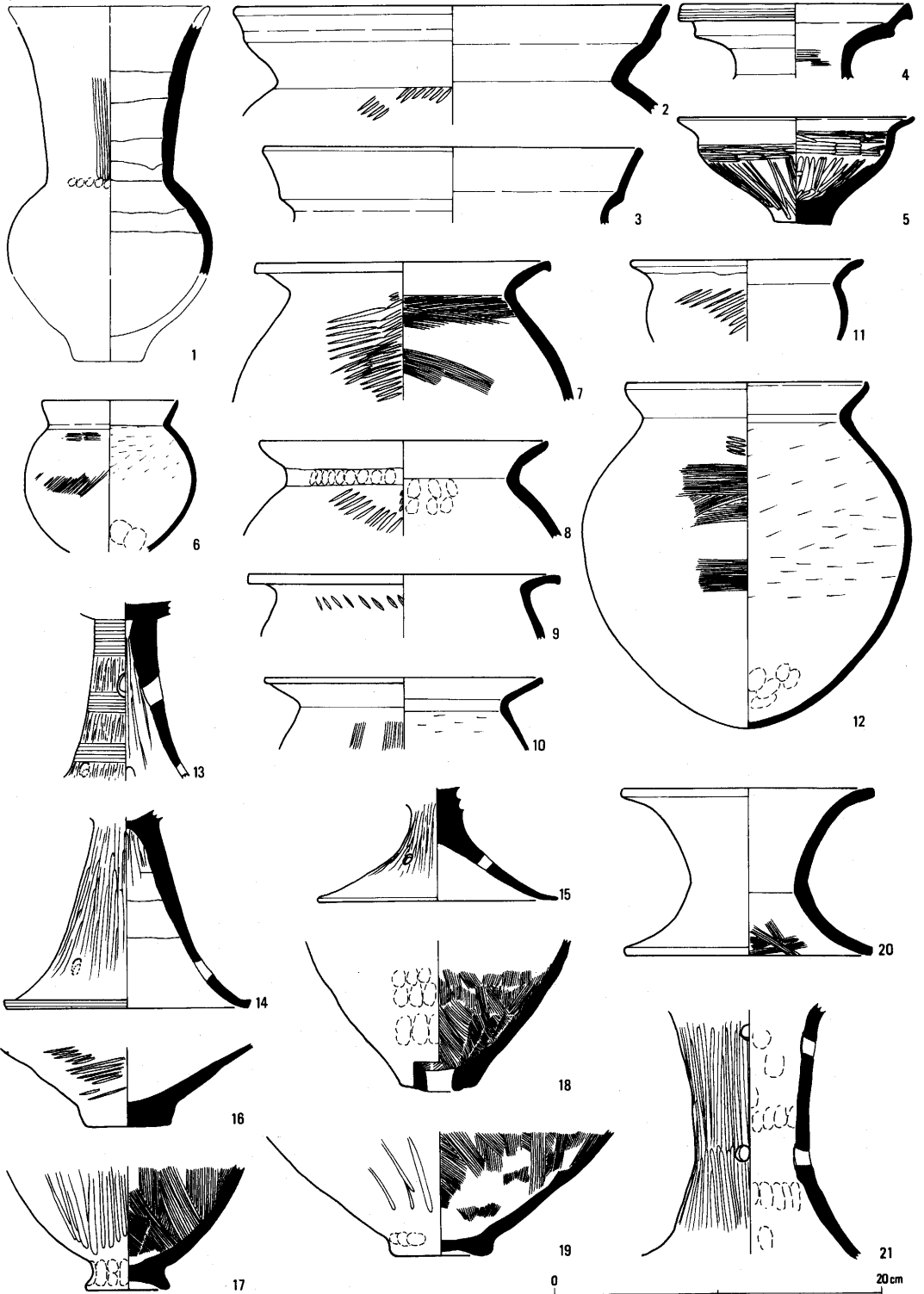
遺構面を覆う包含層，小路側溝S D02からは，奈良時代の土器類，瓦が出土しているが，小片が多く量も少ない。流路S D01の灰色砂礫層からは，弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。木製広楯の他，土器類では，壺・甕・高杯・鉢・器台など器種も多く，完形品も含まれているため以下報告する。

木製広楯 直径3cmの柄が長さ6cm分残存する。身部は長さ21cm，幅18cm，厚さ1.0cmを測る。身の上部はくびれ，その手前側の面に断面台形の切り欠きをもつ。着柄部の突起は円形を呈し，着柄面角度は約80度を測る。

土器類 1は，球形の体部と外反ぎみにひらく口頸部をもつ長頸壺である。内面には，成形時の粘土紐の痕跡が残る。外面には，体部と頸部の接合部に指頭圧痕が残り，頸部外面にはへら磨きを行なっている。2・3・4は，いわゆる二重口縁部をもつ壺である。5は，底部からゆるやかに内彎して立ち上がる体部と，斜め上方にひろがる口縁部をもつ鉢である。体部には内外面ともへら磨きをていねいに行なっている。甕には，内面はへら削りし，外面にはけ目を施すもの（6・10・12），外面に叩き目を残し，内面にはけ目を施すもの（7）などがある。前者は古墳時代初頭（庄内～布留式），後者は弥生時代後期にその時期が求められる。高杯には，円筒状の脚部をもち三段に分け沈線をもつもの（13），裾部が大きく広がるもの（14・15）がある。いずれも外面にへら磨きを施している。13は，脚部上方に1ヶ所，下方に3ヶ所，14・15は，下方に3ヶ所穿孔する。器台には，裾部より直接口縁部がひろくもの（20）と，直線的な体部にひろがる口縁部と裾部のつくもの（21）とがある。21は，外面にへら磨きを行ない，体部上下にそれぞれ3ヶ所穿孔する。土器底部には，平底のもの（16），あげ底のもの（17），輪状底のもの（19）などがみられる。18は，底部に穿孔，有孔鉢であろう。（森下 恵介・服部 芳人）



S D01出土木製品 1/4



S D 01出土土器 1/4

15. 平城京左京四条二坊七坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市四条大路1丁目772番地（森田繁一氏届出）及び同742番地（扇田嫩子氏届出）における住宅建築工事に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では左京四条二坊七坪に相当し、東二坊坊間路をはさんで東には田村第が位置する。調査地が同坪内で隣接した箇所にあるため併せて報告する。前者は、坪内の東南に位置しており、敷地の東側に、東二坊坊間路の確認を目的として、東西8.0m、南北26.0mの発掘区（南発掘区）を設定した。発掘面積は208㎡。調査期間は昭和58年6月24日から7月22日までである。后者は、坪内の中央東側に位置し、前調査にひきつづき、坊間路の検出が予想された。敷地東半部に東西20m、南北10mの発掘区（北発掘区）を設定し、さらに、七坪内の様相を知るために、東西1.5m、南北33mのトレンチを拡張した。発掘面積は、249.5㎡である。調査期間は、昭和59年1月26日から3月3日までである。



発掘区 の 位置 1/3000

II 検出遺構

今回の調査で検出した遺構には、東二坊坊間路、同西側溝、掘立柱建物、柱列、井戸、土壇などがある。拡張区は、菰川の氾濫のため顕著な遺構は検出できなかった。

基本的な層序は、耕土の下、茶褐色砂質土(約0.2m)、褐色土(約0.2m)が堆積し、地表から約0.5mで黄褐色粘土の地山へと至る。だが、両発掘区とも中央部以西は地山が徐々に下降し、拡張区両端では、地表から約0.9mと深い。遺構検出面は、地山上面であるがこの上に赤褐色土の整地土が約0.2mの厚さで部分的に堆積し、この面から切り込む柱穴もある。

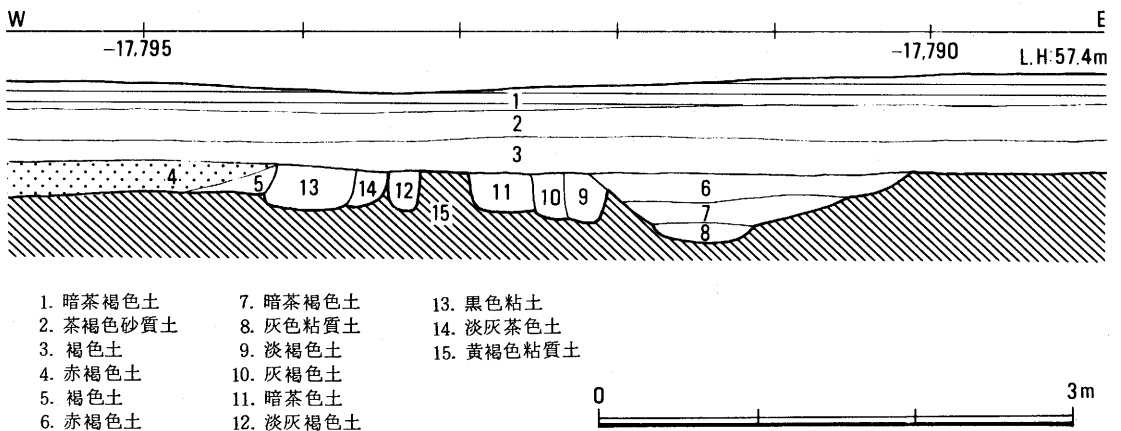
S F 01 七坪と十一坪を画す南北方向の道路で東二坊坊間路と考えられる。地山上面(黄褐色粘質土)が、路面となっている。路肩から、4.4mまでを検出した。

S D 02 S F 01を画す南北方向の素掘り溝で、坊間路西側溝と考えられる。幅1.6~1.9mを測る。溝底は、東肩から西へ約0.8mの間は、0.1~0.3mの深さを持ち、さらにこの西側を0.2m深く掘り下げ、検出面からの深さは0.5mとなる。埋土から、軒丸瓦(平城宮6227D型式)、軒平瓦(平城宮6675A・6685A型式)及び奈良時代末頃の土器が出土した。

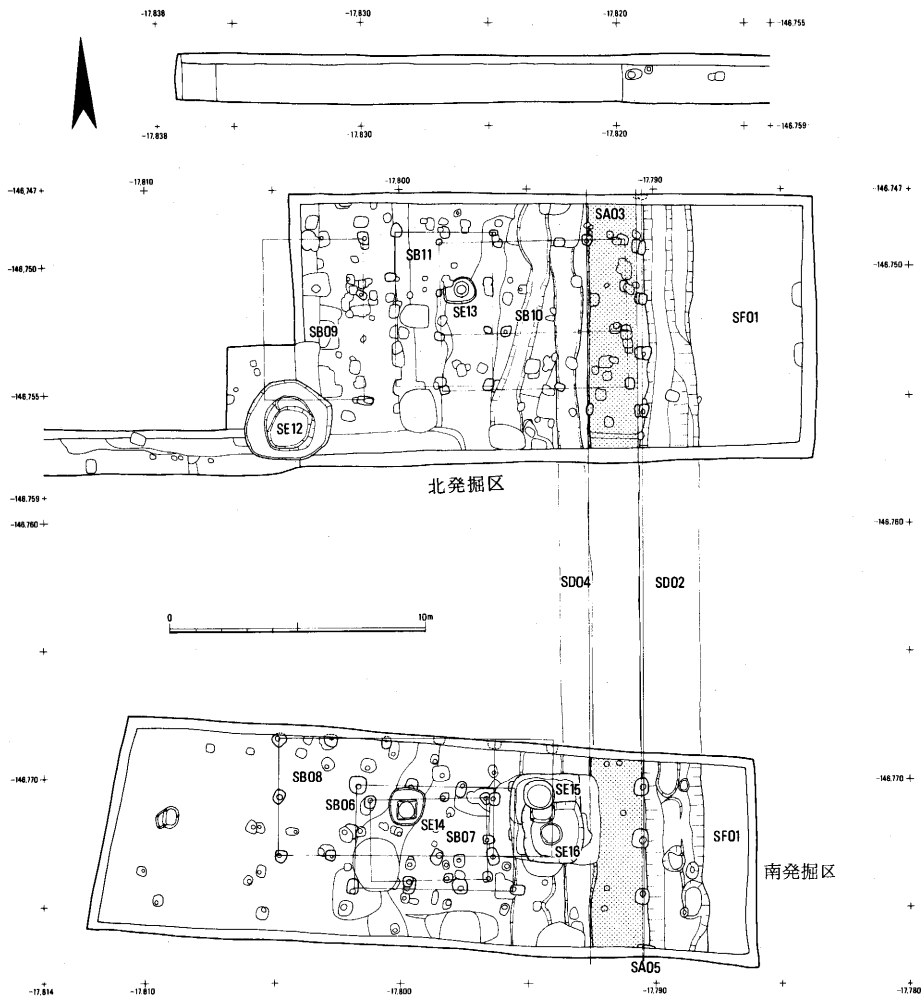
S A 03 七坪の東辺を限る南北方向の柱列で、築地構築時の堰板留めの添柱痕跡と考えられる。築地本体は既に失なわれていた。柱穴は、幅1.9m、南北間2.1mの間隔をおいて断続的に並ぶ。南発掘区では、削平のために検出できなかった。S D 02とは、心々間で1.8mの間隔にある。

SD 04 S A 03の西側を南北に流れる素掘り溝で、築地の雨落ち溝と考えられる。幅0.8~1.1m、検出面から深さ0.2mを測る。S A 03とは、心々間で1.8mの間隔にある。埋土からは、軒丸瓦(平城宮6227A型式)、軒平瓦(平城宮6663F・6685C型式)及び奈良時代前半~末頃の土器が出土。

S A 05 S A 04と重複する南北方向の柱列で、塀と考えられる。南発掘区では3間(6.3m)、北発掘区では5間(10.5m)分を検出。ともに2.1m等間である。重複関係からS A 03より新しいことがわかる。



北発掘区北壁堆積土層図 1/50



検出遺構平面図 1/300



SB06 南発掘区中央で検出した桁行3間(6.3m)、梁行2間(4.2m)の東西棟。柱間は桁行、梁行ともに2.1m等間である。主軸は国土方眼方位にはほぼ一致する。

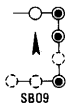


SB07 南発掘区中央で検出した桁行3間(4.5m)、梁行2間(4.6m)の東西棟。柱間は、梁行1.6m等間、桁行はほぼ1.5m等間。重複関係からSB06よりは新しい。主軸は国土方眼方位北に対して西偏する。

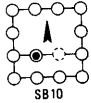


SB08 南発掘区で検出した桁行5間(10.7m)、梁行2間(4.6m)の東西棟。西から4番目の柱筋に間仕切りの柱穴を設けている。柱間は桁行が西から2.1-2.1-2.1-2.1-2.3mで、梁行は2.3m等間である。重複関係からSB07よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位と一致する。

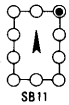
※ 建物模式図凡例 ●柱根残存 ●柱痕跡を確認 ○掘形のみ確認 ○推定 (上が北を示す)



S B 09 北発掘区西寄りで検出した桁行3間(6.3m)、梁行1間(1.6m)以上の南北棟。西側は発掘区外へのびる。桁行は、削平のために南側の2柱穴を欠く。



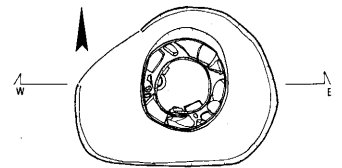
S B 10 北発掘区S D 02に隣接して検出した桁行3間(7.2m)、梁行3間(5.9m)の東西棟で南に廂をもつ。柱間は、桁行が2.4m等間、梁行が1.8m等間で、南廂の出は2.3mである。桁行は、削平のために1柱穴を欠く。柱穴は、いずれも不整形で小さい。主軸は国土方眼方位北に対し若干東偏する。



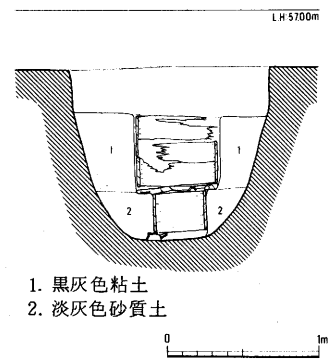
S B 11 北発掘区S B 10の西で検出した桁行3間(5.7m)、梁行2間(4.0m)の南北棟。柱間は、桁行が1.9m等間、梁行が2.0m等間である。柱穴はいずれも不整形で小さい。重複関係からS B 10よりは新しいことがわかる。主軸は国土方眼方位にほぼ一致する。

S E 12 北発掘区西端で検出した井戸。掘形は、東西約3.4m、南北約3.2mの平面不整形を呈し、検出面から深さ1.5mを測る。井戸枠は既に抜きとられていた。埋土からは、軒平瓦(平城宮6675A・6685A型式)及び奈良時代前半～中頃にかけての土器が出土した。

S E 13 北発掘区中央で検出した井戸。掘形は、東西1.3m、南北1.0mの平面楕円形を呈し、検出面から深さ1.1mを測る。掘形の中央には、円形の曲物が据えられており二段分のみが残存していた。掘形底部に土器や平瓦などを敷き、その上に下段曲物を据えつけ、さらに下段曲物の上端周縁に土器、瓦などを敷きその上に上段曲物を据えつけている。曲物寸法は、上段が外径54cm、高さ46cm、下段は外径36cm、高さ26cmを測る。厚さはいずれも0.6cmである。井戸の構築時期は、敷かれていた遺物から奈良時代末頃に求められよう。井戸枠内からは、軒平瓦(平城宮6665新形式)などが出土した。



S E 14 南発掘区中央で検出した井戸。掘形は、東西1.4m、南北1.5mの平面隅丸方形を呈し、検出面からの深さ1.7mを測る。掘形はやや南寄りに上下に二段の井戸枠を据えている。下段は、曲物を三段に重ねたもので、最上段はほとんど残らない。残る曲物二段は、幅5cmのタガが三箇所巻かれて補強されている。曲物寸法は、最下段が外径58cm、高さ43cm、厚さ0.8cm。中段は、外径63cmである。高さ・厚さは、下段と同一寸法を測る。上段は、内法一辺0.6mの方形縦板組で、隅柱を用いず横棧のみで側板を受ける構造である。縦板は、各辺で4～5枚を使用しており、はじめにあてた板の隙間はいま一重の縦板を裏からあて塞いでいる。



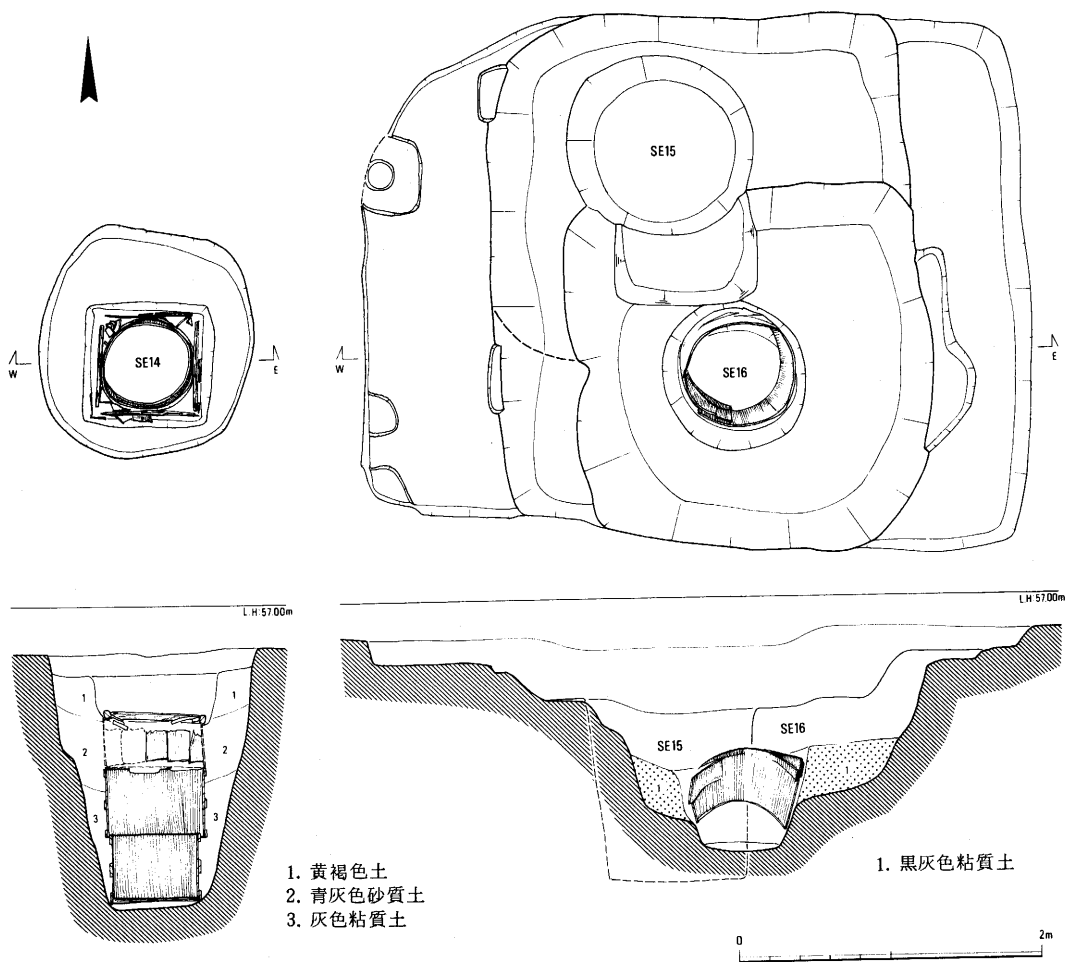
- 1. 黒灰色粘土
- 2. 淡灰色砂質土

S E 13平面・立面図1 / 50

横棧は下一段分だけが残存していたが、腐蝕のため仕口を欠く。井戸枠内から軒九瓦（平城宮6348A型式）、軒平瓦（平城宮6665新形式・6721I型式）及び奈良時代末頃の土器などが出土した。なお、軒平瓦（平城宮6665新形式）は、SE13出土のものと同一体である。

SE15 南発掘区中央で検出した井戸。掘形は、一辺2.4mの平面方形を呈し、掘形中央で径1.2mの円形となる。検出面からの深さは1.5mを測る。井戸枠は抜きとられており、曲物片が残存するだけである。枠内から、軒平瓦（平城宮6311B型式）や奈良時代末頃の土器が出土した。

SE16 SE15と重複して検出した井戸。掘形は、一辺2.4mの平面方形を呈し、検出面から深さ1.2mを測る。掘形中央には、破損の著しい円形の曲物が最下段のみ残存していた。曲物は、傾いた状態で遺存しており、井戸枠を抜きとる際に最下段だけが残ったものであろう。重複関係からSE15よりは新しいことがわかる。井戸枠内からは、奈良時代末頃の土器及び軒平瓦（平城宮6675型式）が出土した。また、掘形からも同型式の軒平瓦が出土している。



SE14平面・立面図 1/50

SE15・16平面・立面図 1/50

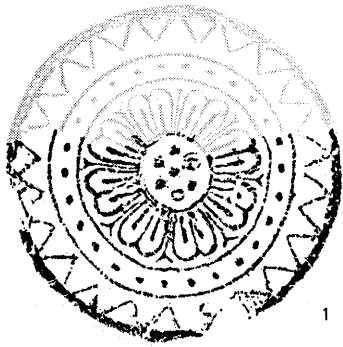
Ⅲ 出土遺物

遺物は、包含層、及び溝、井戸、土壙などから出土している。包含層からのものがほとんどであるが、いずれも奈良時代中頃から末頃にかけてのものである。以下、瓦類、土器類、金属製品、木製品の順に述べる。

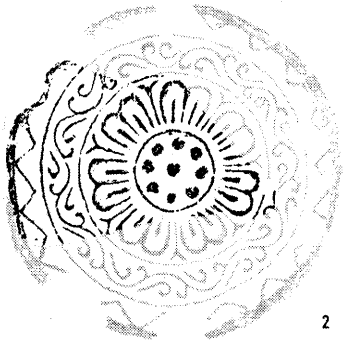
瓦類 瓦は整地土である赤褐色土を中心に比較的多数が出土している。これらの大半は通常の丸瓦と平瓦であるが、5型式6種8点の軒丸瓦と、5型式7種17点の軒平瓦が含まれている。

軒丸瓦 1は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。弁が大きく反転し、弁区より低くつくられた中房には1+6の蓮子を配する。外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。平城宮6311B型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦編年ではⅡ期に位置づけられている。1点出土。2は複弁7弁蓮華文軒丸瓦。弁端がわずかに反転し、高く突出した中房には1+8の蓮子を配する。外区内縁には左回りに連続反転する唐草文、外縁には線鋸歯文がめぐる。平城宮6348A型式軒丸瓦と同範である。2点出土。3・4は複弁8弁蓮華文軒丸瓦。弁はともに扁平であるが、3の弁端が丸味を帯びるのに対し、4の弁端は尖り気味に表現されている。両者とも大きな中房に1+8の蓮子を配し、外区内縁には二重の圏線がめぐる。ともに平城宮6227型式軒丸瓦で、3はD種と、4はA種と同範である。各1点出土。5は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦。中房には大きな蓮子一個のみを配し、外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。平城宮6313A型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦編年ではⅡ期に位置づけられている。1点出土。なお、これらの他に、種別は不明であるが平城宮6282型式軒丸瓦に属するもの1点と、型式不明のもの1点とが出土している。

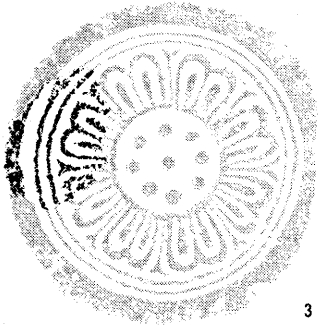
軒平瓦 6は三回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、上方に開くC字状の中心葉内に縦線二条で垂下される花頭をもつ。外区には二重の界線がめぐり、唐草文の各单位は内側の界線にとりついている。平城宮6663F型式軒平瓦と同範である。2点出土。7・8も三回反転の均整唐草文軒平瓦。6と同様ともに唐草文が上下の界線にとりつく形態であるが、外区は珠文帯になっている。ただ、7と8とでは中心飾りの形状や珠文の配置が異なり、7では花頭が上界線にとりつき花頭中軸線上に珠文がないのに対し、8では花頭が界線から離れ中軸線上に珠文が置かれる。両者とも平城宮6665型式軒平瓦で、7はB種と同範であるが、8は今回はじめて出土した新種である。各1点出土。9は主葉が連続して四回反転する均整唐草文軒平瓦。中心飾りには「小」字型の花頭をもち、上外区には珠文、下外区と脇区には線鋸歯文がめぐる。平城宮6675A型式軒平瓦と同範で、京内では前述の同6348型式軒丸瓦とともに出土することが多い。7点出土。10は五回反転の均整唐草文軒平瓦。小字型の花頭を中心飾りとし、外区には細かな珠文を密にめぐらす。脇区には配さない。平城宮6721I型式軒平瓦と同範である。11・12は小型の三回反転均整唐草文軒平瓦。ともに唐草第3単位の主葉は巻込まずに脇区界線につながる。唐草各单位の表現は12の方が細長く扁平である。中心飾りには十字型の花頭をもち、外区には珠文がめぐる。両者とも平城宮6685型式軒平瓦で、11はA種と12はC種と同範である。宮内では前述の同6313型式軒丸



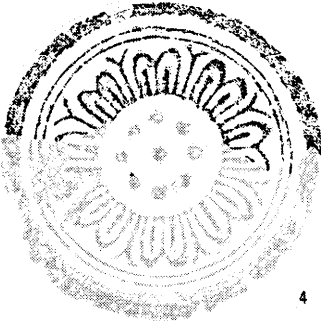
1



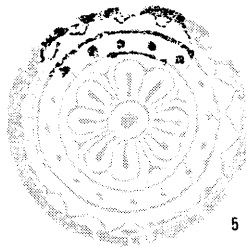
2



3



4



5



6



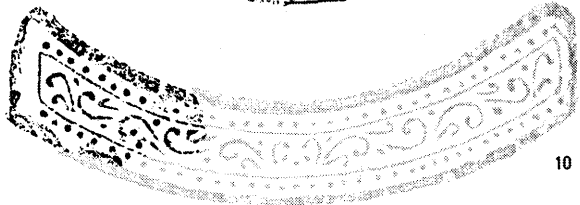
7



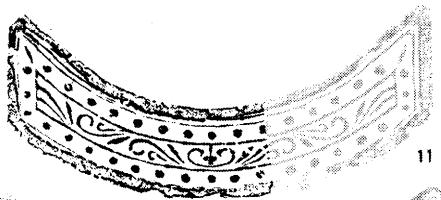
8



9



10



11



12

出土軒瓦 1/4

瓦との組合わせで、築地の軒瓦に使用されていたものらしい。A種が3点、C種が1点出土。なお、これらの他に型式不明の軒平瓦1点と、凹面に「東」のヘラ書きをもつ平瓦1点があるが、通常の平瓦よりも厚くこれには軒平瓦の平瓦部である可能性も残る。(中井 公)

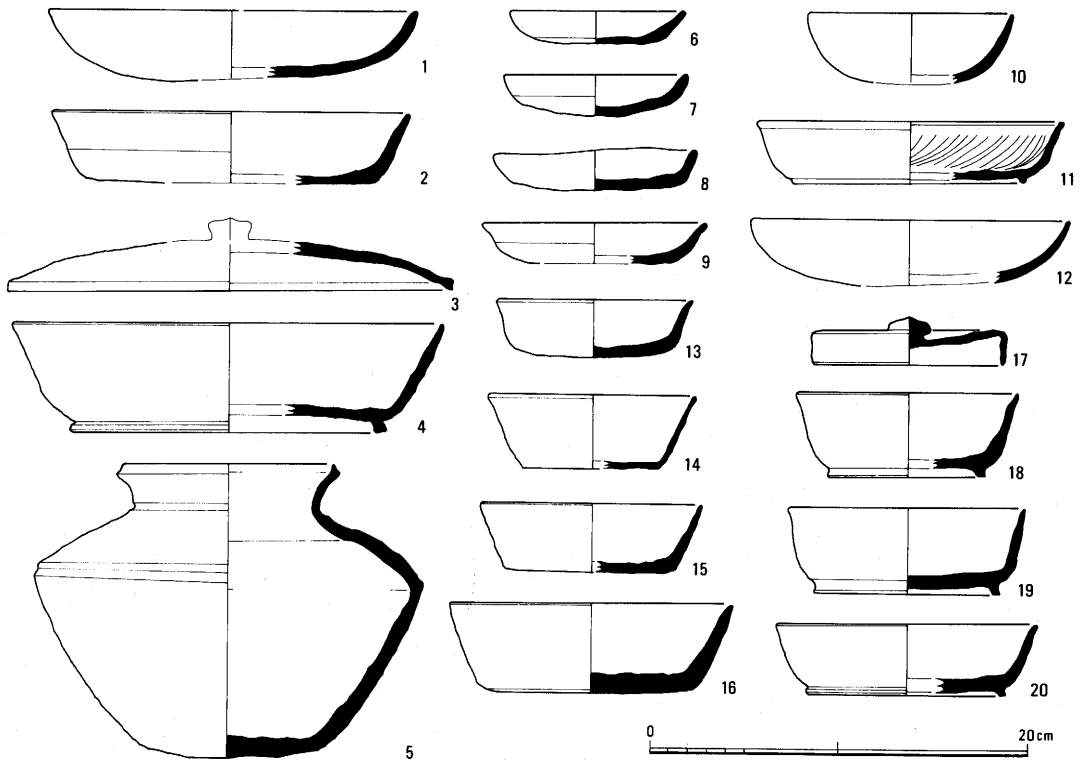


土器類 土器類は、SD02・04、SE12・13・14・15・16などから出土しているが、包含層からのものが大部分を占めている。溝、井戸出土土器は、時期的にまとまっているので、これらを中心に述べる。

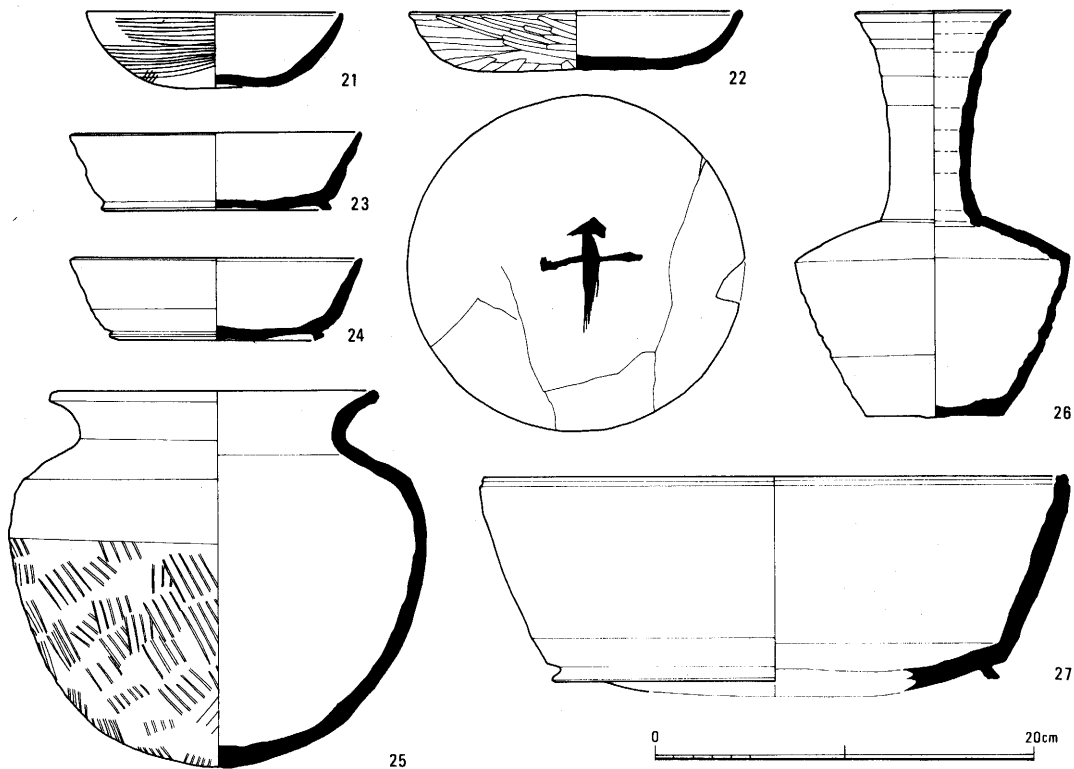
SE14出土平瓦拓影 1/4

SD02出土土器 土師器には、杯A、杯B、皿C、高杯、壺B、甕A、甕B、黒色土器A類皿があるが、いずれも磨滅が著しく観察にたえない。須恵器には、杯A、杯B、皿B蓋、皿A、皿D、鉢D、壺、甕A、甕Bがある。杯A(2)、杯B(4)は、いずれも口縁部下半から底部にかけてヘラケズリをする。皿A(1)は、土師器杯Cの模倣形態。皿B蓋(3)は、頂部をヘラケズリし、縁部をロクロナデで仕上げる。壺(5)は、稜を成す肩部と外反しながら立ちあがる口縁部をもつ短頸壺である。肩部にロクロナデの際に生じたと思われる沈線が一条走る。胴部下半をヘラケズリし、それ以外はロクロナデを施す。いずれも、奈良時代末頃のものである。

※ 土器の各種名及び調整手法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ・Ⅺ』に準拠した。



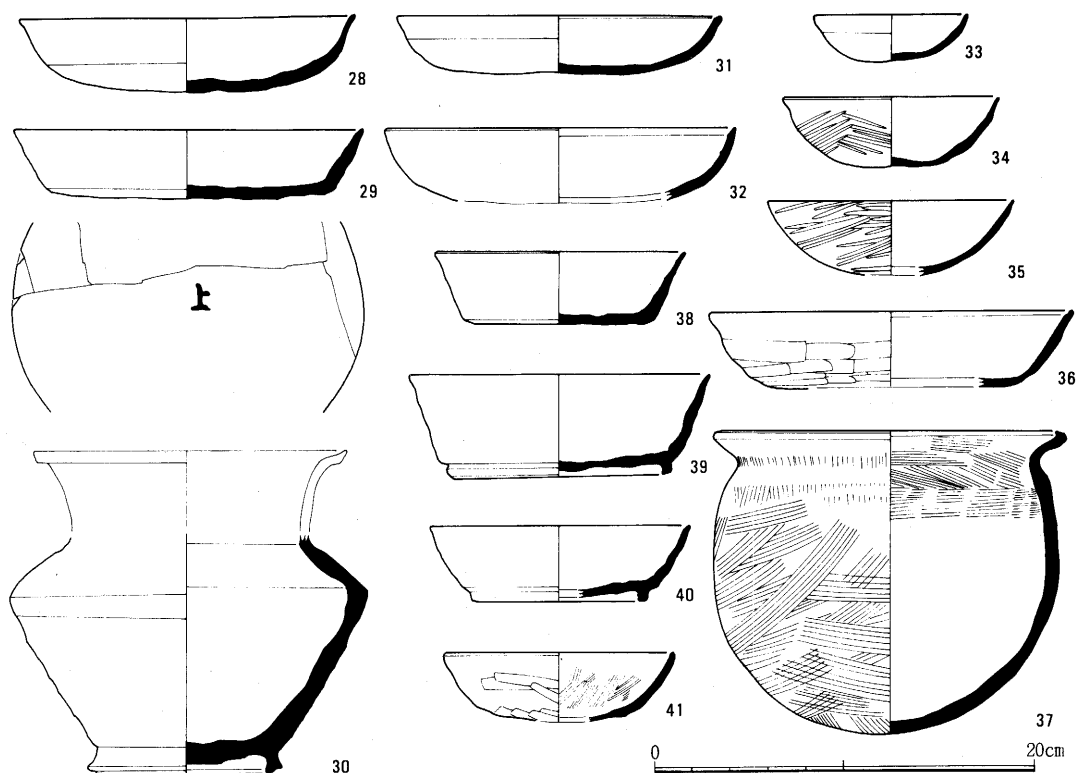
SD02・04出土土器 1/4



S E 12出土土器 1/4

S D04出土土器 土師器には杯A, 杯B, 杯C, 皿A, 皿B, 椀A, 高杯, 壺A, 壺B, 甕A, 甕B, かまど, 黒色土器A類杯がある。杯B (11) は, 内面に一段の斜放射状暗文を施す。杯C (12) は, 内外面ともよこなで調整。皿C (6~9) は, 手づくねで厚手に作られている。いずれも, 口縁部上端をよこなです。椀A (10) は, 磨滅が著しく観察にたえない。須恵器には, 杯A, 杯B, 杯B蓋, 皿A, 皿C, 高杯, 壺L, 壺M, 甕Aがある。杯A (13~16) は, 大きさにより, 杯AⅢ (16; 口径14.8cm, 高さ4.8cm, 杯AⅣ (13~15; 口径約10.8cm, 高さ約3.5cm) に分類できる。底部外面をヘラケズリするもの14・16とロクロナデするもの13・15とがある。杯B (18~20) は, 大きさにより, 杯BⅣ (20; 口径13.6cm, 高さ4.7cm), 杯BⅤ (18・19; 口径約11.0cm, 高さ約4.4cm) に分類できる。底部外面をヘラキリのまま放置しているもの20とヘラキリののちナデを加えるもの18とがある。19は, ヘラケズリ調整で仕上げる。いずれも, 奈良時代末頃である。

S E 12出土土器 土師器には杯A, 皿A, 皿B, 椀A, 高杯, 甕A, 甕B, かまどがある。皿A (22) は, 底部外面から口縁部までを全面にへら削り調整を施す。底部外面には, 「千」と読める墨書がある。椀A (21) は, 4単位右廻りの粗いへら磨きを施す。須恵器には, 杯A, 杯B, 鉢, 鉢E, 壺A, 壺K, 壺A蓋, 平瓶, 甕Aがある。杯B (23・24) は, 大きさにより杯BⅢ (12 口径15cm, 高さ約4.3cm) に属す。23は, 底部外面をロクロナデ。24は, ヘラケズリを施す。鉢 (27) は, 広い丸底ぎみの底部をもち低い高台を付す。底部外面と口縁部上半とをヘラケズリする。



S E 14・15・16出土土器 1/4

壺K (26) は、底部外面から体部下半にかけてヘラケズリを施す。体部上半から口縁部にかけては、ロクロナデ調整。外面全体に黒灰色の自然釉がかかる。甕A (25) は、体部下半に斜め方向のタタキメが粗く施されている。口縁部は、ロクロナデをし、肩部にはヘラケズリ調整を施す。完形である。いずれも奈良時代前半～中頃にかけてのものである。

S E 13出土土器 土師器には、皿A、椀Aがある。椀A (41) は、外面全体にへら削りを施し、口縁部内面には、はけ目調整をする。須恵器には、杯A、杯B、蓋、甕がある。杯A (40) は、口縁部内外面、及び底部外面をロクロナデ調整する。いずれも、奈良時代末頃のものである。

S E 14出土土器 土師器には、杯A、椀A、椀、甕A、甕Xがある。杯A (36) は、底部外面から口縁部上半までをへら削りで調整する。椀A (35・36) は、底部から口縁部までをへら削りし、外面全体をへら磨きするもの35と口縁部外面だけをへら磨きするもの36とがある。椀 (33) は、椀Aに近い形態をもつ小型の器である。表面の磨滅が著しく調整は明らかではない。甕A (37) は、いわゆる「山城型」と呼称されているもので、半球状に近い胴部と強く外反する口縁部から成る広口甕。体部外面と口縁部内外面に粗いはけ目調整をする。須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、盤A、平瓶、壺Mがある。杯A (38) は、底部外面をヘラケズリしたのち不定方向にナデを加える。口縁部外面はロクロナデ。杯B (39) は、底部外面をヘラキリしたのち、ロクロケズリ調整をする。いずれも、奈良時代末頃である。

S E 15出土土器 土師器には、杯A、杯C、皿A、椀A、高杯、かまどがある。杯C (28) は、口縁部だけをよこなでし、それ以下は未調整のままである。須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿C、皿B蓋、鉢A、壺Q、甕Aがある。杯A (29) は、底部外面をヘラケズリ調整し、口縁部内外面にはロクロナデを施す。底部外面には、「上」と読める墨書がある。壺Q (30) は、肩部が稜角をなし、大きく外反する口頸部と外傾する高台をもつ広口壺である。肩部のみヘラケズリを施し、体部内外面はロクロナデ調整をする。いずれも、奈良時代末頃のものである。

S E 16出土土器 土師器には、皿A、皿C、甕などがある。皿A (31) は、口縁部のみよこなでを施す。須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、皿B、甕Aがある。杯C (32) は、土師器皿の模倣形態である。口縁内外面ともにロクロナデ調整を施す。いずれも奈良時代末頃のものである。

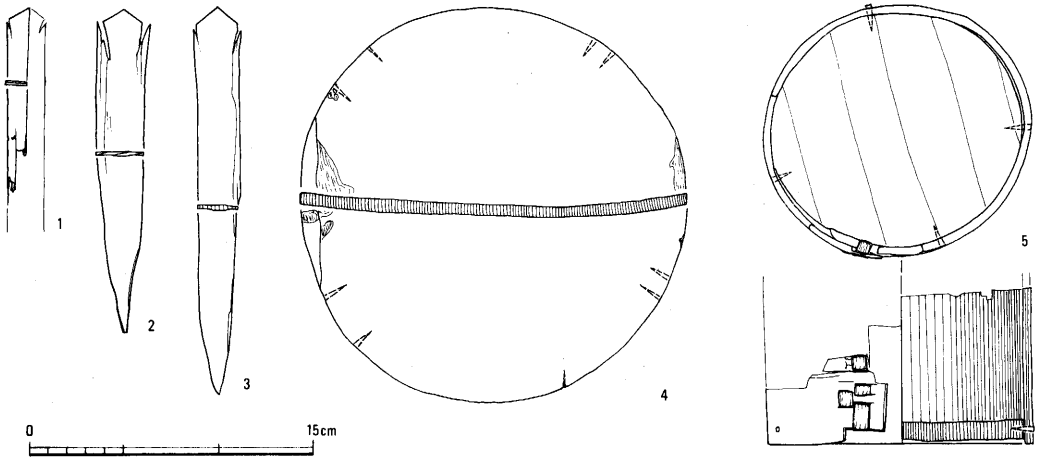
金属製品 S E 14の枠内から出土した刀子がある。

両面平造りで、茎及び身の棟はほぼ原形をとどめるが、刃は錆化が進み原形をとどめない。残存長は12.6cm(茎部長5.6cm)、刃元の身幅は1.0cmを測る。



S E 14出土刀子

木製品 S E 13・14から出土したもので、削り掛け (1~3)、曲物底部 (4)、曲物容器 (5) などがある。削り掛けは、短冊状の薄板、下端をV字状に尖らし、上端を圭頭状にかたどったもので、圭頭の両側縁部に斜め方向の切り込みをもつものである。1は上半部の一部が残るもので、板目薄板の表裏はていねいに削られている。2は下半部までV字状に尖らしたもので、柾目薄板の表裏には割り裂きの痕跡が残る。長さ16.2cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmを測る。3は2に比べて細長いもので、板目薄板の表裏には割り裂きの痕跡が残る。長さ20.3cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。4は柾目板を正円形につくり、側面を垂直に削ったものである。板の表裏はていねいに削られ、表面を研磨している。側面には曲物の側板を固定した木釘穴が8箇所に残り、側



S E 13・14出土木製品 1/4

板は木釘二本を一組として四方からとめられていた。径20.3cm、厚さ0.5cmを測る。1～4はS E 14の枠内から出土した。5は小型の曲物容器で上端部を欠損するが、外径13.5cm、残存高8.2cmを測る。正円形につくった柃目底板に厚さ0.4cmの板目板を側面に巻きつけ、四方から4本の木釘でとめたもので、側板内面には木理に直交する刻線を約0.5cmの単位で施している。側板の下端部を小さく切り欠き、樺皮で3段縫い1列でとじ合せ、横へ引出して終る。底板は径12.8cm、厚さ0.9cmを測る。S E 13の枠内から出土した。

IV ま と め

検出した条坊関係の遺構が、平城京の条坊計画の中で占める位置について検討する。

昭和54年に行なわれた左京三条二坊七坪の調査では、坊間路西側溝が検出されている。その西側溝心とS D 02心とから国土方眼方位に対する西側溝の振れを求めるとN0°15'36"Wとなる。

この数値は、朱雀大路の振れN0°15'41"と近似する。S D 02は、平城宮朱雀門心から国土方眼方位を介して東へ796、970mの距離にある。これに、先に得られた西側溝の振れを採用して、修正を加えると両者心々間の東西距離は、793、519mとなる。三条二坊の調査では、坊間路心が推定されており、二坊坊門路の幅員は約30尺に復元され、今回検出したS F 01についてもその幅員を側溝心々間30尺と仮定すると、両者間の造営計画尺は2685尺〔1800尺（1坊幅）+900尺（2坪幅）-15尺（推定東二坊坊間路1/2幅）〕となる。先に得られた東西距離を造営計画尺で除すと、この場合は0.2955mになる。従来の京の造営単位尺は、0.2940～0.2960mの範囲に落ちつく傾向にあることから見て、今回求められた0.2955mという単位尺も適当な数値といえよう。このことから、S D 02が東二坊坊間路西側溝であることが裏づけられる。

ところで、発掘区内で検出した遺構は、築地が存在した時期と築地が廃絶し、塀が構築された時期に大別できる。築地S A 03廃絶後につくられる井戸S E 14・15が奈良時代末頃であり、これよりも古い建物S B 06・07・08が存在することや、重複関係から築地S A 03よりも新しい建物S B 10・11が存在することなどがわかる。だが、現状では坪内の一部の状況がわかるだけで、時期の細分は難しい。七坪内中央は、菰川の氾濫のためか奈良時代の遺構は検出できなかった。周辺の今後の調査をまちたい。

（奈良 美穂・篠原 豊一）

地 点	X	Y	備 考
平城京朱雀門心	— 145,994.490	— 18,586.310	『平城宮発掘調査報告Ⅸ』
左京三条二坊西側溝心	— 146,254.563	— 17,791.583	平城宮第118—23次調査
S D 0 2 心	— 146,749.000	— 17,789.340	今回の調査

計 測 座 標 表

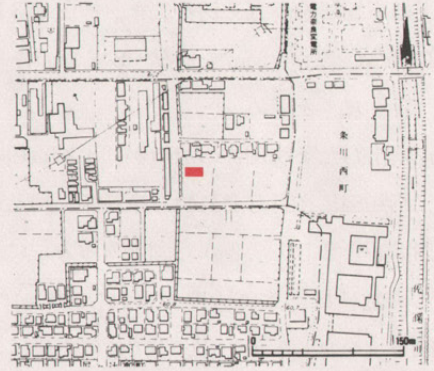
注1) 奈良国立文化財研究所『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1980

注2) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

16. 平城京左京四条二坊十六坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市四条大路1丁目720番地の3において行った柳田弘之氏届出の駐車場建設工事に伴う事前調査である。調査地は平城京左京四条二坊十六坪の西南部分に位置する。調査地を含めた周辺は、藤原仲麻呂（恵美押勝）の邸宅である田村第が推定されており、昭和57年には、隣接する十五坪で田村第の一部とみられる礎石大型建物が検出されている。発掘区は東西18m、南北9m（調査面積162㎡）で、調査は昭和58年4月15日から5月10日まで行った。



発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

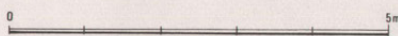
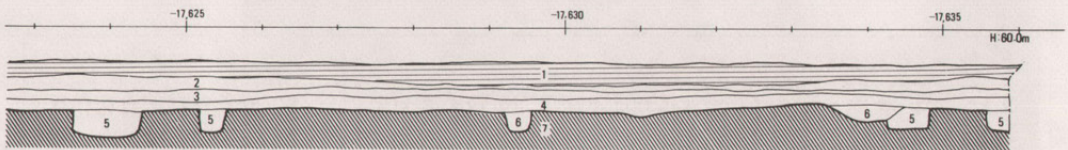
発掘区の層序は、耕土の下、灰色砂質土、淡青灰色粘質土、青灰色粘質土となっており、地表下約60cmで茶褐色粘質土となる。遺構はこの茶褐色粘質土上面で検出した。検出した遺構は奈良時代の掘立柱建物5棟、柱列1条などである。

S B 01 桁行3間（8.4m）、梁行2間以上の東西棟。柱間は桁行の中央が広く3mを測り、他の2間は2.7mの等間である。主軸は国土方眼位北に対して東偏する。

S B 02 桁行5間（15m）以上の東西棟。北側に廂（3m）をもつ。柱間は3m等間で、身舎柱穴掘形は約1m四方と大きい。

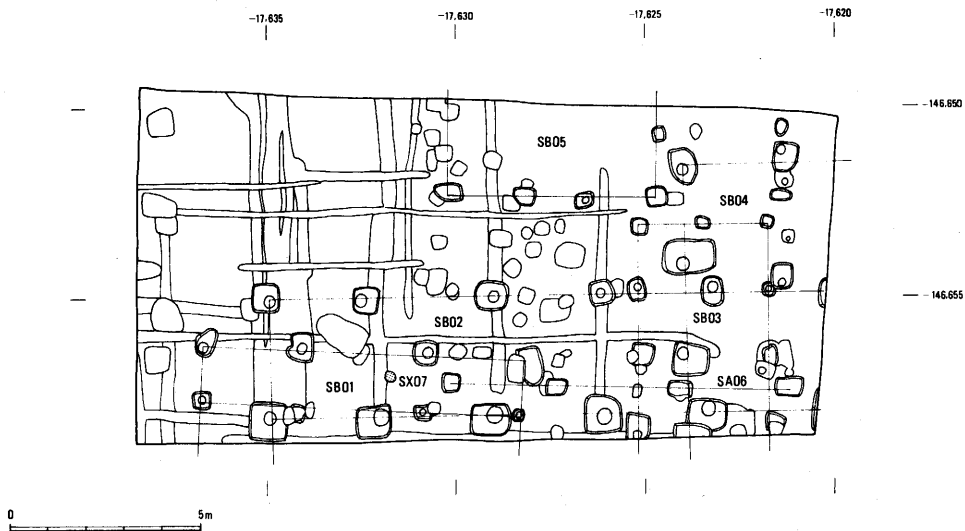
S B 03 桁行3間（5.4m）以上、梁行2間（3.6m）の南北棟。柱間は桁行、梁行とも1.8m等間である。

S B 04 桁行4間（7.2m）以上、梁行2間（2.7m）以上の南北棟。柱間は桁行が24mの等間、梁行は2.7mを測る。柱穴掘形は1m四方前後と大きい。



- | | |
|------------|------------|
| 1. 耕土 | 5. 淡茶褐色粘質土 |
| 2. 灰色砂質土 | 6. 茶灰色粘質土 |
| 3. 淡青灰色粘質土 | 7. 茶褐色粘質土 |
| 4. 青灰色粘質土 | |

南壁堆積土層図 1/100

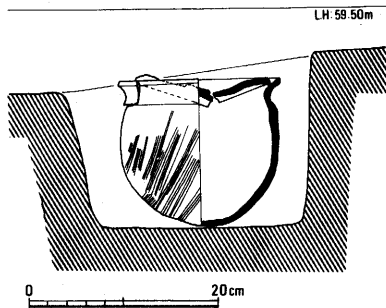
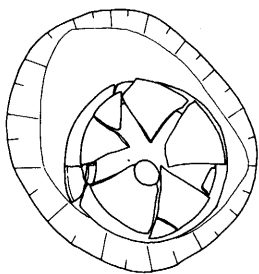


検出遺構平面図 1/200

S B 05 桁行3間(5.4m)、梁行2間(1.8m)以上の東西棟。柱間は桁行が1.8mの等間。梁行も同じく1.8mを測る。

S A 06 発掘区南寄りで検出した東西方向の柱列。3間(9m)分を検出した。東側は発掘区外へのびる可能性がある。柱間は3mの等間である。

S X 07 径24~28cm、深さ18cmの小土壇内に、須恵器杯蓋で蓋をした土師器小型甕を埋置した遺構。甕内部には土砂が流入しており、遺物は認められなかった。地鎮の施設あるいは胎衣壺等の性格が考えられるが、断定する根拠に欠く。



S X 07平面・立面図 1/8

III 出土遺物

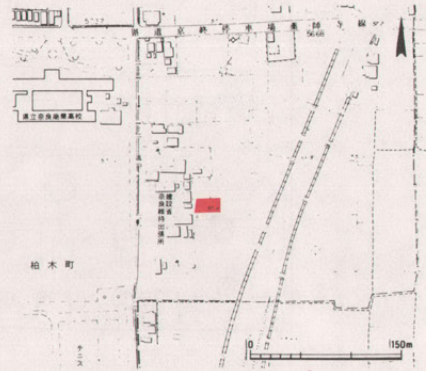
S X 07から出土した須恵器杯蓋、土師器甕の他には、遺構に伴って出土した遺物はなく、遺構面を覆う包含層から出土した瓦類、土器類も少量でほとんど細片である。瓦類には平城宮6301B型式と平城宮6348A型式の2点の軒丸瓦がある。6301B型式はいわゆる興福寺式として知られ、6348A型式は、田村第の推定される左京四条二坊において、これまでの出土例が数点知られている。いずれにしても出土遺物からは、今回の調査成果と田村第を直接むすびつけられず、検出遺構においても田村第との関係はまだまだ明瞭ではない。今後の周辺の調査を含めた検討をまちたい。

(森下 恵介)

17. 平城京左京六条一坊十二坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市柏木町410番地の3他において実施した、レストランシャロン奈良店の駐車場増設工事に伴う事前調査である。調査地は佐保川北岸の低湿の沖積地で、平城京の条坊復元では左京六条一坊十二坪のほぼ中央部にあたる。調査は、造成作業が半ば進行した事情で、発掘区の設定に制約を受けたが、敷地西半に残された未造成の休耕田を中心に東西27m、南北17m(450㎡)の範囲でトレンチを入れることができた。調査は昭和59年1月13日に開始し、その全日程を終えたのは同年2月7日である。



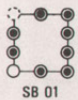
発掘区の位置 1/7500

II 検出遺構

まず、堆積土層について概観しておく。発掘区内では、耕作土(黒色腐蝕土)以下順に、淡灰色土、黄灰色粘質土と堆積し、地表下約60cmで地山に達する。このうち黄灰色粘質土は奈良時代の土器、瓦片を包含している。また、地山には茶褐色粘質土と、旧河道もしくはその氾濫で生じたと思われる灰色粗砂の堆積との交替が認められた。(地山のうち灰色粗砂の範囲については平面図の中で網目をかけて表示した。)

調査によって検出した主な遺構は掘立柱建物3棟である。柱穴は本来地山上層の黄灰色粘質土から切込むようであるが、平面では判然とせず地山上面で確認している。

S B 01 桁行3間(4.8m)、梁行2間(4.2m)の南棟。柱間寸法は桁行が1.6m等間、梁行が2.1m等間である。いずれの柱穴掘形も一辺40~45cmほど小さく、北西隅の柱穴は後述の建物S B 02との重複で失なわれている。建物の主軸は、国土方眼方位とほぼ一致する。

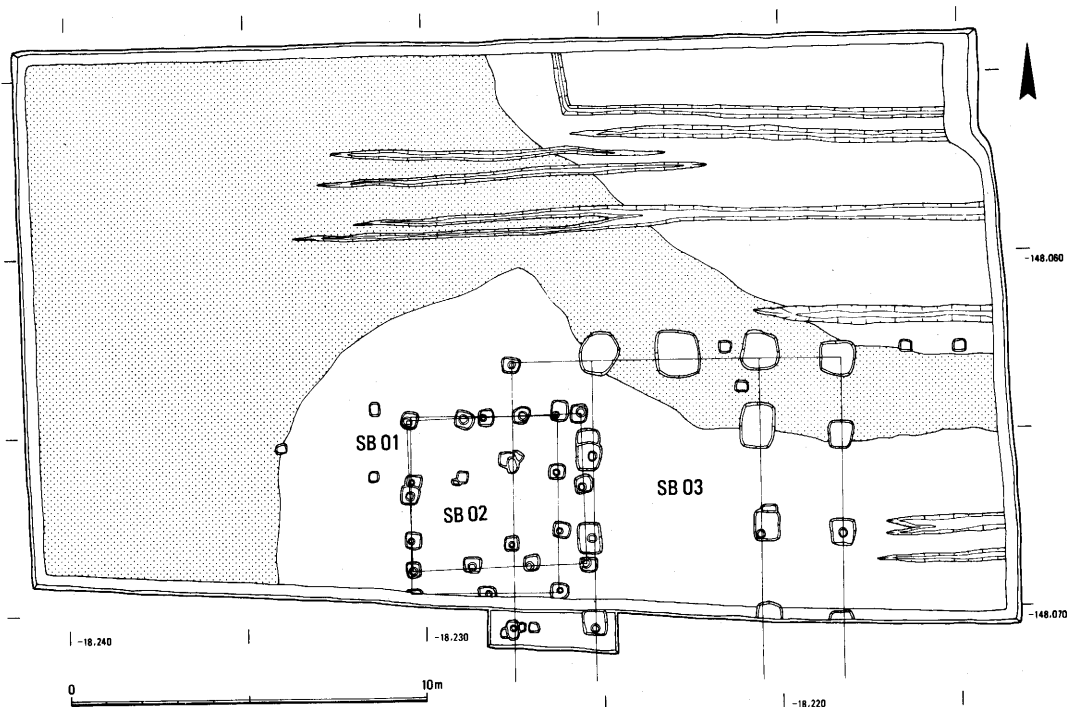


S B 02 桁行3間(4.9m)、梁行2間(4.2m)の東西棟。柱間寸法は、梁行が2.1mの等間であるが、桁行は北側柱列が東から1.6-1.7-1.6m、南側柱列が東から1.6-1.6-1.7mと不揃いの部分がある。柱穴掘形は小さく一辺40~50cm程度であるが、一柱穴を除くすべてに柱根が遺存していた。柱根の残存径は15cm内外である。先述のとおり重複関係からはS B 01よりも新しいことがわかる。なお、主軸は国土方眼方位北に対して西偏する。



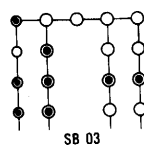
S B 03 桁行3間(7.2m)以上、梁行4間(9.6m)で東西両面に庖

※ 建物模式図凡例 ●柱根残存 ●柱痕跡を確認 ○掘形のみ確認 ○推定 (上が北を示す)



検出遺構平面図

をもつ大形の南北棟。さらに発掘区外南へ続く。柱間寸法は、身舎桁行、梁行ともに2.4m等間、廂の出も東西それぞれ2.4mである。身舎及び東廂の柱穴掘形は一辺70~80cmほどであるが、砂地の地山にかかる北側の柱穴では、肩崩れのためか掘形は一辺1m以上にまで掘り広げられている。また、西廂の柱穴はこれらの柱穴に比して一辺40cm内外と小さい。このため、西廂の柱穴については土廂状の簡素な構造の廂であったと推察される。なお、建物主軸は国土方眼方位とほぼ一致している。



Ⅲ 出土遺物

黄褐色粘質土の包含層から若干の土器と瓦が出土したが、いずれも小片である。このうち瓦には軒瓦7点が含まれており、平城宮6291A, 6311B型式軒丸瓦が各1点、同6664F, 6670A, 6691A型式軒平瓦が各1点、同6710A型式軒平瓦が2点ある。6670A型式軒平瓦拓影は、従来わずかに左京四条二坊十五坪に中心飾りの小片1点があったにすぎず、^{注)} 今回の資料によって連続して三回反転する唐草の展開が明らかになった。外区と脇区には間隔の粗い珠文を配している。なお、本例は左京四条二坊十五坪例と同範ではあるが、後の瓦当範の彫り直しのために幾分肉厚な表現になっている。



平城宮 6670 A 型式拓影

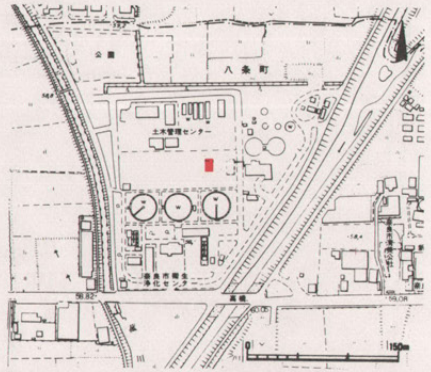
(中井 公)

注) 奈良国立文化財研究所「昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」

18. 平城京左京六条二坊九・十坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺西二丁目281番地において実施した奈良市浄化センター焼却炉建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元で左京六条二坊九・十坪に推定され、焼却炉建設予定地は九・十坪を区画する東西小路部分にあたる。この小路を確認するため東西8m、南北13.4mの発掘区（発掘面積107㎡）を設定して調査した。調査の期間は、昭和58年7月27日から8月29日までである。



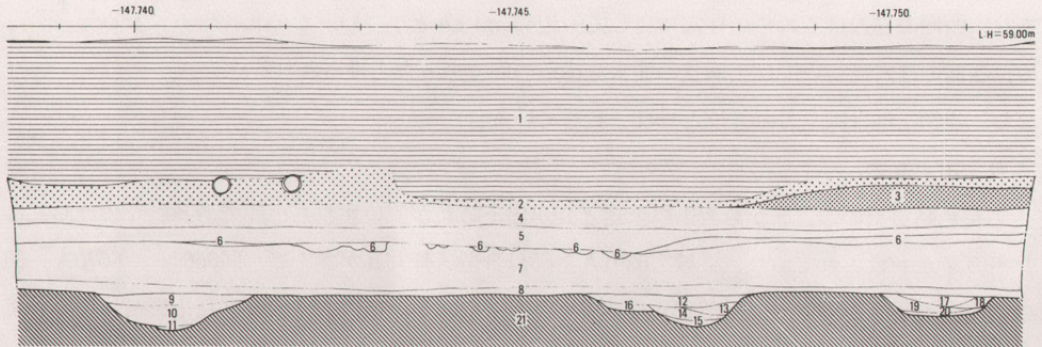
発掘区の位置 1 / 7500

II 検出遺構

発掘区は、既に2.1mの厚さで盛土されている。土層堆積状態はこの盛土以下順に、旧耕土、黒灰色礫質土、灰色礫砂、灰色粘質土、灰色砂質土と堆積し、地表下約3.3mで地山の黄灰色粘質土となる。遺構はこの層の上面で検出した。

主な検出遺構は、東西小路及び両側溝と十坪内の溝である。

S F01 発掘区の中央で検出した東西道路。九・十坪を画する坪境小路と考えられる。路面部分は平坦な地山面で、一部に小土壇がある。土壇は深さ2～3cmと浅く、埋土からは、奈良時代の土器の細片が出土しており、路面を補修した跡と考えられる。路面幅は4.0mを測る。



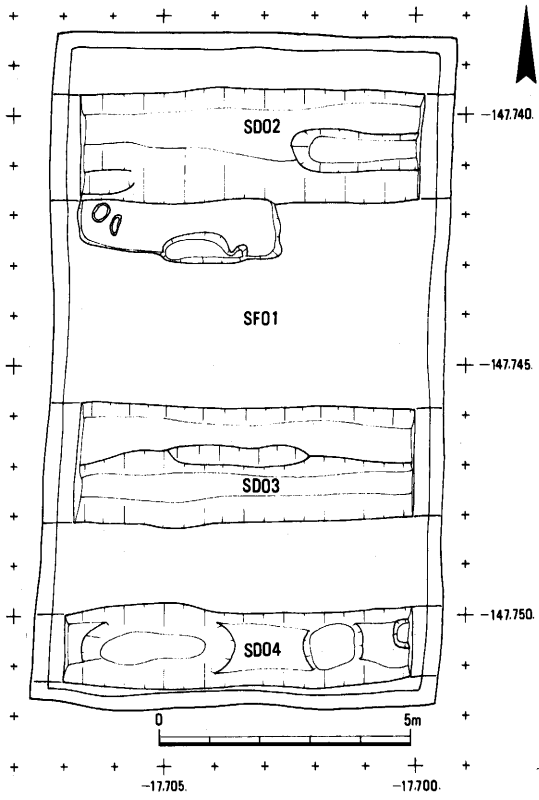
- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 黒灰色土（盛土） | 10. 淡緑灰色粘質土（SD02埋土） | 19. 淡灰色砂質土Ⅱ（SD04埋土） |
| 2. 黒色土（盛土） | 11. 灰色粘質土（SD02埋土） | 20. 淡灰色粘質土（SD04埋土） |
| 3. 淡黄褐色粘質土（盛土） | 12. 淡黄灰色砂質土（SD03埋土） | 21. 黄灰色粘質土（地山） |
| 4. 黒灰色土（旧耕土） | 13. 淡茶灰色土（SD03埋土） | |
| 5. 黒灰色砂礫 | 14. 灰色粘質土Ⅰ（SD03埋土） | |
| 6. 灰色砂 | 15. 灰色粘質土Ⅱ（SD03埋土） | |
| 7. 灰色粘質土 | 16. 淡黄灰色砂質土（SD03埋土） | |
| 8. 灰色砂質土 | 17. 淡黄灰色砂質土（SD04埋土） | |
| 9. 淡茶灰色砂質土（SD02埋土） | 18. 淡灰色砂質土Ⅰ（SD04埋土） | |

東壁堆積土層図 1/100

SD02 発掘区の北端で検出した東西方向の素掘溝で、SF01の北側溝と考えられる。溝は幅約2.1m、深さ約0.5mを測り、丸底である。埋土からは、奈良時代の軒丸瓦（平城宮6348A型式）、軒平瓦（平城宮6691A型式）、土師器片、須恵器片などが出土した。

SD03 SD02の南側で検出した東西方向の素掘溝で、SF01の南側溝と考えられる。溝は幅約2.2m、深さ約0.4mを測る。北側壁はゆるやかに斜傾し、幅50cmの段がつく。溝の底面は丸底で、南側壁には段をもたない。土層の堆積からみて、溝の掘りかえが行なわれたと考えられる。埋土から奈良時代の瓦片、土師器片、須恵器片が出土した。

SD04 発掘区の南端で検出した東西方向の素掘溝である。SD03と約3.2mの間隔を置いて並行に流れていることから、十坪内北辺を画する溝と考えられる。溝は幅約1.4～1.7m、深さ約0.3～0.5mを測り、SD02・03に比べて溝幅は狭く、深さも一定ではない。埋土からは、奈良時代の瓦片、土師器片、須恵器片が出土した。SD02・03から出土した遺物と比べて量も多く、また完形に近い土器も出土している。SD03と04の間は、平坦な地山面で何の痕跡もとどめていないが、十坪内北辺を画する柵及び垣があった可能性が考えられよう。



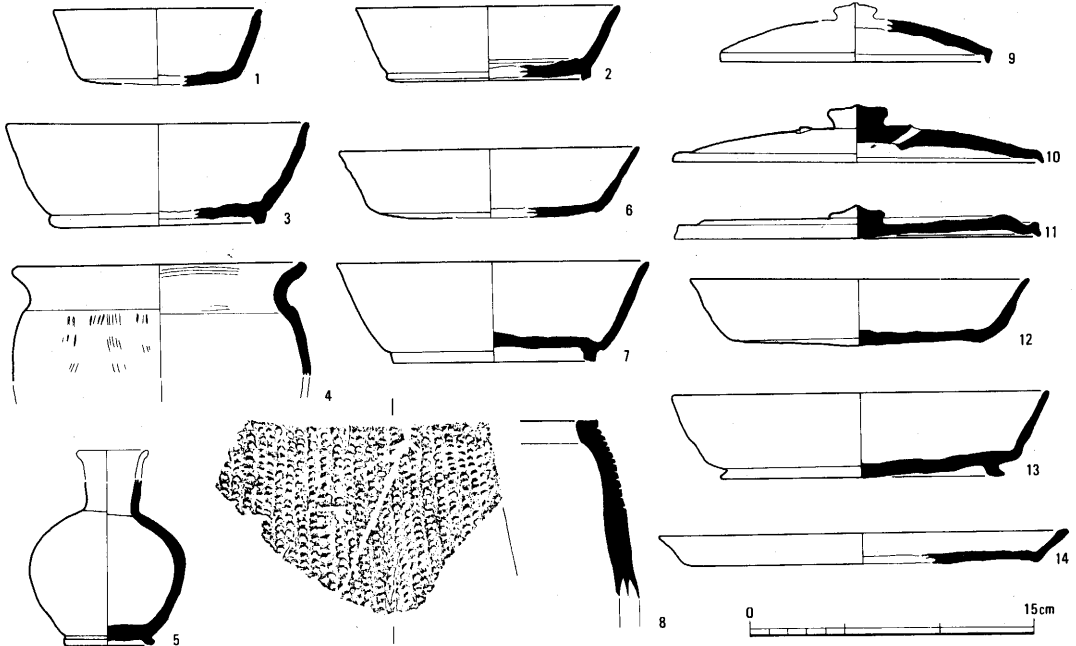
検出遺構平面図 1/150

Ⅲ 出土遺物

SD02・03・04から奈良時代の瓦類、土師器、須恵器が、包含層からは奈良時代の遺物とともに、弥生土器片、古墳時代の須恵器片、中近世の土器片などが出土した。

瓦類 瓦類の出土量は、土器に比べて少量で、そのほとんどを、丸瓦、平瓦が占めている。軒瓦には、軒丸瓦2点と軒平瓦1点がある。他に縁釉丸瓦2片がある。

軒丸瓦はいずれも複弁7弁蓮華文軒丸瓦である。突出した中房に1+8の蓮子を置き、外区内縁には左回りの唐草文を、外区外縁には線鋸齒文を配する。平城宮6348A型式軒丸瓦と同範である。SD02と包含層から出土した。軒平瓦は四回反転する均整唐草文軒平瓦で、平城宮6691A型式軒平瓦と同範である。SD02から出土した。縁釉丸瓦は玉縁を残す破片で、丸瓦部凸面に施釉されているが、玉縁部には施釉されない。包含層から2片出土しているが、同一個体の可能性が考えられる。



S D 02・03・04出土土器 1/4

土器類 S D 02・03・04から出土した土器を順に記す。

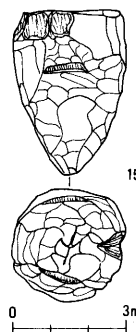
S D 02出土土器 (1～5) 土師器には、甕A, 甕B, 高杯, カマドがある。4は甕Aで、球形に近い胴部とつよく外反する口縁部からなる。口縁部外面は強くよこなでし、口縁部内面は横方向のはけ目を施している。須恵器には、杯A, 杯B, 杯蓋, 高杯, 壺, 甕, 盤がある。1は杯Aで、平坦な底部と外反する口縁部からなる。2・3は杯Bで杯Aに高台がつくものである。5は壺Mで、平坦な底部に高台がつき、球形の胴部に外反する口縁部がつく小型の壺で、口縁端部を欠いている。胴部外面にはこまかい回転ヘラ削りを、口縁部内外面にはヨコナデを施している。

S D 03出土土器 (6～8) 土師器には、杯A, 椀C, 甕Aがあるがいずれも細片である。須恵器には、杯A, 杯B, 杯蓋, 壺, 甕, 盤, 高杯がある。6は杯A, 7は杯Bである。8は軟質の須恵器片で器種は不明である。口縁部は内傾しながら立ちあがり、口縁端部で内彎する。口縁上端部は平坦におさめ、内側に肥厚している。外面全体に縦方向の半載竹管状の刺突痕が残る。口縁部には、斜め方向の切り込みをもつが、その形状は復元できない。口縁部の復元径は約27cmとなる。

S D 04出土土器 (9～14) 土師器には、杯A, 杯B, 杯C, 皿A, 皿C, 椀A, 杯蓋, 甕, 高杯がある。土師器は全体に遺存状態が悪く、破片が多い。須恵器には、杯A, 杯B, 杯蓋, 皿, 壺, 壺蓋がある。9～11は杯蓋で、9の頂部は丸みをおび、縁部は屈曲しない。10・11の頂部は平坦で、縁部は屈曲する。10はつまみを中心とした対称位置に2ヶ所の小孔が残る。小孔は頂部外面斜め上方から内面に向かって穿っており、焼成前にあけられている。この蓋の内面には炭化物

が付着している。これらのことからこの蓋は、煮沸容器の蓋としての目的をもって作られたと考えられる。12は杯A、13は杯B、14は皿Aである。

木製品 (15) 広葉樹の丸材で、木口の一端を直裁し、円錐状に削ったもので、径約3.0cm、全長4.3cmを測る。従来から、独楽または容器の栓と考えられているものである。今回のものは、径が正円でないことや、全体に加工痕跡が荒いことから、独楽として考えるよりも容器の栓として使用した可能性が強い。包含層から出土した。



出土木製品 1 / 2

IV まとめ

今回の調査で検出した条坊関係の遺構について、平城京の中でどのような位置にあたるのか、若干の検討をくわえてみたい。

東西道路 S F 01心は、朱雀門心から国土方眼位を介して南へ、1749、260mの距離にあるが、平城京の条坊は国土方眼方位に対して朱雀大路心で、北から西へ $0^{\circ}15'41''$ 振れていることが知られており、この距離に朱雀大路心の振れを考慮して修正をくわえると1753、281mとなる。また朱雀間心は二条大路心から北へ80尺寄っていることが発掘調査の結果わかっており、朱雀門心から九・十坪の坪境小路心までの条坊計画尺は、〔80尺+5400尺（三条分）+450尺（一坪分）〕=5930尺と求められる。朱雀門心から S F 01心までの距離1753,286mをこの計画尺5930尺で除すると0.2957mという単位尺が得られる。これまでの平城京内で行なった条坊関係の発掘調査で得られた、京の造営単位尺は0.294~0.296mの範囲におさまる傾向にあることが知られており、したがって今回の調査で求められた0.2957mという単位尺も、こうした範囲内におさまることから、造営単位尺として適当な数値と考えられる。S F 01が九・十坪を画する坪境小路として、条坊計画尺に設定されていたことが裏付けられよう。また、S F 01の路面幅は4.0m、両側溝心々間距離は6.69mとなり、これまでの発掘調査で得られた小路幅とほぼ近い値にあることから考えても S F 01は左京六条二坊九・十坪を画する坪境小路と考えられる。

地点名	X	Y	備考
朱雀門心	— 145,994.490	— 18,586.310	「平城宮発掘調査報告Ⅸ」
S F 01心（路面心）	— 147,743.750	— 17,701.000	今回の調査
S D 02心	— 147,740.668	— 17,701.000	同
S D 03心	— 147,747.382	— 17,701.000	同
S D 04心	— 147,750.603	— 17,701.000	同

計測座標表

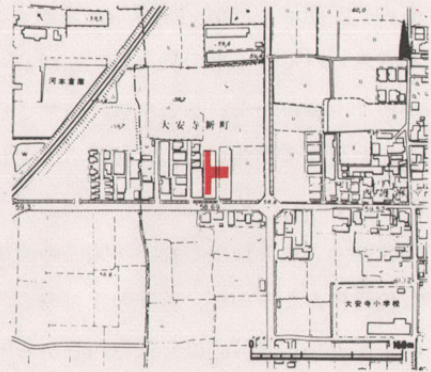
注1) 奈良市「平城京朱雀大路発掘調査報告」1974

注2) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書 Ⅸ」1978

19. 平城京左京六条三坊十坪（東堀河）の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺町79番地の1で、行った楠木英彦氏によるマンション建設工事前の調査である。平城京左京三坊では、五条以南の各坊九坪から十二坪の中央に南北方向の河道の痕跡が現存する地割にみられ、これが東堀河であろうと推定されている。昭和50年実施された左京八条三坊九坪^{注)}の調査を始めとして、九条三坊十坪、八条三坊十一坪^{注)}など、その後行われた調査では、いずれもこの河道が検出されており、奈良時代に、計画的に掘削された堀河であることが確認されている。このため、今回の調査地も六条三坊十坪のほぼ中央に位置することから、調査の目的をこの堀河の確認におき、東西23m、南北11mの発掘区で、堀河の位置を確認した後、河道の部分を南北に17m拡張した。発掘面積は423㎡で、調査期間は、昭和58年10月24日から11月17日までである。



発掘区の位置 1 / 7500

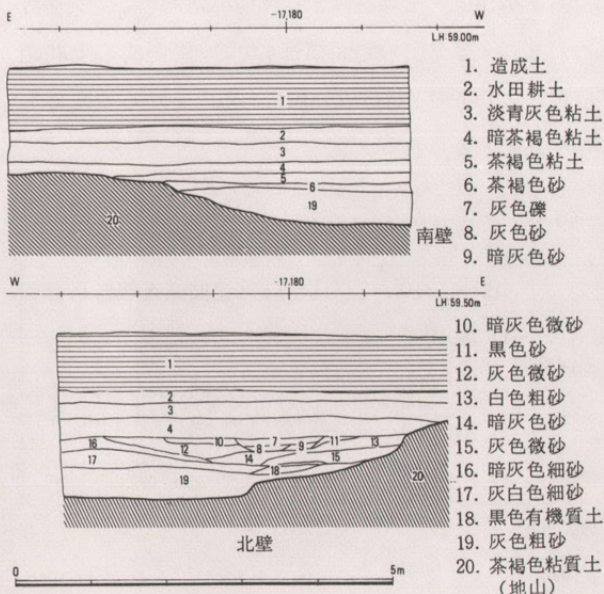
II 検出遺構

発掘区の層序は、地表より約80cmが宅地造成の際の盛土、つづいて旧水田耕土、淡青灰色粘土、

茶褐色粘土となっている。遺構はこの茶褐色粘土層の上面で検出した。検出した遺構は、十坪内の掘立柱建物1棟と、十坪のほぼ中央を北から南へ縦断して流れる東堀河である。

S B01 東堀河東岸から約9m東で検出した桁行2間(4.8m)以上、梁行2間(4.8m)の南北棟。柱間は、桁行、梁行とも2.4mの等間である。

S D02 発掘区西端で検出した河道。東堀河である。西端は未検出のため全幅は不明、東岸から約5mまでを検出した。東岸は、ゆるやかに傾斜し、ほぼ平らな河底となっている。深さは検出面から、最深部底面まで1.0m、河底の標高は北



S D02 (東堀河) 堆積土層図 1 / 100

端が、56.8m、南端が、56.4mを測り、南へ低くなっている。河道内の堆積層は、底部に接して約40cmの厚さで灰色の粗砂層があり、河の北半ではさらにその上に細砂層や微砂層がみられる。これら上層の細砂層や微砂層は、水中で堆積と浸蝕をくりかえしたらしく、厚さも一定せず互層となっている。下層の灰色粗砂層からは、多量の奈良時代の遺物が出土した。

Ⅲ 出土遺物

今回の調査での出土遺物については、土器類の整理作業が終了していないため次年度にその報告を行うが、概要を以下記しておく。遺物の大半は、東堀河 S D02の底部に堆積した灰色粗砂層から出土したもので、総量で整理箱150箱におよぶ多量の土器類の他、銭貨、帯金具等の金属製品がある。瓦類は比較的少く、木製品の出土はない。土器には土師器、須恵器があり、時期は8世紀後半のものが大半である。完形品に近いものも多く、水流によって磨滅したものが少いことから、調査地の周辺で堀河に投げられ、そのまま堆積したと思われる。

現在知られている8世紀の土器類のほとんどの器種が出土しており、人面墨書土器、小型カマド模造品、土馬など、祭祀用土器、土製品も出土している。

Ⅳ まとめ

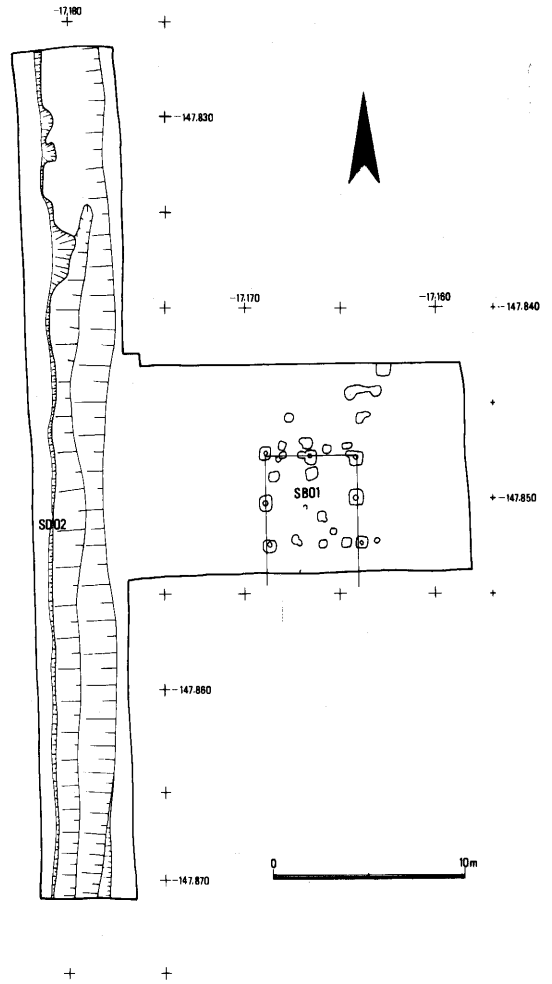
今回の調査地は、東堀河のこれまでの調査では、最も北に位置しており、本調査で、少なくとも左京で、六条から九条まで、堀河が、三坊の九坪から十二坪のほぼ中央を北から南へ貫流していたことが確認できた。西岸が検出できなかったため、河道の中軸を求められないが、これまでの調査結果をもとに推定すると、河道の中軸は、十坪の中央よりやや西に寄るものと思われる。今後の資料の増加をまって改めて検討したい。

(森下 恵介)

注) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976

同

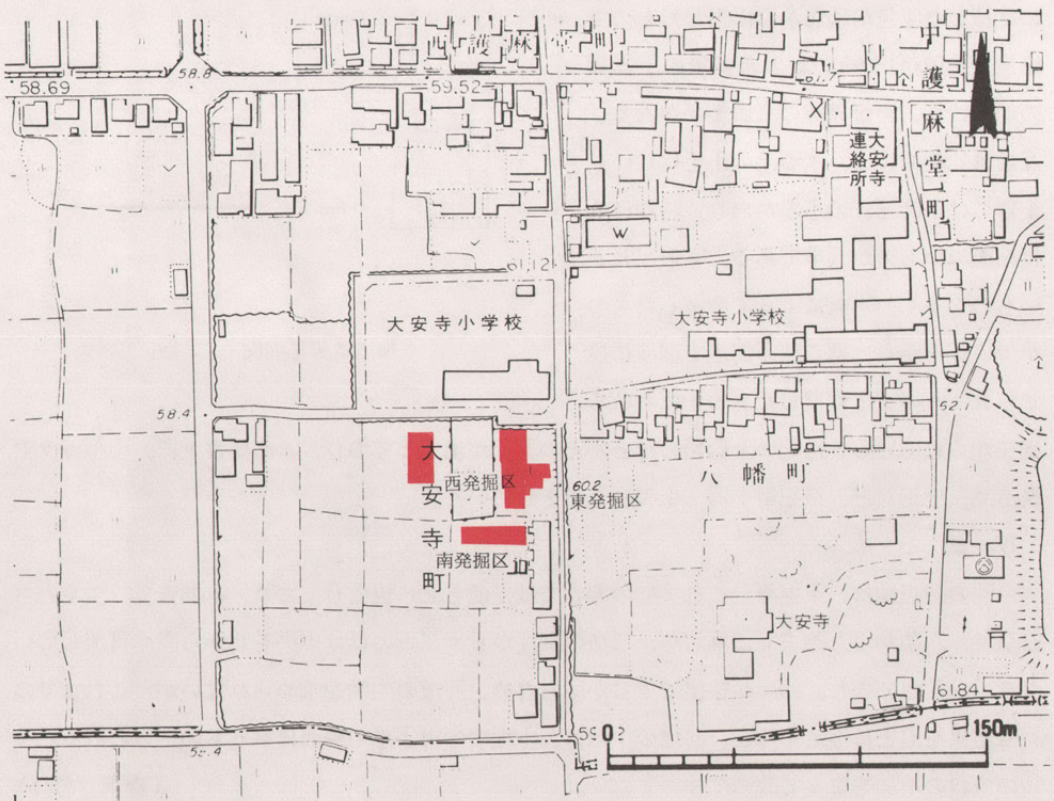
『平城京東堀河—左京九条三坊の発掘調査』1983



検出遺構平面図 1/400

20. 平城京左京六条三坊十三坪の調査

本書は、奈良市大安寺町29番地の1における大西保治氏届出の資材置場造成工事、及び同24番地の3他における奈良市立大安寺小学校屋内体育館増築工事に伴う事前発掘調査の報告である。当該地は、平城京条坊復元では左京六条三坊十三坪に相当し、大安寺境内の西隣にあたる。両調査地は同坪内で隣接した箇所にあるため、併せて報告する。前者は、坪内の東部中央にあたり、東三坊大路西側溝の確認を目的として発掘区（南発掘区）を設定した。面積は160㎡である。調査期間は、昭和58年5月11日から6月8日までである。後者は、坪の北東隅にあたり、東三坊大路と十三坪の北を限る小路との交差部が想定された。調査地の中央部は、既に造成されており、発掘区の設定に制約を受けたが、交差部が予想される箇所に面積360㎡の発掘区（東発掘区）を設定することができた。更に、西側の空闲地に、十三坪内の様相を知るために、面積200㎡の発掘区（西発掘区）を設定した。調査期間は昭和58年11月28日から昭和59年1月27日までである。



発掘区の位置 1/3000

II 検出遺構

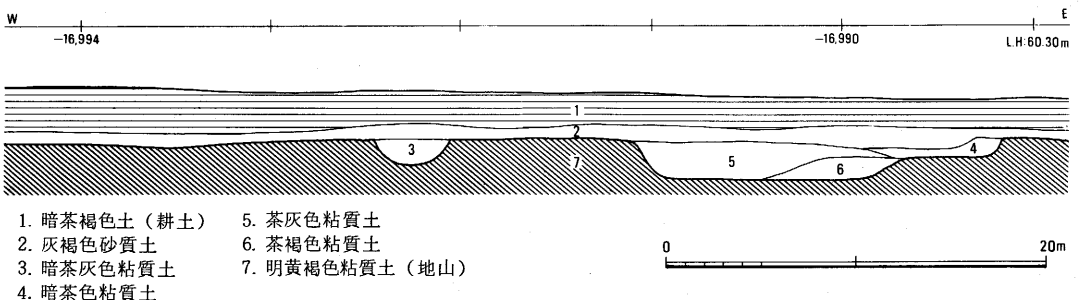
検出した主な遺構は、東三坊大路、同西側溝、築地塀、掘立柱建物、柱列、井戸、土塙などである。当初十三坪、十四坪間の小路も想定したが発掘区北側の市道下に存在するものと思われ検出することはできなかった。

発掘区の基本的な層序は、耕土（10～25cm）の下、灰褐色砂質土（5～10cm）が堆積し、地表から約35cmで、明黄褐色粘質土の地山へと至る。灰褐色砂質土からは、奈良時代から中世にかけての土器片が出土した。遺構は、明黄褐色粘質土上面で検出した。また、南発掘区の西部においては、明黄褐色粘質土上面に約30cmの厚さで須恵器、土師器片を包含する暗黄灰色土（整地層）があり、この上面から切り込んでいる掘立柱建物の柱穴を検出した。

S F 01 東発掘区東部において検出した南北方向の道路であり、東三坊大路と考えられる。西側溝 S D 02 の検出により、その西限が判明したが、東側溝を検出することができなかったためその路幅については不明である。発掘区内では、幅12m分を検出した。

S D 02 東三坊大路 S F 01 の西限を画す南北方向の素掘り溝である。上部は削平を受けており、側溝底部を確認したにとどまった。幅1.4m～1.8m、検出面からの深さ15cm～20cmを測る。東岸が浸蝕を受け、路面の方へ緩やかに広がる。埋土は上下2層に大別される。上層には、東岸を浸蝕した形で、暗茶色粘質土が堆積する。この層から若干の瓦罎類が出土した。下層には、東岸から茶褐色粘質土が流入した上に、茶灰色粘質土が堆積する。この層から若干の奈良時代の遺物が出土している。側溝は、発掘区内で数箇所、土塙等によって切り込まれており、それらの出土遺物から見て、11世紀中頃には既に側溝は廃絶し、その機能を果していなかったと考えられる。

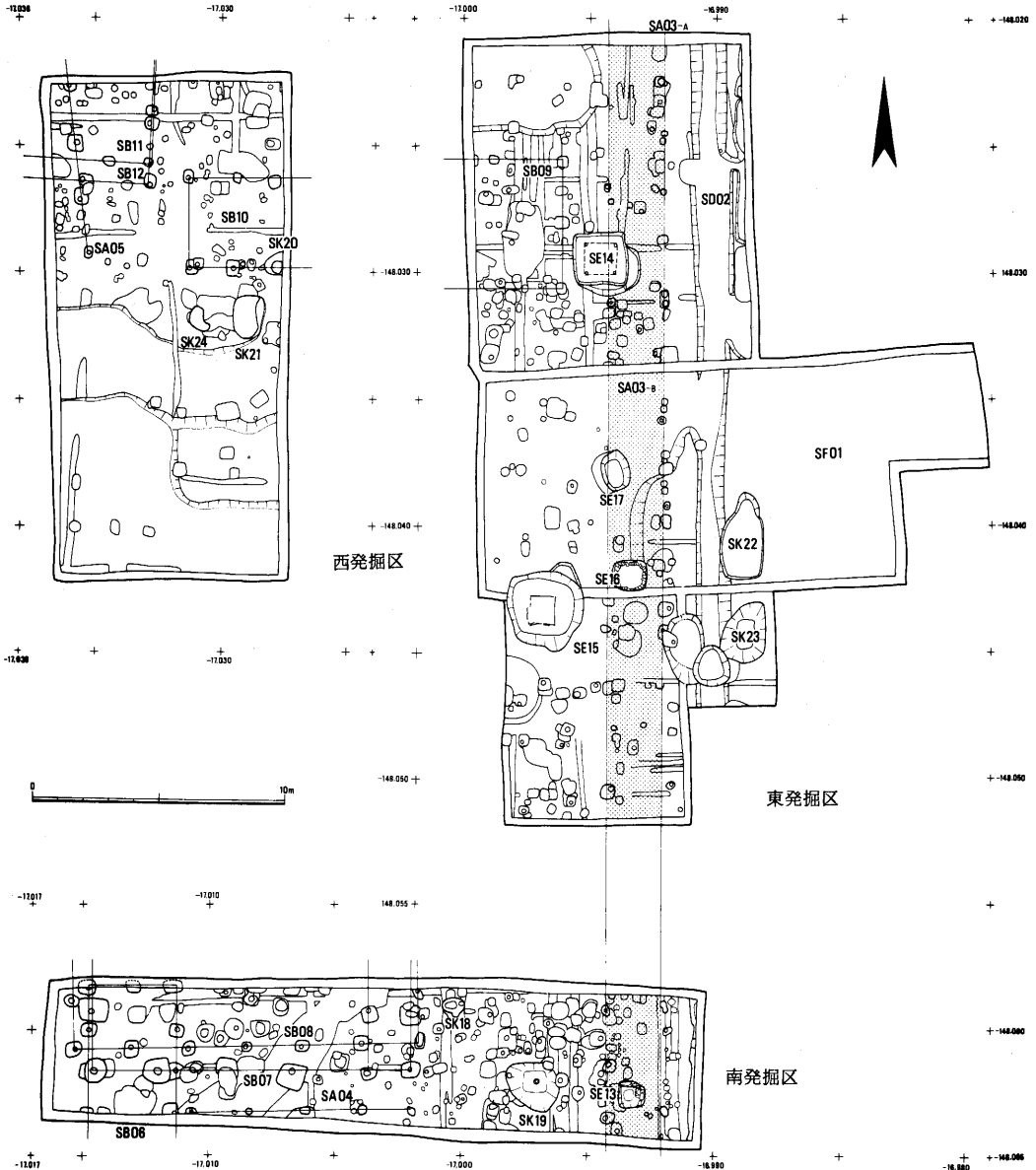
S A 03 A・B 東三坊大路と十三坪内を画する塀及び築地塀である。S A 03 A は側溝心からの距離 2 m で、南北に伸びる柱列。柱間2.1m等間である。S A 03 B は、A の柱列に重複して南北に連なる柱列である。発掘区南部で柱間2.1m（7尺）幅で、概ね2.1m（7尺）等間に柱穴の並ぶ箇所が見られる。これらは築地構築時の堰板留めの添柱痕跡と考えられる。S D 02 とは心々間で約 3 m（10尺）の距離にある。A・B はその重複関係から、A の塀が廃絶した後 B の築地が構築されたことがわかる。



東発掘区北壁堆積土層図 1/40

SA04 南発掘区の南辺で検出した東西柱列。全長4間(8.8m)を測り、柱間は2.2m等間である。建物SB08の南面に並行するために、これに関係した塀であるとも考えられる。主軸は国土方眼位に対し、東で北に振れる。

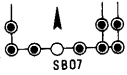
SA05 西発掘区の北西隅で検出した南北柱列。3間分(6.5m)を検出し、北側は発掘区外へのびる。柱間は、南から2.1-2.1-2.3mと不揃いである。柱穴はいずれも小さく、不整形である。主軸は国土方眼位に対し、北で西に振れる。



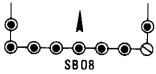
検出遺構平面図 1/300



S B 06 南発掘区の西部で検出した桁行3間(5.1m)以上、梁行2間(3.4m)の南北棟で、南側は発掘区外へのびる。柱間は、桁行・梁行ともに1.7m等間である。重複関係から、S B 07、S B 08よりも古いことがわかる。主軸は、国土方眼位にはほぼ一致する。



S B 07 南発掘区の中央西寄りで検出した桁行5間(12.6m)、梁行1間(2.4m)以上の東西棟である。東から1間目の柱筋に間仕切りの柱穴を設ける。北側は、発掘区外へのびる。柱間は、桁行が東から1.7-3.0-2.7-2.7-2.5mと不揃いである。身舎の柱穴は、一辺約1.2mを測るのに対して、間仕切りの柱穴は一辺0.7mと小さい。重複関係から、S B 06よりは新しいことがわかる。主軸は、国土方眼位に対し、東で北に振れる。



S B 08 南発掘区の中央西寄りで検出した桁行6間(13.8m)、梁行1間(2.1m)以上の東西棟で、北側は発掘区外へのびる。柱間は、桁行2.3m等間である。柱穴は、S B 06、S B 07に比して小さく、不整形のものが多い。東南隅の柱穴には、柱の抜き取り痕跡がみられた。重複関係から、S B 07よりは新しいことがわかる。また、S A 04に並行する位置にあるためこれと何らかの関係をもつものとも考えられる。主軸は、国土方眼位に対し、東で北に振れる。



S B 09 東発掘区の北西で検出した桁行1間(2.4m)以上、梁行2間(4.8m)の東西棟で、西側は発掘区外へのびる。柱間は、桁行、梁行とも2.4m等間である。主軸は、国土方眼位にはほぼ一致する。



S B 10 西発掘区の北東で検出した桁行2間(3.6m)以上、梁行2間(3.6m)の東西棟で、東側は発掘区外へのびる。柱間は、桁行1.8m等間である。主軸は、国土方眼位にはほぼ一致する。南面東部の柱穴は土壌S K 20によって削平されており、その痕跡が残るのみである。

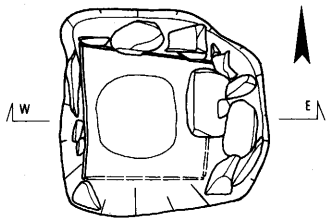


S B 11 西発掘区の北西において検出した東西1間以上、南北1間以上の建物で、東西・南北方向ともに発掘区外へのびるため規模は不明。柱間は、東西方向が1.6m、南北方向が2.2mである。主軸は、国土方眼位に対し、北で東に振れる。

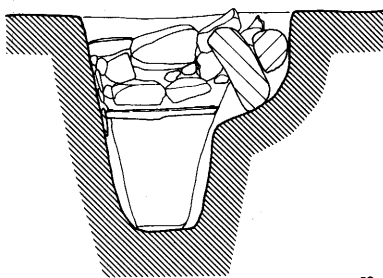


S B 12 S B 11に重複する位置で検出した東西1間以上、南北1間以上の建物である。東西、南北方向ともに発掘区外へのびるため規模は不明である。柱間は、東西方向、南北方向ともに2.4mとなる。主軸は、国土方眼位にはほぼ一致する。

※ 建物模式図凡例 ●柱痕跡残存 ○柱抜き痕跡を確認 ○掘形のみ確認 ○推定 (▲は北を示す)



LH585m

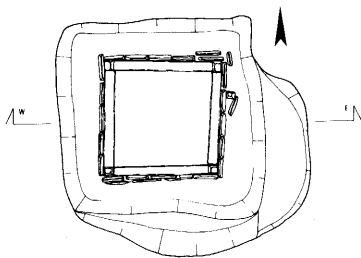


0 50m

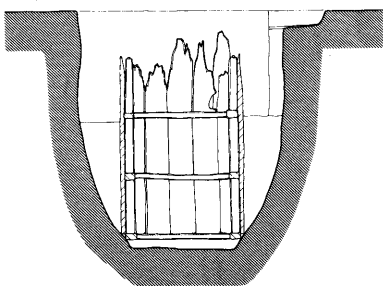
S E13平面・立面図 1/40

S E13 南発掘区東南隅で検出した石積井戸である。掘形は平面隅丸方形を呈し、検出面からの深さ約1.1mを測る。掘形は二段掘りされ、検出面下0.5mから東西約0.7m、南北約0.6mの方形掘形となる。掘形上段に板材を井桁状に組みその上に人頭大の石を積む。北壁・南壁に残る石は、板材に小口を揃えており、原位置をとどめる可能性が強い。石積は2段分を確認した。北壁・西壁に遺存する井桁状の板材は腐蝕が著しく、各長さ55cm、幅3~4cm、厚さ2cmのみが残る。下段は湧水層（明黄色砂礫）を挿鉢状に掘込むだけのものである。埋土から軒丸瓦（平城宮6138E型式）、軒平瓦（平城宮6712A・B型式）、及び12世紀中頃の土器が出土した。

S E14 東発掘区北部で検出した井戸である。掘形は一辺2mの方形を呈す。上部壁面は垂直に掘り込まれており、下半部で挿鉢状になる。深さは検出面から約2.5mを測る。井戸枠は内法一辺1.2mの方形で、縦板組である。枠材は、建築部材の転用と考えられる幅約25cm、厚さ5cm前後の板材を用い、各辺に5~6枚が並べられる。内部は、柄組みした横棧に、両端に柄を作り出した10cm角、長さ55cmの角柱を隅柱として載せ、交互に組みあげて縦板をうける。四隅柱、横棧とも三段分が遺存する。井戸掘形裏込内から軒丸瓦（平城宮6138C、6225A、7251A型式）、軒平瓦（平城宮6712A・6716C型式）が出土した。井戸埋土からは軒丸瓦（平城宮6137A、6138C、6231A、6304D型式）、軒平瓦（平城宮6661B、6663A、6664A、6690A、6712A・B、6716C型式）、及び黒色土器B椀、土師器皿、越州窯系青磁片、貞観永宝等が出土した。出土土器から、井戸の廃絶時期は11世紀中頃にもとめられよう。



LH600m



0 50m

S E14平面・立面図 1/40

S E15 東発掘区南西で検出した井戸。掘形は一辺1.5mの平面方形を呈し、断面挿鉢状に掘り込まれる。深さは検出面から3mを測る。井戸枠は、内法一辺0.8mの方形。枠材は2段に組上げられ、上部は縦板に横板を併用して組み下部は縦板組となる。下部の枠組は、各辺とも扉材の転

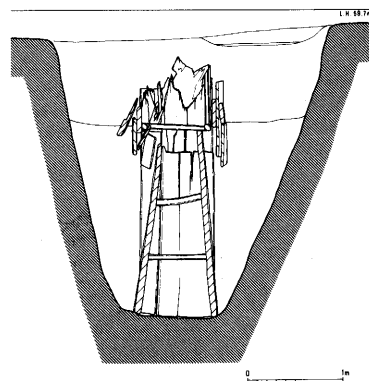
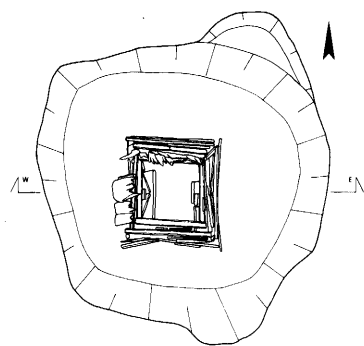
用材と思われる長さ約2m、幅約60cm、厚さ5cmを測る一枚板を用いて囲う。またそれぞれの間隙は、幅20cm前後の転用材で塞がれている。内側を横棧2段を組み、うける。上部の枠組は、下部枠材の外側に厚さ2cm前後の縦板を並べ、横板・横棧でこれをうけている。横棧は下部枠材上の一段分が残る。掘形裏込内から軒丸瓦（平城宮6138C・E, 6284D, 6303D, 6313A型式）、軒平瓦（平城宮6664A・H, 6712A・新, 6716C型式）が出土。埋土から軒丸瓦（平城宮6091A, 6138C型式）、軒平瓦（平城宮6667A, 6712A・B, 6716C, 6717A型式）、及び10世紀末から11世紀初頭にかけての土器等が出土した。

SE11 SE15の東側で検出した瓦積井戸である。掘形は、東西1.3m、南北1.2mの平面長円形を呈し、断面搦鉢状に掘り込まれている。深さは、検出面から0.8mを測る。井戸枠は、井戸内側面を長円形に整え積みあげている。利用されていた瓦は、大半が丸瓦・平瓦であるが、中に平城宮6712A及び6702G型式の軒平瓦も使用されていた。瓦には、火を受けたものが見られ、大安寺関係の廃棄された瓦を転用したと考えられる。井戸構築に際しては、井戸掘形下部に粘土を敷き、その上にやや大きい丸瓦を巡らせ安定を図り、瓦の間隙に粘土を詰めながら積みあげる。瓦の積上げには、4段～5段の段位が認められ、ある程度の単位をもって積まれたものと考えられる。井戸埋土から、12世紀中頃の瓦器碗・皿、土師器皿が出土した。

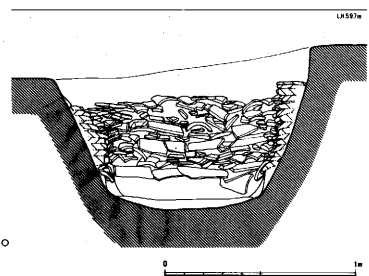
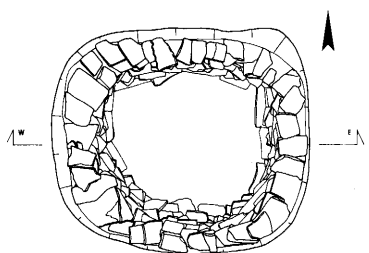
SE17 東発掘区中央で検出した井戸。南北1.6m、東西1.2mの平面長円形を呈す。断面搦鉢状に掘り込まれ、検出面から深さ0.85mを測る。井戸枠は既に抜きとられており、埋土から8世紀中頃の土器が出土した。

SK18 南発掘区中央北寄りで検出した土壇。東西0.9m、南北0.6mの平面長円形を呈す。断面搦鉢状に掘り込まれ、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土から8世紀後半の土器が出土した。

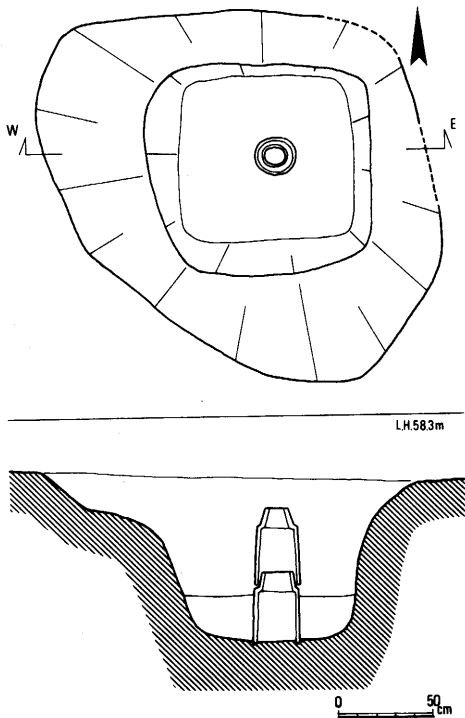
SK19 南発掘区東側で検出した東西約2.0m、南北約1.9m、深さ約0.9mを測る不整形の土壇。中央部に長さ39cm、上部外径12cm、下部外径18.5cm、厚さ2.3cmの半截前の丸瓦状を呈する土管を上下2段に重ね置く。下段の土管は、湧水層である明黄色砂礫を掘り込んで据えられるため、湧水が著しい。井戸の可能性



SK15平面・立面図 1/40



SE16平面・立面図 1/40



S K 19平面・立面図 1/40

も考えられる。埋土から11世紀末頃の土器片が出土。

S K 20 西発掘区で検出した南北0.8m、東西0.8m、検出面からの深さ0.2mを測る不整形の土壇。埋土から10世紀・11世紀の土器が出土した。

S K 21 西発掘区で検出した南北1.8m、東西0.8m、検出面からの深さ0.3mを測る不整形の土壇。埋土から10世紀中頃から後半の土器が出土した。

S K 22 東発掘区中央で検出した土壇。南北3.4m、東西1.8mの平面長方形を呈す。検出面からの深さ0.35mを測る。埋土から11世紀中頃の土器が出土した。

S K 23 S K 22の南で検出した南北2.4m、東西1.8m、検出面からの深さ0.3～0.5mを測る不整形の土壇。埋土から10世紀・11世紀の土器が出土した。

S K 24 西発掘区で検出した東西1.2m、南北0.8m、検出面からの深さ0.3mを測る不整形の土壇。埋土から10世紀後半の土器が出土した。

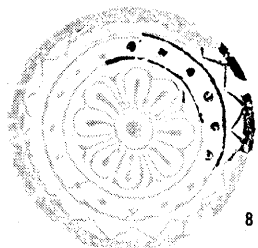
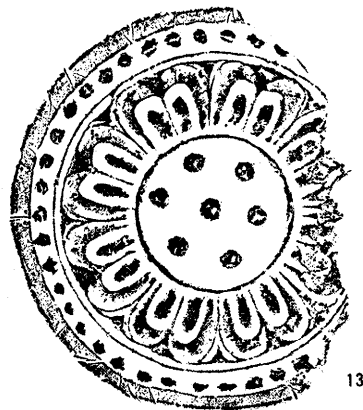
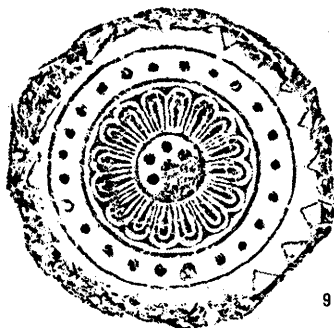
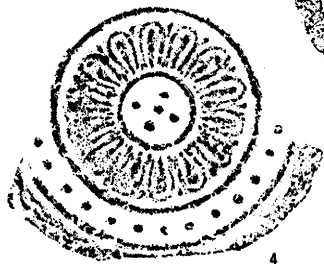
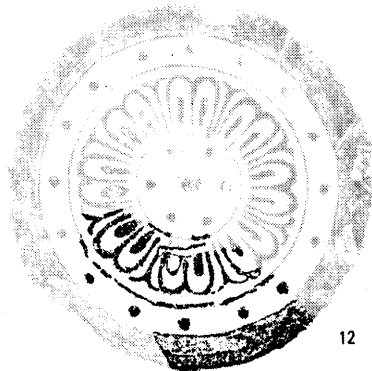
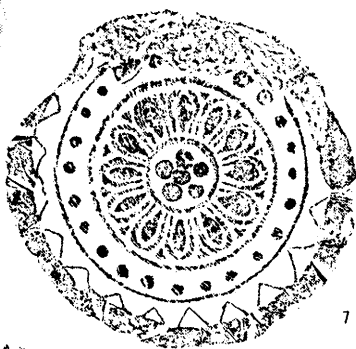
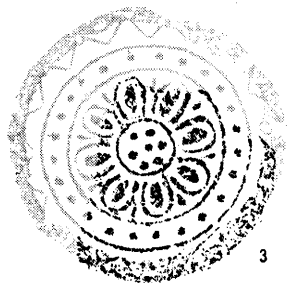
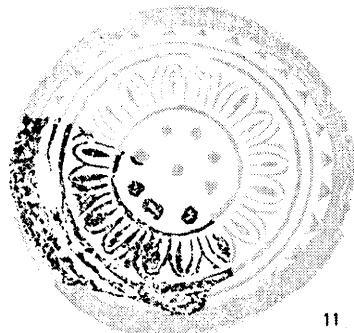
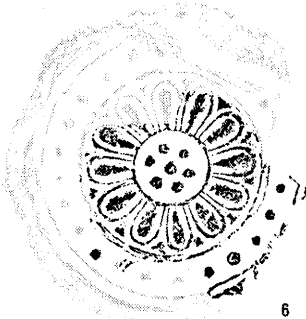
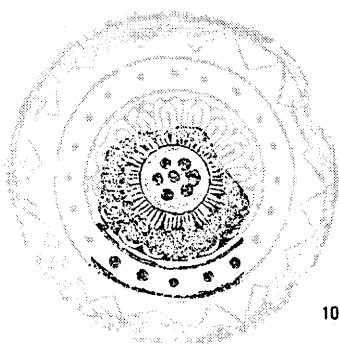
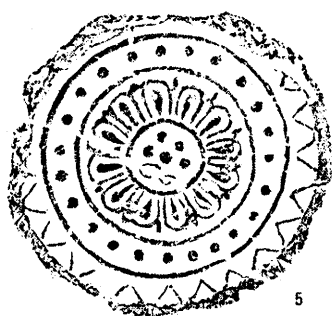
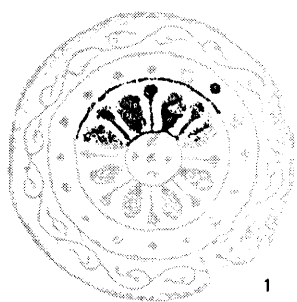
Ⅲ 出土遺物

今回の調査では、各発掘区とも井戸、土壇などの遺構を中心に、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多量に出土した。瓦、土器、木製品、石製品、銭貨などその種類は多岐にわたっている。以下にその概略を記しておく。

瓦磚類 瓦磚類はどの発掘区からも大量に出土した。大多数を占めるのは通常の丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦50点、軒平瓦66点、鬼瓦2点、塼2点がある。

軒丸瓦 50点のうち小片のため型式認定のできない3点を除き、11型式14種に分類できる。

1は単弁8弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁は無子葉で半球状の盛りあがりをもち、窪んだ中房には1+4の蓮子を配する。外区内縁は珠文帯で、外縁に唐草文のめぐるのが特徴的である。平城宮6091A型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦^{注1)}編年ではⅢ期に位置づけられる。1点出土。2は単弁16弁蓮華文軒丸瓦。各弁は独立せずにつながり、間弁をもたない。中房は突出し、1+6の蓮子を配する。外区内縁は珠文帯であるが、内縁と外縁を画す界線がないのは特徴的である。平城宮6133M型式軒丸瓦と同範である。1点出土。3は小型の単弁8弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁は短かく、弁間には涙滴状の小さな間弁をもつ。中房には1+6の蓮子を配し、外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。平城宮6137A型式軒丸瓦と同範である。4点出土。4は単弁14弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁はゆるやかに反転し弁端はまるい。間弁は中房から発しているが、間が途切れて再度弁端のみが涙滴状に表われる。突出した中房には1+4の蓮子を配し、外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯

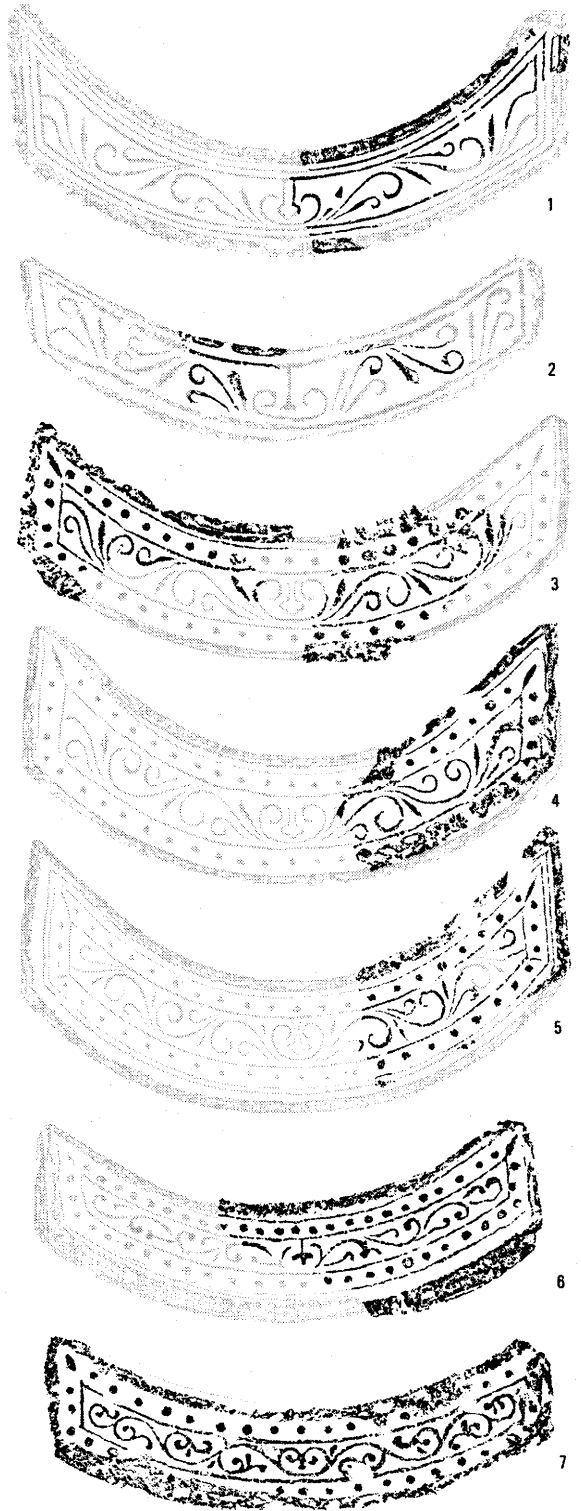


出土軒丸瓦 1/4

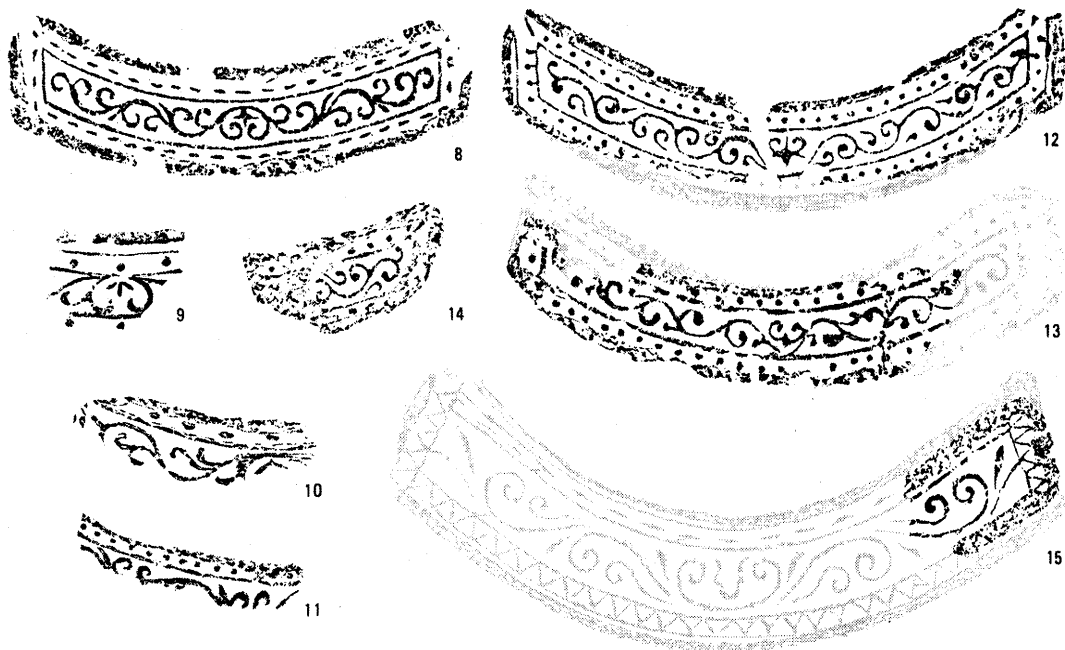
文がめぐる。2点あり、うち1点の瓦当裏面には布の圧痕が残る。平城宮6138型式の軒丸瓦に属すものであるが、同範品が知られていない新種である。5～7は複弁12弁蓮華文軒丸瓦。5は蓮弁が短かく、間弁は小さな涙滴形を呈する。中房には1+6の蓮子を配し、外区内縁には珠文、外縁には線鋸齒文がめぐる。6は平担で弁端の丸い蓮弁をもち、弁間には楔形の間弁を配する。中房には1+6の蓮子を置き、外区内縁は珠文帯、外縁は素縁である。7は弁端がやや尖り気味で、やはり楔形の間弁をもつ、中房の蓮子は1+5の配置で、外区は内縁に珠文、外縁に線鋸齒文がめぐる。これらはみな平城宮6138型式の軒丸瓦に属し、5はE種と、7はC種と同範で6は阿弥陀淨土院に類例がある。5が5点、6が1点、7が14点出土。8は小型の複弁4弁蓮華文軒丸瓦。中房には大きな蓮子一つのみを配し、外区内縁には珠文、外縁には線鋸齒文がめぐる。平城宮6313A型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦編年のⅡ期に位置づけられる。宮内では同6685型式などの小型軒平瓦と組み、築地棟瓦に使用されたとみられている。1点出土。9・10はともに間弁が界線状にめぐる複弁8弁蓮華文軒丸瓦。9の中房は突出するが、10のものは弁区とほぼ同一面につくられ中央がレンズ状に膨らむ。蓮子の配置はいずれも1+6で、外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文がめぐるのも同様である。9は平城宮6304D型式、10は同6284D型式軒丸瓦と同範である。9が7点10が1点出土。11は間弁の独立した複弁8弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁は短かく弁端が尖り気味で、大きな中房には1+8の蓮子を配する。外区は内縁に二条の圈線、外縁に凸鋸齒文がめぐる。平城宮6225A型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦編年では従来のⅡ期からⅢ期への線下げ改訂^{注2)}がなされている。1点出土。12はいわゆる東大寺式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦。間弁の先端が蓮弁に接するのが特徴的である。中房は平担で弁区よりわずかに低く、1+6の蓮子を置く。外区内縁は間隔の粗い珠文帯外縁は素文である。平城宮6235J型式軒丸瓦と同範である。1点出土。13はいわゆる大官大寺式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦。全体に大ぶりで、蓮弁は弁端が大きく反り力強く表現される。突出する大きな中房には1+6の蓮子を配し、外縁は斜縁に珠文がめぐる。平城宮6231A型式軒丸瓦と同範である。2点出土。なお、図示していないが、上述のものほかに平安時代の軒丸瓦5点がある。いずれも同範で、本年度の大安寺旧境内83-1次調査にも同範品(76頁軒丸瓦3)がある。

軒平瓦 60点のうち小片のために型式認定のできない2点を除き、9型式15種に分類できる。1は圈線縁の外区をもつ三回反転の均整唐草文軒平瓦。上方に開くC字状の中心葉内に、二条の基軸で垂下される花頭を中心飾りとし、外区圈線は2重にめぐる。平城宮6663A型式軒平瓦と同範である。3点出土。2は外区素文の三回反転均整唐草文軒平瓦。1とは異なり、唐草文第3単位が脇区界線にとりつかずに巻込むが、瓦当面对し左第3単位第1支葉のみは界線につく特徴をもつ。中心飾りには逆T字形の花頭を据える。平城宮6702G型式軒平瓦と同範である。1点出土。3・4は外区に珠文帯をもつ三回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りはともにC字状中心葉内に基軸二条で垂飾される花頭をもつが、1・2とは異なり基軸は上界線から遊離する。いずれ

も平城宮6664型式の軒平瓦に属し、3はA種と同範。4はH種と同範で同軒瓦編年Ⅰ期に位置づけられる。3が2点、4が1点出土。5は外区珠文帯で四回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りにはやはり基軸二条で垂飾される花頭をもつが、基軸が上端で開くのが特徴である。平城宮6667A型式軒平瓦と同範で、同軒瓦編年ではⅡ期に位置づけられる。1点出土。6・7も外区珠文帯の四回反転均整唐草文軒平瓦である。ただ5とは違って、唐草文は連続して派生しつつ反転してゆく。6は唐草先端が丸くなり、主葉と支葉との巻込み方向が逆であるのが特徴的で、中心飾りには三葉形の花頭をおく。平城宮6690A型式軒平瓦と同範である。1点出土。7は唐草先端近くで主葉と支葉とが二又状に分かれ、端部は丸くなる。中心飾りはC字状中心葉内に涙滴形の小さな花頭をもつ。平城宮6717A型式軒平瓦と同範である。1点出土。8は小型の三回反転均整唐草文軒平瓦。6・7同様に連続する唐草文をもち、唐草第1単位の第2支葉が欠落する点と、第3単位主葉が先端部でさらに支葉と分かれる点が特徴的である。中心葉は下方に開き三葉形の花頭が垂飾され、外区には杏仁形の珠文がめぐる。平城宮6716C型式軒平瓦と同範である。6点出土。なお、小片ではあるが9~11も唐草文の展開のしかたや中心飾りの形状からみて、6716型式に属する軒平瓦とみることができる。9・11は外区に円形珠文、10は杏仁形珠文を配する。いずれもこれまでに同範品の出土は知られていない。各一点出土。12・13は外区珠文帯の五回反転均整唐草文軒平瓦。ともに唐草は連続



出土軒平瓦 1/4



出土軒平瓦 1/4

し、各主葉は一葉ずつの支葉をもつ。しかしながら、12では各支葉が独立し主葉との巻込み方向が一定でないのに対し、13の各支葉は主葉にとりつきこれと同方向に巻込む。中心飾りの形状は牛頭形を呈するもので、13のそれは唐草とつながる。また、13の文様が全体的に線の太いものであることも特徴であろう。両者とも平城宮6712型式の軒平瓦に属するもので、12はA種と、13はB種と同範である。12が36点、13が7点出土。なお、14も唐草文の形態から6712型式軒平瓦に属するものと判断できる。12・13よりも小型のもので、同範品の知られない新種である。1点出土。15はいわゆる大官大寺式の三回反転均整唐草文軒平瓦。唐草、中心飾りとも大ぶりの表現で、上外区に杏仁形珠文、下外区、脇区に線鋸齒文がめぐる。平城宮6661B型式軒平瓦と同範である。1点出土。

鬼瓦 東発掘区の井戸S E 15枠内から2点が出土した。いずれも鬼面文鬼瓦の小片で、1点は眉間から鼻柱にかけての破片、いま一点は眼球と脛とを残している。ともに毛利光俊彦氏の分類^{注3)}では南都七大寺IV式の鬼瓦に属するものである。

塼 塼も東発掘区の井戸S E 15枠内から出土したもので2点がある。いずれも方形塼で、1点は長辺25.8cm、短辺25.3cm、厚さ5.0cmの完形品。片面と端面は丹念に削って仕上げられるが、残る片面は平行の縄叩き目のまま放置される。いま一点は現長辺36cm、短辺29cm以上、厚さ4.8cmの大型品。各面とも丁寧な削りで美しく仕上げられている。 (中井 公)

注1) 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ 瓦編2解説」1975

注2) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告XI 本文」1982

注3) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」(奈良国立文化財研究所『研究論集Ⅳ』所収 1980)

土器類 今回の調査では、東・西発掘区を中心に多量の土器が出土した。SD02, SE17, SK18等の遺構及び包含層からは奈良時代の土器が出土した。このうちSE17出土土器が奈良時代中頃の特徴を示す他は、ほとんどが奈良時代末頃の土器である。また、SE14~16, SK19~24の遺構及び包含層から平安時代以降の土器が出土した。以下にその概要を記す。平安時代以降の土器については、比較的良好な一括出土状態を示すと考えられるものについて図示し記述する。

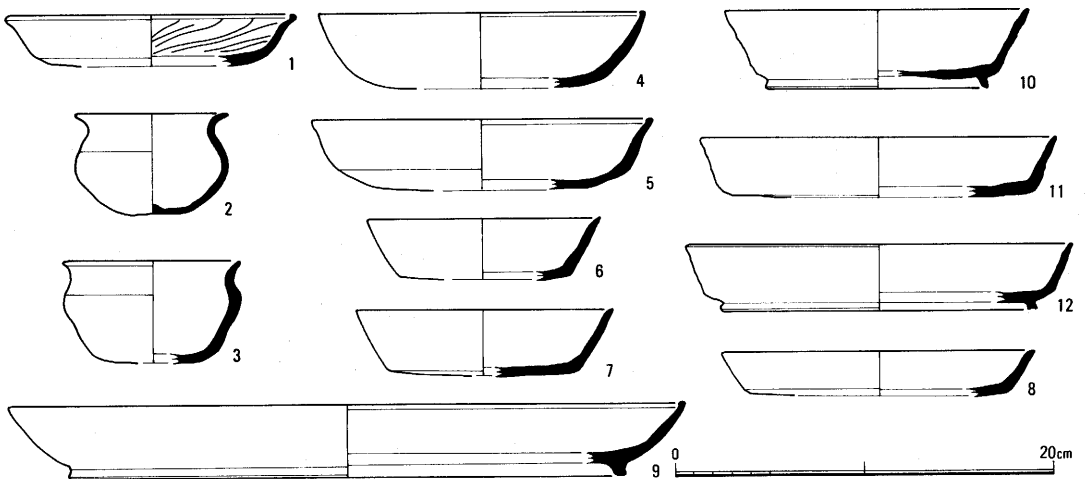
SD02出土土器 (第1図) 土師器, 須恵器などが出土。土師器には杯A(4・5)などがあり, 5は底部外面をへら削りして仕上げ, 口縁部内外面をよこなでする。4は, 磨滅が著しく調整不明瞭。須恵器には, 杯A(6・7), 皿A(8)などがある。6・7は底部外面をへら削りし, 口縁部内外面は回転ナデ調整する。

SE17出土土器 (第1図) 土師器杯A(1), 壺B(2・3)などが出土。1は, 口縁部内面に一段の斜放射状暗文を施す。底部外面は, へら削り調整。2・3は口縁部上端だけをよこなでし, それ以上は未調整のままである。2は完形である。

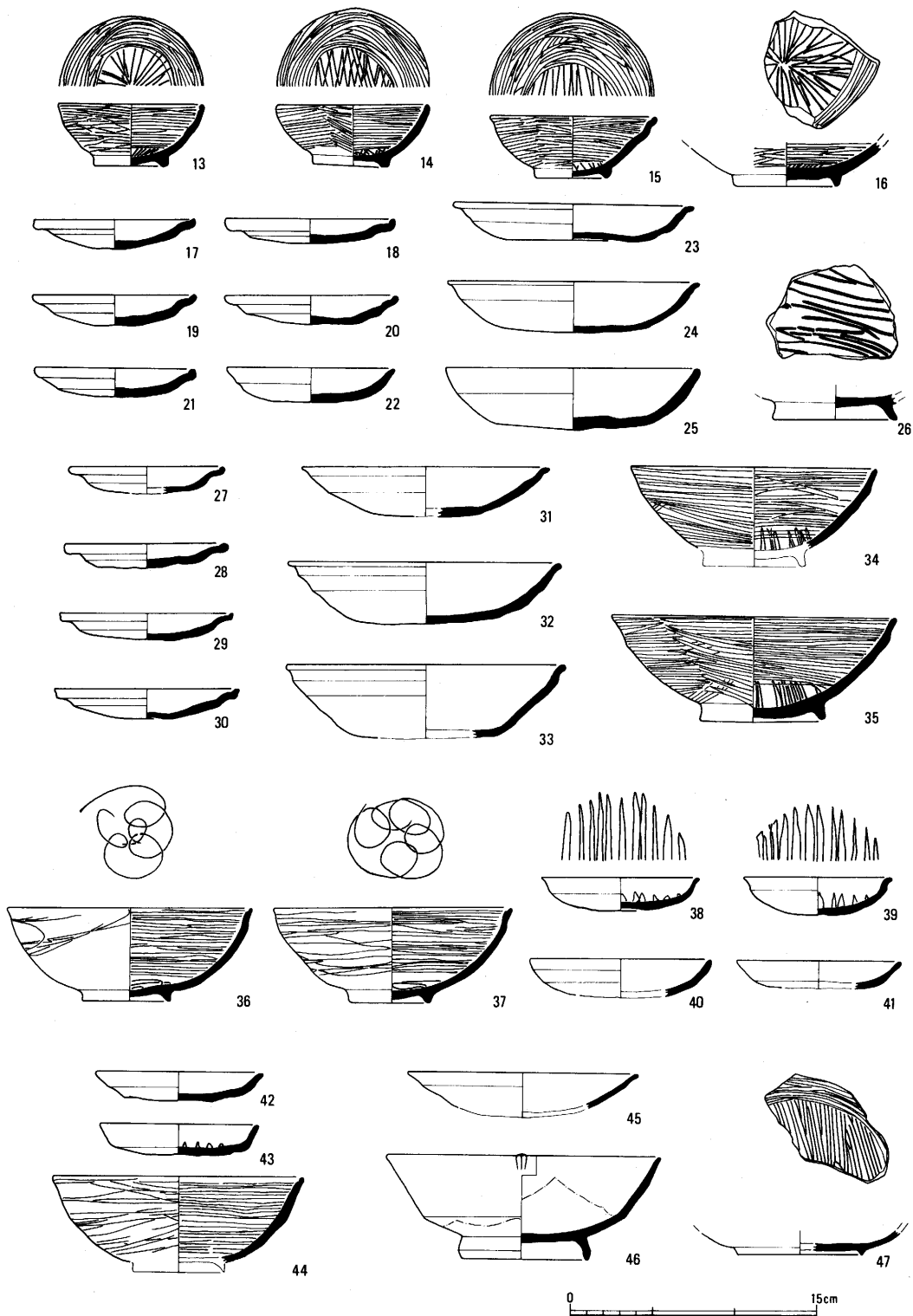
SK18出土土器 (第1図) 須恵器杯A(10), 皿A(11), 皿B(12)及び土師器小片などが出土した。10は, 回転ナデ調整する。11は, 底部外面に不定方向のナデを施す。12は, 回転ナデ調整で仕上げている。

SE13出土土器 (第2図) 土師器皿(42), 瓦器皿(43), 瓦器碗(44)が出土した。瓦器皿は, 斜め上方へ立ちあがる口縁部を有し, 底部内面は平行ジグザグ状に磨きを施す。

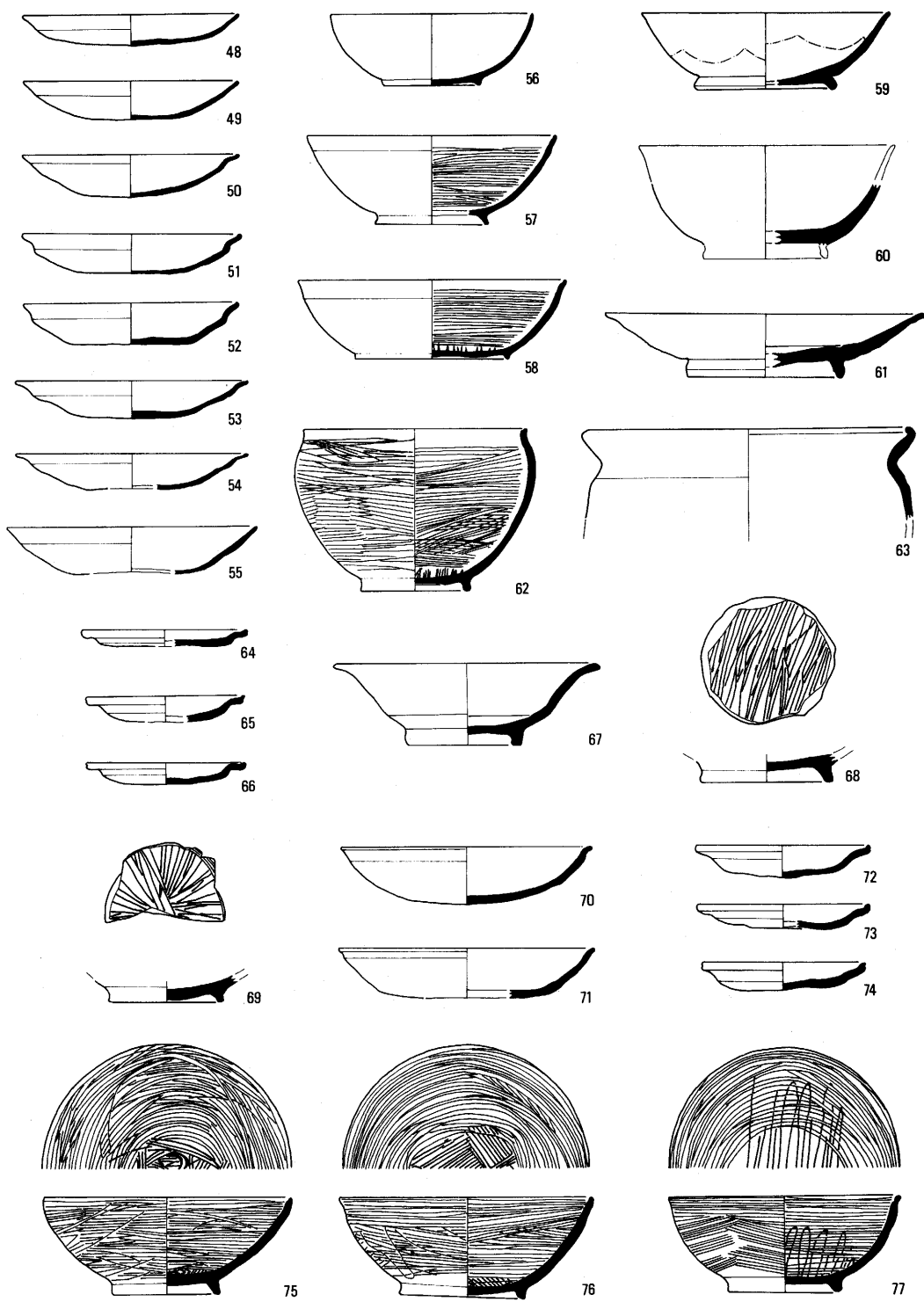
SE14出土土器 (第2図) 黒色土器B碗(13~16), 土師器皿(17~25)が出土した。13~15は小碗で, 器径9.0~10.3cm, 器高3.8cmを測る。口縁内面に一条の沈線を施すもの(13・15)がある。内, 外面ともへら磨きは密で, 内面底部の磨きを放射状に施すもの(13)と平行ジグザ



第1図 SD02, SE17, SK18出土土器 1/4



第2圖 SE13・14・15・16・SK20出土土器 1/4



第3圖 SK21・22・24出土土器 1/4

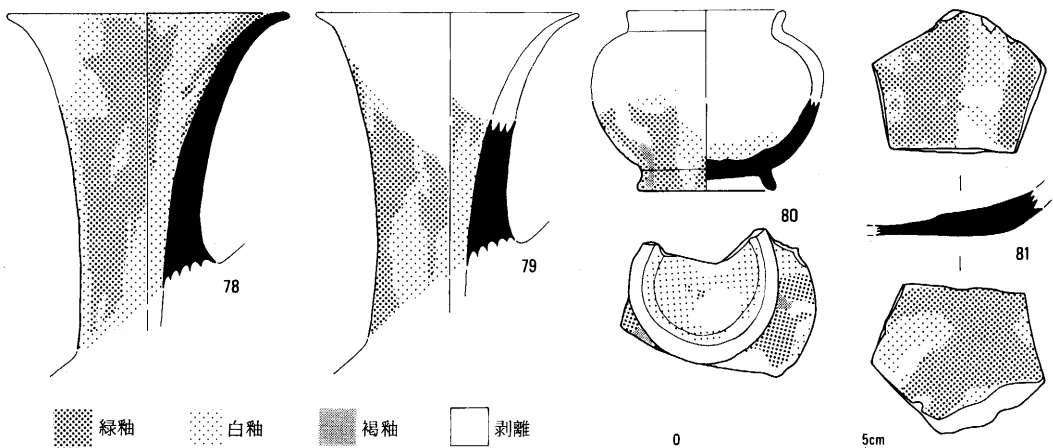
グ状に施すもの(14・15)がある。土師器皿は、大きさによって小皿(口径10cm前後)、と大皿(口径15~15.5cm)に分けられる。小皿(17~22)は、「て」字状口縁を成すものが大半を占める。大皿(23~25)には、口縁部を外反させるもの(23・24)と内彎しつつ立ち上り端部を丸くおさめるものがある。

SE15出土土器(第2図) 黒色土器A・B碗, 土師器皿が出土した。黒色土器A碗(26)は、外方へ張る高い高台をもつ。黒色土器B碗(34・35)は、半球形の体部をもち、内面、口縁部外面をよこなで、内外面を密にへら磨きする。内面底部の磨きは、平行ジグザグ状に施す。土師器皿は、大きさにより小皿(口径10~11cm)と大皿(口径15~17cm)に分けられる。小皿(27~30)は「て」字状口縁を呈する。大皿(31~33)は、内面、口縁部外面をよこなでし、口縁端部を外反させる。

SE16出土土器(第2図) 瓦器碗(36・37), 瓦器皿(38・39), 土師器皿(40・41)が出土した。36・37は内面、口縁部外面をよこなでし、内面やや粗く、外面粗くへら磨きする。内面底部はラセン状に磨きを施す。38・39は、内面、口縁部外面をよこなで、内面底部に平行ジグザグ状の磨きを施す。土師器皿は器径10~11cmを測る。内面、口縁部外面をよこなでする。

SK20出土土器(第2図) 黒色土器A碗(47), 土師器皿(45), 灰釉陶器(46)が出土。46は輪花碗で、体部中位で内に折れ、稜をつくる。細長く下端部が内彎する三日月高台を有する。釉は漬け掛けにより施釉する。

SK21出土土器(第3図) 土師器皿(48~55), 黒色土器A・B碗(56~58), 黒色土器A壺(62), 土師器甕(63), 灰釉・緑釉陶器(59~61)等が出土。土師器皿は、器径13~15cmを測る。口縁部を外反させ端部を上方につまみ上げるもの(50~54), 口縁端部を丸くおさめるもの(48・49・55)に分けられる。いずれも内面、口縁部外面をよこなでする。黒色土器碗B(56)は薄手の器壁をもつ。57・58は黒色土器A碗。57は半球状の体部に外方へ張る高い高台をもち、58は平底を呈し、断面三角形の低い高台を貼り付けている。ともに内面を密にへら磨きし、底部に平行



第4図 出土二彩・三彩陶器 1/4

ジグザグ状の磨きを施す。灰釉陶器碗（59）はやや幅広の低い三日月高台を有し、漬け掛けにより施釉する。60は緑釉陶器碗。回転糸切り痕を残す。61は緑釉陶器皿。幅広の高い三日月高台を付する。62は半球形の体部に短い口縁と低い高台をもつ。口縁部内外面をよこなでし、内面を水平に、底部内面を平行方向に細かくへら磨きする。外面は体部をへら削り後へら磨きを施す。

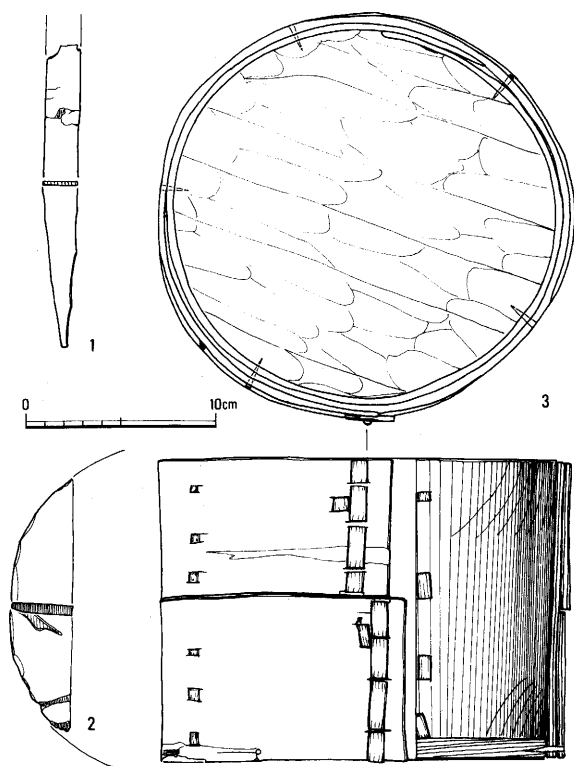
SK22出土土器（第3図） 土師器皿（70～74）、瓦器碗（69、75～77）が出土した。土師器皿は大きさにより小皿（器径10～10.5cm）と大皿（器径約15cm）に分けられる。小皿（72～74）は「て」字状口縁を呈し、内面、口縁部外面をよこなです。大皿（70・71）は口縁端部を外反させ、内面、口縁部外面をよこなです。瓦器碗は内面、口縁部外面をよこなでし、内外面とも丁寧なへら磨きを施す。内面底部の磨きは不整方向に密に施すもの（75・76）と、平行ジグザグ状に施すもの（77）、放射状に施すもの（69）が見られる。

SK24出土土器（第3図） 土師器皿（64～66）、黒色土器A碗（68）、白色土器（67）が出土。土師器皿は器径9.5～10cmを測り、「て」字状口縁を呈する。黒色土器A碗は外方へ張る高台を貼付ける。白色土器（67）は、軟質でロクロ水挽き成形による。体部中位で内へ折れ軽い稜をつくる。外面体部以下をへら削りし整形する。

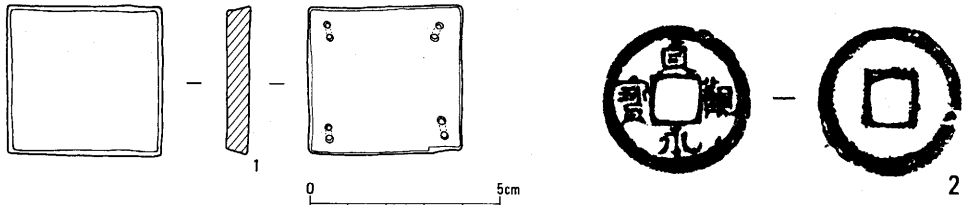
二彩、三彩陶器（第4図） SE14埋土内及びSE14西南方の土壌から二彩多口瓶、SE15東北方の土壌から二彩皿が出土した。また、Bトレンチ包含層から三彩小壺の底部破片が出土した。二彩多口瓶（78・79）はともに内外面の全周を8等分し、緑釉、白釉を交互にかける。二彩皿（81）は上下面とも緑、白の二彩釉をかける。三彩小壺（80）は、高台径3.7cmの葉壺形に復元できる。外面は、全周を等分し、緑釉を主に、間に褐釉、白釉を交互にかける。内面及び外面底部には白釉をかける。

その他の遺物

木製品（第5図） 削掛け（1）、蓋（2）、曲物（3）などがある。1は、柾目薄板の末端をV字状に尖らしたもので、上半部を欠損する。幅1.8cm、厚さ0.3cm。SE17出土。2は、柾目板を正円形に削ったもので、全体の約 $\frac{1}{4}$ が残る。側縁部は角を面取りし、丸く削る。容器の蓋として使



第5図 出土木製品 1/4



第6図 出土石製品 1/2・出土銭貨 1/1

用されたものと考えられる。復元径は16.4cm, 厚さ0.5cm。S E15掘形出土。3は曲物容器で直径19.5cmの底板に高さ15.4cmの側板をつけ, 5本の本釘でとめる。側板を上下2段のタガで巻く。側板は, 樺皮は3段で縫いつけ横へ一段引き出して縫い終る。タガの幅は広く, 側板全体を被う。タガは, 2列の樺皮で縫いつける。一列は3段縫いで, 他列は4段くぐりで縫いつけ, 横に一段引き出して終る。底板は板目材で表面を丁寧に面取りする。(篠原 豊一)

石製品, 銭貨 (第6図) 南発掘区包含層から石鈿1点(1), S E14埋土内から貞観永宝1点(2)が出土した。1は, 表面縦3.7cm, 横3.9cm, 裏面縦3.8cm, 横4.0cmの正方状で断面台形を呈す。石材は淡緑色の蛇紋岩を用いる。表面部を平滑に仕上げ, 裏面の四隅に2孔を一对とする潜り孔をあける。銅線を用い帯に綴じつけたものと思われ, 潜り孔の一箇所に残存が見られる。

IV ま と め

今回の調査で検出した溝S D02が, 東三坊大路西側溝に相当するであろうことは先述したが, 今少しの検討を加えおきたい。今, S D02心の位置を求めると, 平城宮朱雀門心から国土方眼位を介して, 東へ1595.810mの距離にあたるのがわかる。しかし, 平城京の造営方位は朱雀大路で国土方眼位に対して平均N15'41"W振れていることが知られている。この振れをとり, 修正を加えると両者心間の距離は1586.471mとなる。ここで東三坊大路の幅員を, 8丈と仮定すると造営単位尺は0.296m, 5丈と仮定すると0.2952mとなる。この数値は, いずれも従来の調査で判明している単位尺0.294~0.296mの範囲におさまる。現状では東西両側溝を検出した調査例はなく, 東三坊大路幅員の確定は今後の調査例の蓄積と検討を待ちたい。

ところで, 井戸, 土埴から平安時代以降の土器がまとまって出土したが, 出土状態から一括投棄されたと考え得るものであり, 従来の平安時代土器編年の間隙を埋める資料となるものである。

S E15, S K22出土土器は黒色土器から瓦器へ移行する時期にあたり, 瓦器初現期の様相をうかがわせ得る資料の一つとなろう。(立石 堅志・奈良 美穂)

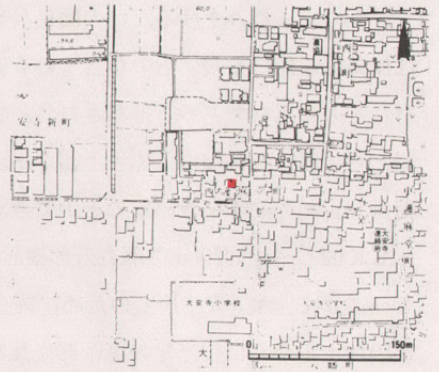
地 点	X	Y	備 考
S D02心	— 148,038.000	— 16,990.500	今回の調査
平城宮朱雀門心	— 145,994.490	— 18,586.310	『平城宮発掘調査報告IX』

注) 幅員は奈良国立文化財研究所『平城京跡発掘調査報告VI』に準じて想定した。

21. 平城京左京六条三坊十五坪の調査

I はじめに

本調査は、奈良市大安寺西護麻堂町92番地の7において実施した、住宅改築工事（今井良守氏宅）に伴う事前調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京六条三坊十五坪の東南隅にあたり、東三坊大路をはさんで史跡大安寺旧境内に西接している。調査は、昭和59年2月23日に東西8m、南北9mの発掘区を設定して開始し、同年3月1日に全日程を終えた。

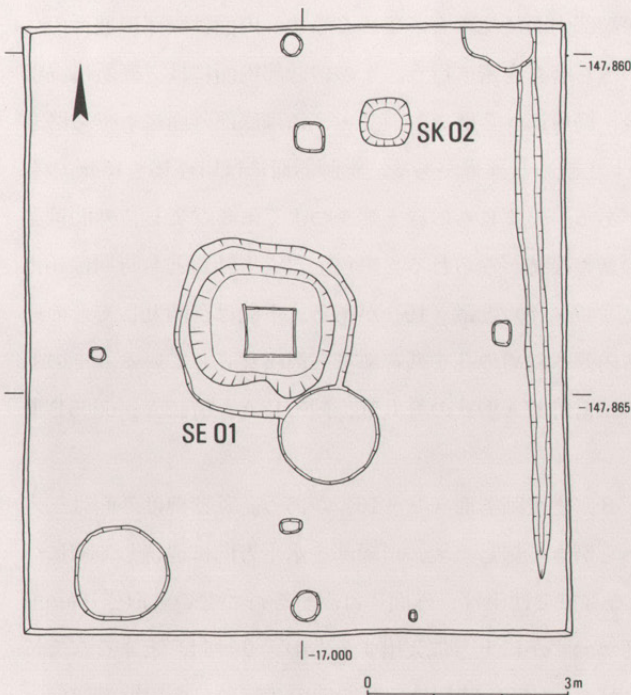


発掘区の位置 1/7500

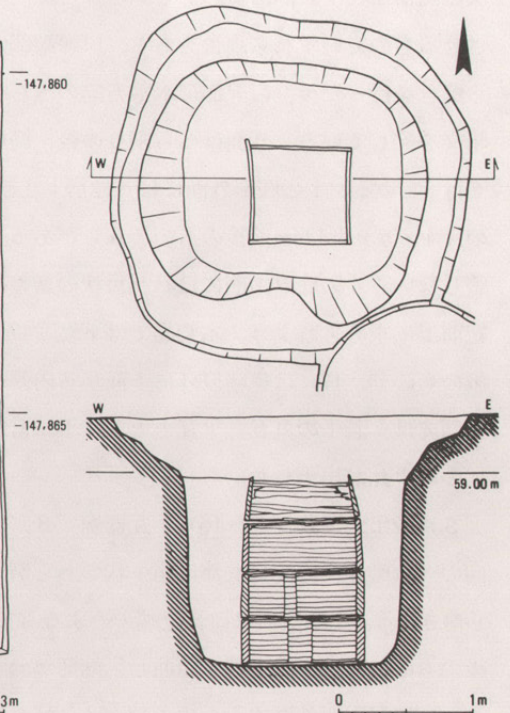
II 検出遺構

発掘区内の堆積土層は単純で、旧住宅建築時の造成客土（約35cm）を除去すると、ただちに黄褐色粘土の地山に達する。主な検出遺構は、この地山上面で確認した井戸と土塼各1である。

SE01 一辺約2.5mの隅丸方形掘形をもち、検出面からの深さは1.8mである。掘形のほぼ中央に、内法一辺75cmの井籠組の井戸枠が据えられている。下から四段分を確認したが、最上段



検出遺構平面図



SE01立面・平面図

は腐蝕が著しく上部が残存しない。枳材は、長さ84~88cm、幅32~33cm、厚さ5cm内外で、対角の二隅を切り欠いて組合わせの仕口としている。枳材の上下の重ねについてはとりたてた組工もなく、そのまま積み上げるだけの簡易な構造である。なお、枳材には無関係な仕口を残すものが含まれることから、これらは建築部材などの転用材であると推察される。枳内の埋土からは瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器が出土しており、井戸廃絶の時期は10世紀の前半に求めることができる。

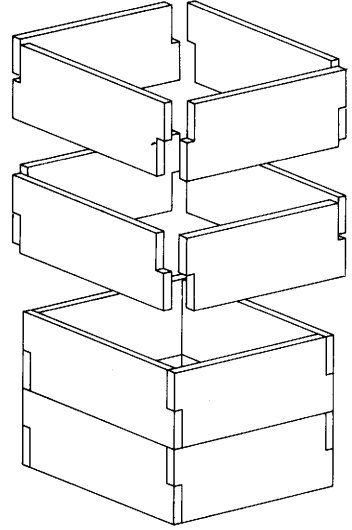
S K 02 一辺約70cmの隅丸方形掘形をもち、検出面からの深さ45cmを測る土壇。ゴミ捨てのために掘られたものらしく、黒灰色土の埋土中からは相当量の土師器、瓦器が出土した。これらの遺物からみて、掘削時期は12世紀の初頭であろう。（中井 公）

Ⅲ 出土遺物

本調査で出土した遺物には、井戸S E 01から出土した瓦、土器、木製品と、土壇S K 02から出土した土器があり、とくに土器はそれぞれ時期的にまとまりをもつ良好な資料である。

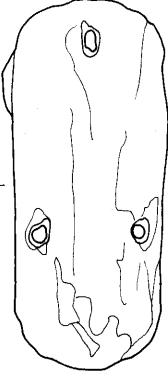
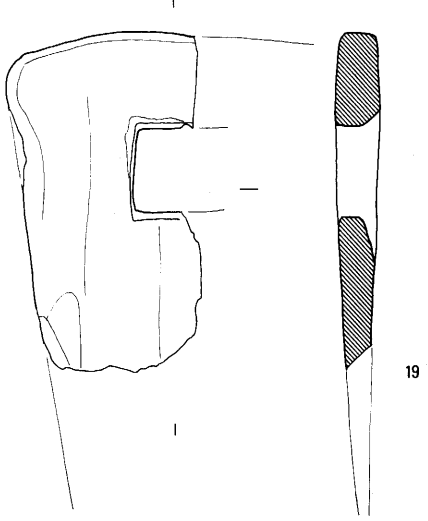
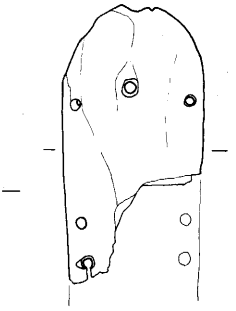
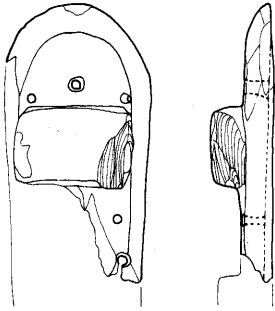
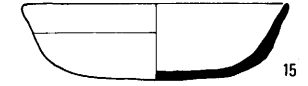
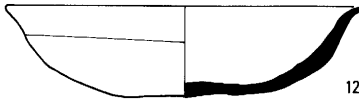
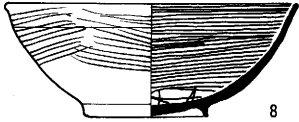
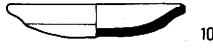
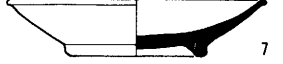
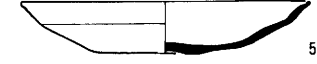
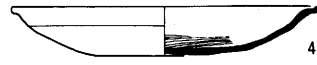
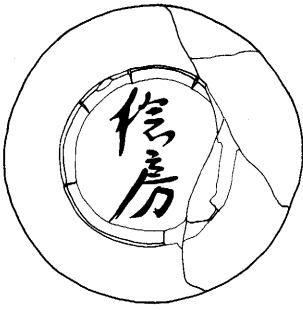
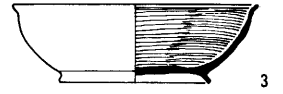
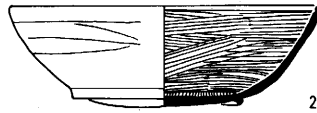
S E 01出土遺物（1~7・17~18） 土器には黒色土器碗（1~3）と、土師器皿（4~6）、灰釉陶器皿（7）がある。7を除き井戸枳内埋土から出土した。黒色土器碗は内面に炭素を吸着させるものでいずれも高台をもち、口縁端部内面に沈線を一条めぐらす。内面は底部に並行のへら磨きを行った後、口縁部に水平方向のへら磨きを密に行う。1の口縁部内面には三箇所渦状暗文を配している。外面はへら削りの後、簡単にへら磨きし、2・3には底部外面にもへら磨きを行っている。1の底部外面には「稔房」と読める墨書がある。土師器皿には口径15~16cmのもの（4・5）と14cm前後のもの（6）がある。いずれも口縁上端をつよくよこなでし、外面は調整しない。4の底部内面にはハケ目状の調整痕跡がみられる。黒色土器、土師器とも時期は10世紀前半に求められよう。木製品では下駄（17・18）と鍬（19）がある。下駄は、隅丸長方形の連歯のもので、17には鼻緒以外に上面から内側へ斜めの孔を残存部で三箇所穿孔している。その他瓦類では、若干の丸瓦、平瓦とともに平城宮6137A型式の軒丸瓦、同6717A、6712A、6665B型式の軒平瓦が出土した。

S K 02出土遺物（8~16） 瓦器碗（8）と土師器皿（9~16）がある。瓦器碗は外面は三方向のへら磨き、内面は底部に格子状のへら磨きを施した後、口縁部を水平方向に連続して密にへら磨きする。土師器皿は口縁上端のみよこなで仕上げ、外面には調整を行わない。口径10cm前後のものには、口縁上端が屈曲し、端部がわずかに上方に突出するもの（9~11）とよこなでによって口縁部が外反するもの（13、14）がみられる。時期は、瓦器碗の諸特徴から12世紀初頭と考えられる。



S E 01井戸枳組手模式図

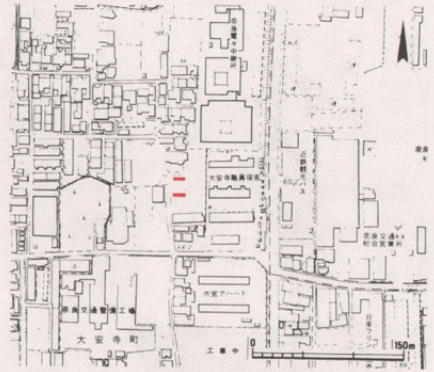
（森下 恵介）



SE01, SK02出土遺物 1/4

22. 平城京東四坊大路の調査

本調査は、永保安雄氏届出の駐車場建設工事の事前調査として行った。調査対象地は、奈良市大安寺町五反田930番地の1の水田で大安寺の東北、左京六条四坊十五坪の東側に位置する。周辺には幅約25mの水田が南北に連なっており、これが東四坊大路の遺存地割であることがうかがえる。調査地では、この遺存地割上に市道が存在するため、市道の東側に接して、東側溝の確認をめざし、幅3mの東西方向のトレンチを長さ12mにわたり、南に2ヶ所設定した(72㎡)。調査の期間は昭和59年1月21日から1月27日までである。

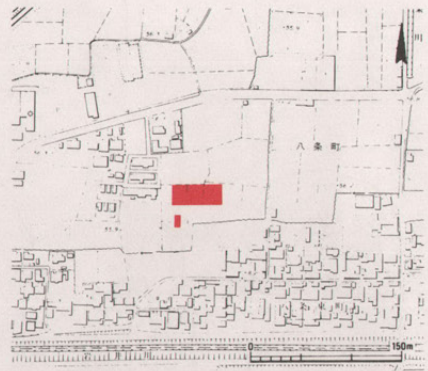


発掘区の位置 1/7500

調査の結果は、耕土をとり除くとすぐに地山である黄白色砂礫層があらわれ、その上面で数ヶ所の小土壌を検出したが、目的とした大路側溝の遺溝は検出できなかった。調査地に接する市道の下およびその西側の水田が東四坊大路に相当するものと思われる。(森下 恵介)

23. 平城京左京七条二坊十一・十二坪の調査

本調査は、奈良市八条町814番地の4他において実施した奈良市同和対策事業の一環である八条運動場(仮称)の造成工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京七条二坊十一・十二坪に相当する。十一坪内の様相を知ることが目的として、東西50m、南北20m(面積1000㎡)の発掘区と、さらに十一・十二坪の坪境小路確認のために東西6m、南北10m(面積60㎡)のトレンチを設定した。調査は、昭和58年6月27日から7月12日まで実施した。



発掘区の位置 1/7500

発掘区内の堆積土層は順に、黒色粘質土の耕土(約20cm)、淡灰色粘土(約15~20cm)、黄褐色土(約30~40cm)と堆積し、地表から約80cmで青灰色粘土となる。この層をさらに1.5m程度掘り下げたが、青灰色粘土がつづき、出土遺物もなく、奈良時代の遺構は検出できなかった。この層は、調査地一帯の小字名が「蓮池」と呼称されるとおり、低湿地に堆積したものであろう。遺構は、青灰色粘土の上面で検出した耕作用と思われる素掘り溝3条のみである。(奈良 美穂)

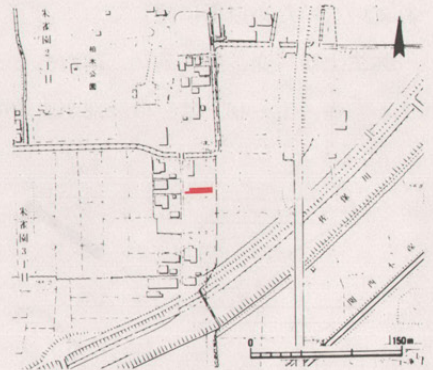
24. 左京七条一坊十一坪（東一坊坊間路）の調査

I はじめに

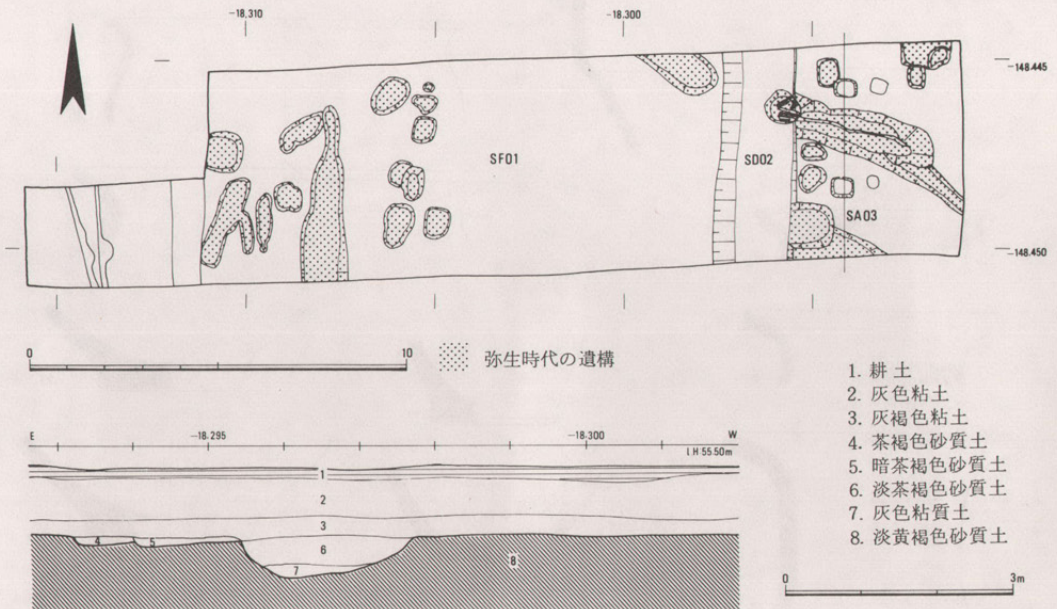
本調査は、奈良市柏木町355番地の1において行った坂本文氏届出の住宅建設に伴う事前調査である。調査地は東一坊坊間路の遺存地割上に位置する。発掘区は南北6m、東西25m（面積135㎡）であり、調査は昭和58年5月13日から6月2日まで行った。

II 検出遺構

発掘区の層序は耕土の下、灰色粘土、灰褐色粘土、淡黄褐色砂質土となっており、淡黄褐色砂質土の上面で、東一坊坊間路SF01とその東側溝SD02、柱列SA03などの奈良時代遺構とともに弥生時代の土壙と溝を検出した。東側溝SD02は幅2.0m、深さ0.6mの素掘り溝で、埋土より若干の瓦類、土器類が出土した。SA03はSD02の溝心から東約2.2mの位置にある南北方向の柱列で1間（2.7m）分検出した。十一坪の東端を画するものと思われる。東側溝SD02の西側は淡黄褐色砂質土の地山であり、この部分が東一坊坊間路の路面となる。この上面で弥生時代の土壙を検出したが、遺存状態が悪く、性格は明らかではない。（平面図で網目をかけて弥生時代の遺構を図示した。）



発掘区的位置 1/7500

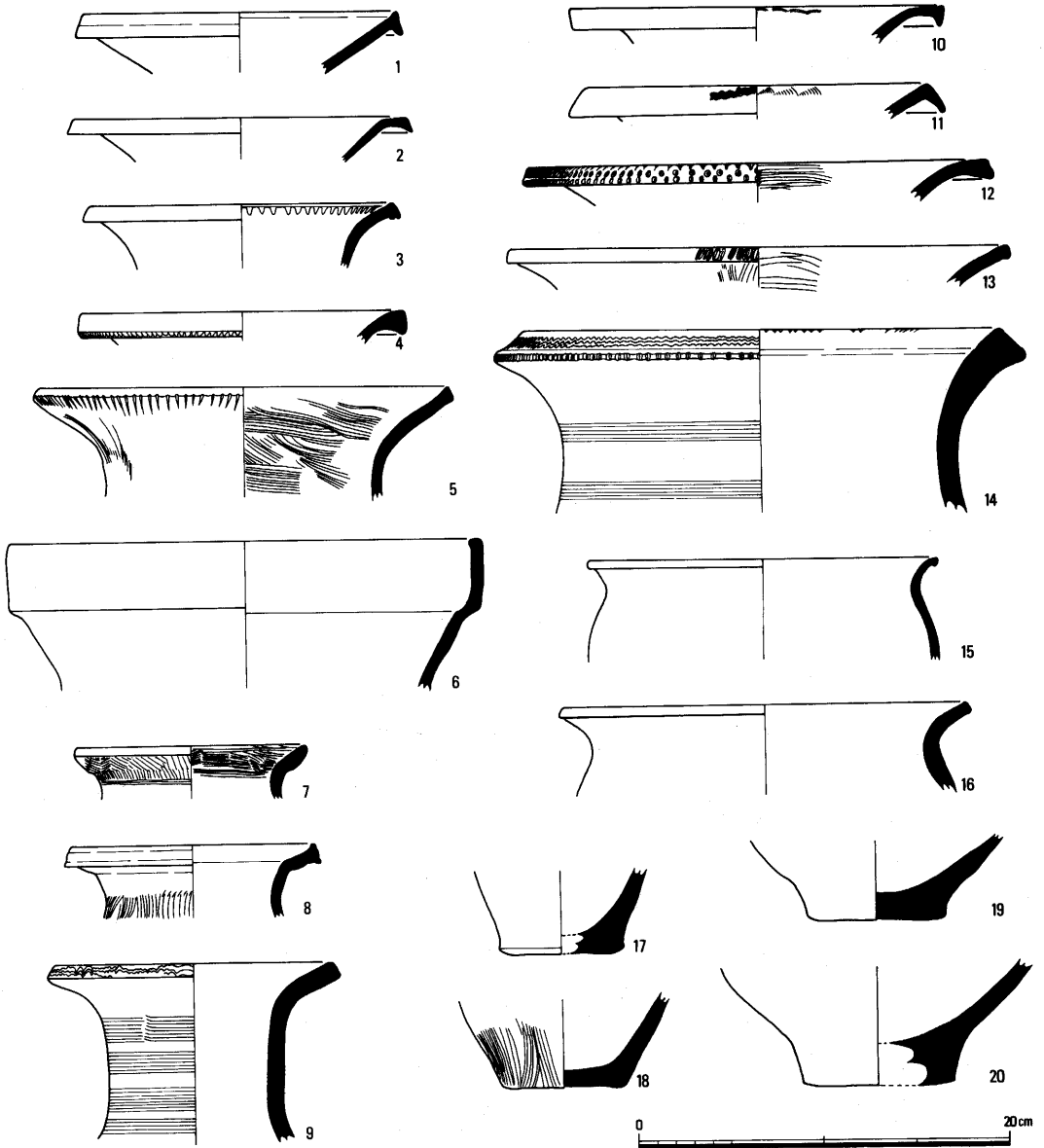


検出遺構平面図 1/200・南壁堆積土層図 1/100

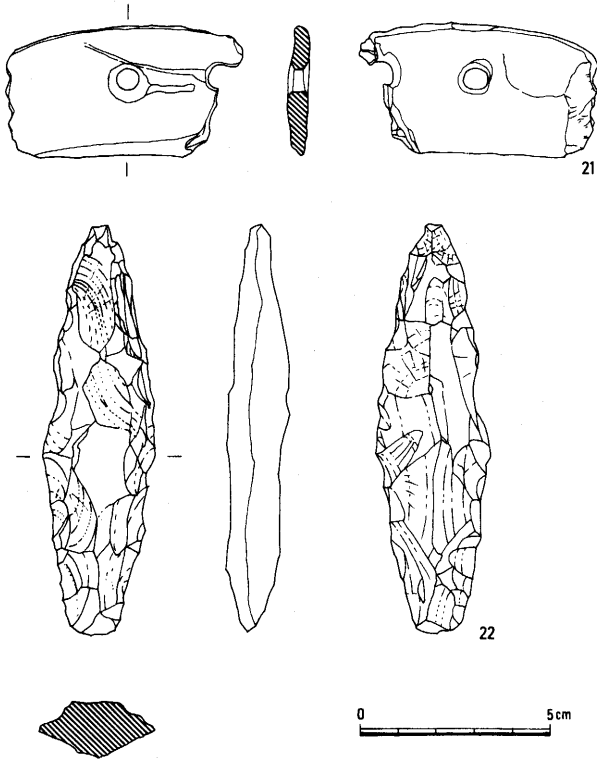
Ⅲ 出土遺物

東一坊坊間路S D02から出土した奈良時代の瓦類，土器類と包含層および土壌などから出土した弥生土器，石器がある。いずれも少量で細片が多いが，弥生時代の遺物の出土は周辺では知られていないため以下に記しておく。

弥生土器 壺，甕，高杯，鉢がある。時期は弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）のものが大部分である。壺（1～14）は，口縁部が直線的，あるいは外反し大きくひらくもの（1～3・5・10～



出土弥生土器 1/4



出土石器 1/2

畿内第Ⅱ様式に属するものと考えられる。甕(15・16)は口縁部がゆるやかに外反するものである。19の土器底部には木葉痕がみられる。

石器 打製石槍1点と石包丁1点の他、サヌカイト剥片が数点出土した。石槍はサヌカイト製、石包丁は緑泥片岩製で、いずれも表面の風化が著しい。(森下 恵介・服部 芳人)

IV まとめ

今回の調査では、東一坊坊間路の東側溝を検出することができたが、この東側溝心から発掘区の西端まで約18mの範囲では西側溝は検出できなかった。このことから東一坊坊間路の幅員が少くともそれ以上であることがわかる。今、仮りに平城宮南面東門(壬生門)の中軸線を東一坊坊間路心に決め、朱雀大路で確認された南北条坊の振れ(N0°15'41"W)を用い、本調査地での坊間路心を求めると、路心とS D 02の溝心との距離は約10.9mとなり、東一坊坊間路の両側溝心々間の幅員は、21.8mとなる。また、本年度に実施した左京三条一坊七坪の調査では、東一坊坊間路の西側溝を検出しているため、この成果を用いると溝心々間21.6mといった数値が得られる。これらの数値は右京に対称の位置にある西一坊坊間路の復元幅員21.7mにも近く、東一坊坊間路は73尺前後の幅員をもっていたものと推定できる。

また、本調査で、これまで周辺では知られていなかった弥生時代の遺構を検出できたことは、今後の調査に大きな期待をいだかせる。(森下 恵介)

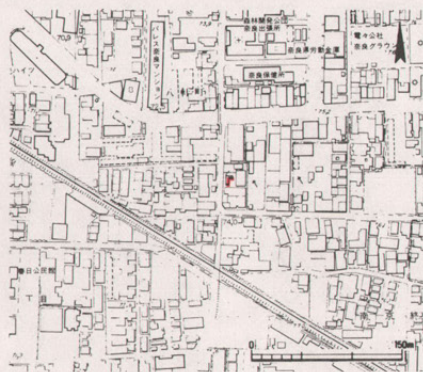
13)が多く、他には、口縁部が短く外反し、その端部を断面三角形状に拡張するもの(4・14)や外反した後、屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの(6)などがみられる。加飾したものが多く、口縁部外面に刻目を施すもの(3・5・12・13)、口縁部端面に円形刺突文を施すもの(12)、口縁部内面に扇形文を施すもの(10・11)などがある。14は口径26cmの大型品で口縁部上下端に刻目を施し、端面には三条の櫛描波状文を加える。頸部には六条の櫛描直線文を二帯配している。8は口縁端部に二条の凹線文を施しており、新しい様相をもつものである。9は頸部が長く、不安定な櫛描波状文が口縁端面にみられるなど古い特徴をもち、

25. 平城京左京五条六坊五坪の調査

本調査は、奈良市西木辻町134番地の4において実施した、山中工務店事務所新築工事に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊では左京（外京）五条六坊五坪に相当する。この地は外京の南辺を画する五条大路にはほど近く、佐伯院の存在が推定されている地域でもある。付近は市街化が進み、民家などが密集しており十分な発掘区を確保することができなかった。調査は昭和59年3月2・3日の両日実施した。発掘面積は17㎡である。

発掘区内の層位は以下のようなものであった。地表面から約30cmは造成した折の盛土、以下耕土、床土と続き地表面下約70cmで地山である黄茶色粘質土層に達する。東に行くにしたがい、地山は拳大の礫がまじるようになる。この礫まじりの黄茶色粘質土は春日野台地に通有の地山である。床土である茶灰色粘質土中から瓦の小片が出土したのみであり、何ら遺構は検出することができなかった。

(西崎 卓哉)



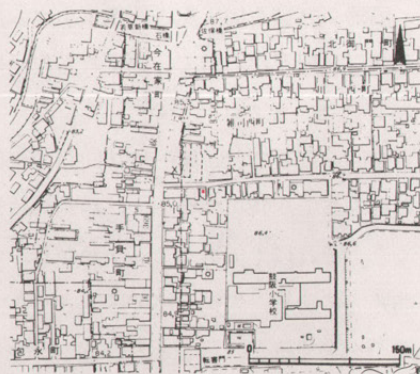
発掘区の位置 1/7500

26. 史跡 東大寺旧境内の調査

本調査は、奈良市雑司町字上ノダン74番地の4において実施した三好嘉明氏届出の住宅改築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、東大寺旧境内の北面大垣に推定されるところに位置している。調査は、調査地の面積が限られているため、北面大垣の確認を目的とした、東西2m、南北3m（発掘面積6㎡）の南北トレンチを設定して行なったものである。調査の期間は、昭和58年10月21日から10月24日までである。

今回の調査では、東大寺北面大垣を検出することができなかった。発掘区の土層堆積状態は、現地表面から順に茶灰色土、淡灰色土の整地土、暗黄灰色土、暗黄色土、灰色土と約1mにわたって堆積する。これらの層からは、近世の瓦片、土師器片、陶磁器片などが出土した。この下層は、暗青灰色粘質土が堆積し、奈良時代の瓦片や中近世の土師器片や陶磁器片を含むが、調査面積の制約からこれ以上掘り下げることが困難となったため発掘調査を中止した。

(篠原 豊一)

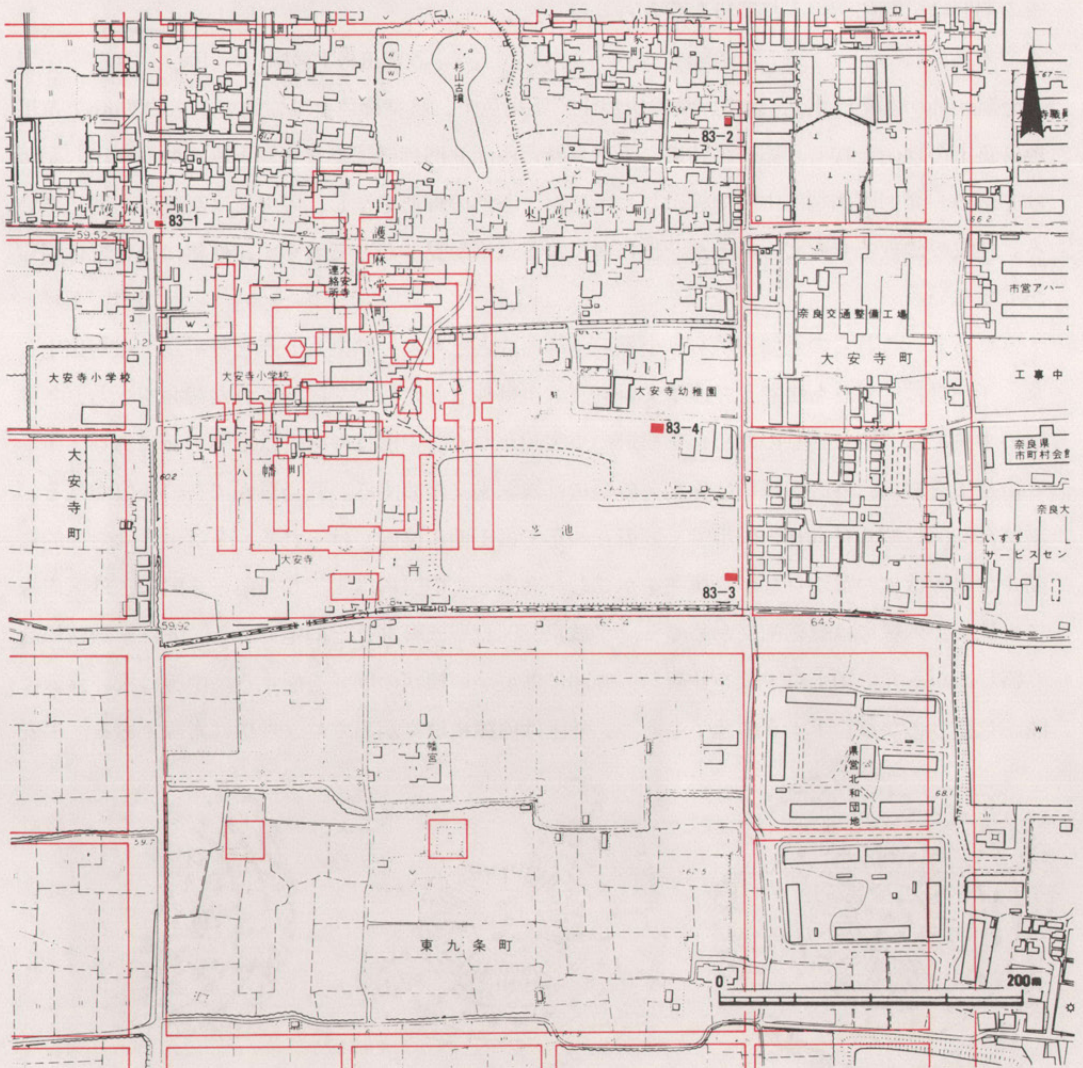


発掘区の位置 1/7500

27. 史跡 大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内においては、昭和58年度に4件の調査を実施した。いずれの発掘調査も個人住宅等の新築あるいは、駐車場建設に伴う事前の発掘調査である。83-1次調査地は、東三坊大路と六条条間路とが交差する位置にあたり、西面北門が推定される。83-2次調査地は、旧境内の北東隅、賤院推定地にあたる。83-3次調査地は、旧境内の西側、苑院推定地にあたる。83-4次調査地は、旧境内の西側、賤院と苑院を区画する東西道路に推定される。以下、各調査の内容を順次記することにする。

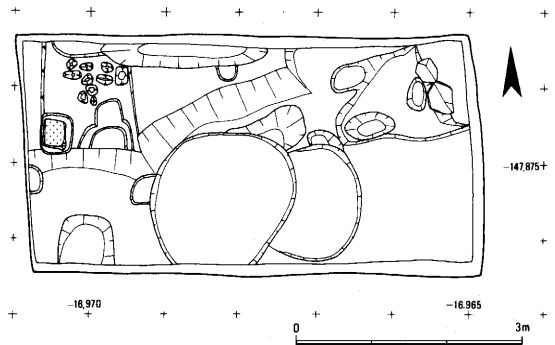
(篠原 豊一)



発掘区 の 位置 1/5000

83— 1 次調査

本調査は、奈良市大安寺町1138番地の2において、今井迎子氏届出の農業倉庫建設に伴なう事前の発掘調査である。調査地は、東三坊大路と六条条間路が交差する地点で、西面北門が想定されるところである。東西5m、南北4m（面積20㎡）の範囲を発掘した。調査の期間は、昭和58年5月27日から6月8日までである。

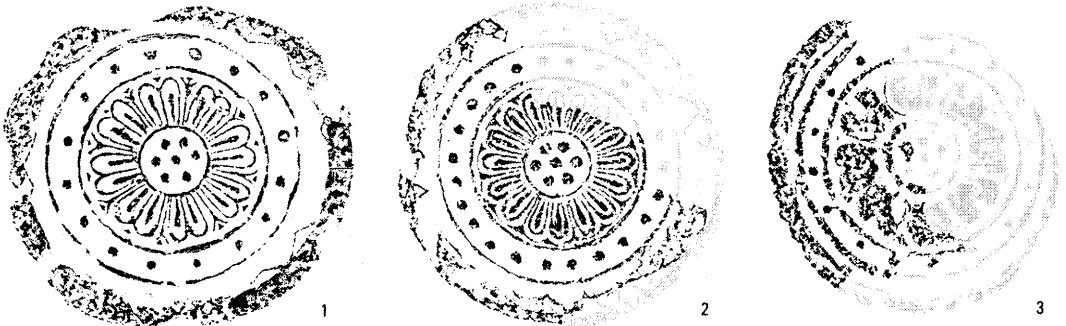


検出遺構平面図 1/100

発掘区内の堆積土層は、表土、淡黒灰色土、茶褐色土、暗黄褐色土で、地表から約20cmで黄褐色砂質土の地山となる。調査の結果、予想された西面北門は確認できず、土壙を数基検出しただけである。発掘区西端部中央で検出した土壙は、方形の掘形を呈し、中央には凝灰岩を据えている。柱穴の礎板とも考えられるが、他に對になる遺構が見つかっておらず、性格については明らかではない。

（奈良 美穂）

ところで、これらの土壙内からは少量の土師器片とともに、軌丸瓦3点と軒平瓦1点が出土した。1～3はいずれも複弁8弁蓮華文軒丸瓦。1は独立した間弁で区分された複弁をもち、各弁端の中央には、彫り残しのためか、楔形の小突起がつく。中房は弁区とほぼ同一面にあり、1+6の蓮子をもつ。外区内縁には珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。瓦当裏面に布の圧痕が残る。平城宮6308C型式軒丸瓦と同範で、同軒瓦編年ではI期に位置づけられる。2は1とは対照的に間弁が界線状につながりながら複弁をかこむ。突出した中房には1+6の蓮子を配し、外区内縁にま珠文、外縁には線鋸歯文がめぐる。平城京6304D型式軒丸瓦と同範である。3は半球状に高く盛りあがる弁の頂上に子葉を並置し、弁間には短かい楔状の間弁を配する。中房は太い界線に囲まれ盛りあがり、1+5の蓮子をもつ。外区は内線に珠文がめぐり、外縁は素縁である。平安



出土軒丸瓦 1/4

時代のもので、平城京内ではほかに左京一条三坊十五・十六坪に類例がある。4は三回反転の均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、C字状の中心葉内に十字形を呈した花頭をもつ。外区には珠文がめぐる。平城宮6682B型式軒平瓦と同範である。 (中井 公)



出土軒平瓦 1/4

83— 2 次調査

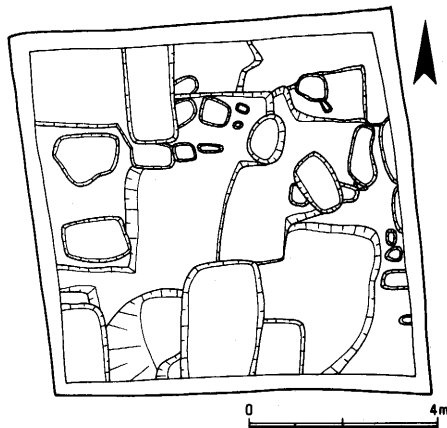
本調査は、奈良市大安寺東今在家町996番地において実施した楠木重一氏届出の個人住宅増築工事に伴う事前発掘調査である。調査地は大安寺旧境内賤院に推定される地域の北方にあたる。発掘区は、民家裏庭における調査のため、南北4.5m、東西4m(面積18㎡)と制約を受けた。調査期間は、昭和58年8月2日から8月5日にかけてである。

発掘区の土層堆積状況は、地表面から現地表土の灰色土が約15cmにわたって堆積しており、以下、黒褐色粘質土(約25cm)、暗黒灰色粘土(20cm~30cm)が堆積し、地山の淡黄色粘土に至っている。地山面は、発掘区南端部で、灰色砂層に変わっている。発掘区の西端において、長辺約1m、短辺約0.7m、深さ0.2~0.3mの長円形の土壇を2箇所検出した。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は全く出土せず、時期は明らかでない。他に顕著な遺構は認められず、発掘区北西部は近現代の攪乱を受けていることがわかった。 (立石 堅志)

83— 4 次調査

本調査は、奈良市大安寺町字ヒラキ1254番地の1において定施した東井敬三氏届出の駐車場建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、苑院と賤院を区画する東西小路が想定されているところである。調査期間は、昭和59年1月9日から1月21日までである。東西8m、南北8m(面積64㎡)の範囲を発掘した。

発掘区内の堆積土層は、耕土、床土の下に、約20cmの厚さで暗茶褐色土の遺物包含層がある。地表から約55cmで淡黄灰色粘土の地山となる。調査の結果、大安寺に関連する遺構は何ら検出できず、粘土掘削を目的とした土壇を数基検出しただけである。土壇は、いずれも壁面が垂直に落ち、埋土からは土師器、須恵器の小片が若干出土しただけである。発掘区の南西隅の土壇からは、奈良時代の軒平瓦(平城宮6712A型式)が出土した。 (奈良 美穂)



検出遺構平面図 1/160

83—3次調査

本調査は、奈良市大安寺町ヒラキ1237番地の4において実施した大西敏子氏届出の住宅新築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、苑院推定地の南東部分に位置する。調査は、東西9m、南北5m（発掘面積45㎡）の東西トレンチを設定して行なった。調査の期間は、昭和58年10月5日から10月19日までである。発掘区の土層堆積状態は、既に調査地は灰色土で盛土されており、この層以下順に、旧耕土、床土、茶灰色土、暗灰色土、暗灰色粘質土、茶褐色砂質土と地表面から約1.3mにわたって堆積し、地山の黄灰色粘質土に達する。地山面で遺構を検出した。

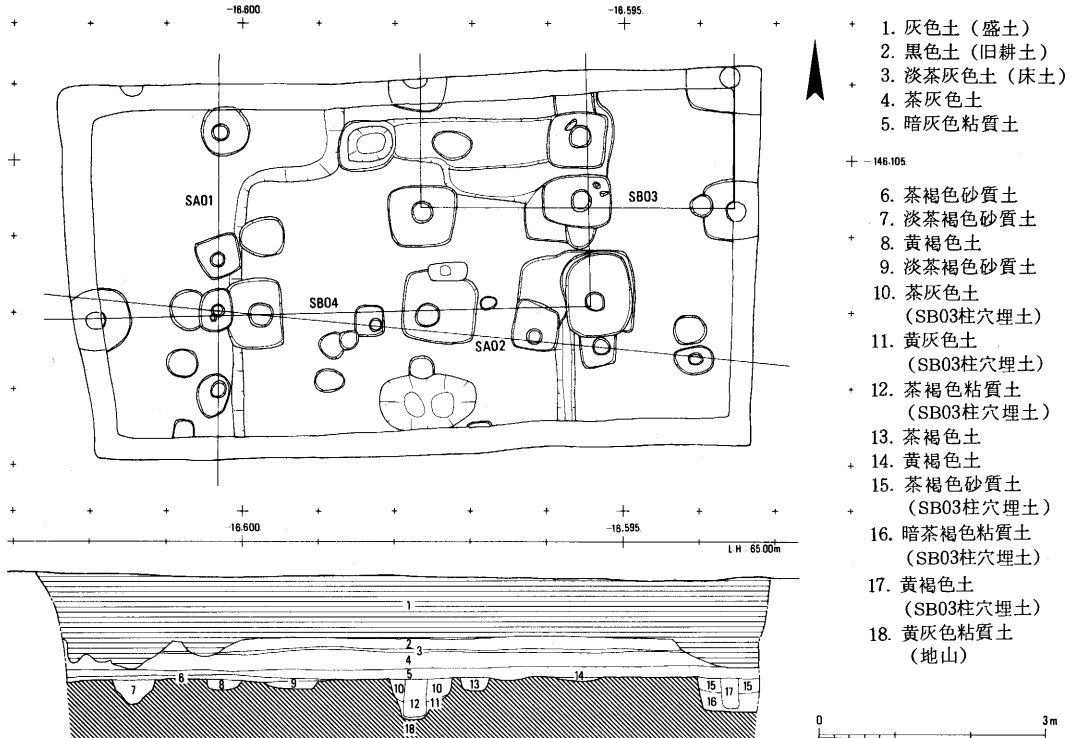
検出した遺構には、柱列2条、掘立柱建物2棟がある。

SA01 発掘区西側で検出した2間（3.4m）以上の南北柱列。柱間は1.7m等間である。

SA02 発掘区南側で検出した4間（8.4m）以上の東西柱列。柱間は2.1m等間である。

SB03 発掘区の北西隅で検出した桁行1間（1.8m）以上、梁行が2間（4.2m）の南北棟。柱間は梁行が2.1m等間である。SA01と主軸が一致することから同時期と考えられる。

SB04 SB03の西側で検出した桁行3間（6.6m）以上、梁行1間（2.1m）以上の東西棟。柱間は桁行が2.2m等間である。重複関係からSA02より古いことがわかる。（篠原豊一）



検出遺構平面図・北壁堆積土層図 1/100

28. 不退寺境内の調査

I はじめに

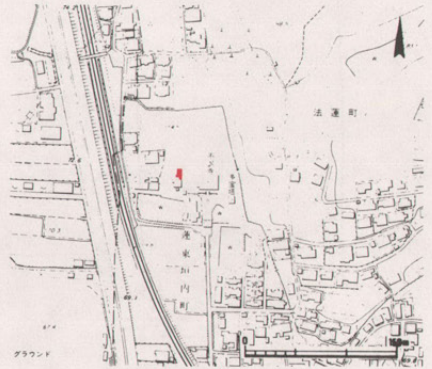
本調査は、不退寺の庫裡改築および参拝者休憩所の建設工事の事前調査である。調査地は、奈良市法蓮東垣内町 517 番地の 1 で、不退寺境内、本堂西側の菜園である。

不退寺については、これまで現在の境内では、発掘調査が行われたことがなく、創建時の伽藍配置などは、まったく明らかではない。ただ境内の西側で昭和44年に行われた左京一条三坊十五・十六坪の調査では、いわゆる不退寺式の軒瓦が集中的に出土しており、9世紀初頭に大規模な整地工事が行われていることが確認され、木簡などの出土から、不退寺の創建期が9世紀初頭であろうと推定されている。^{注1)}

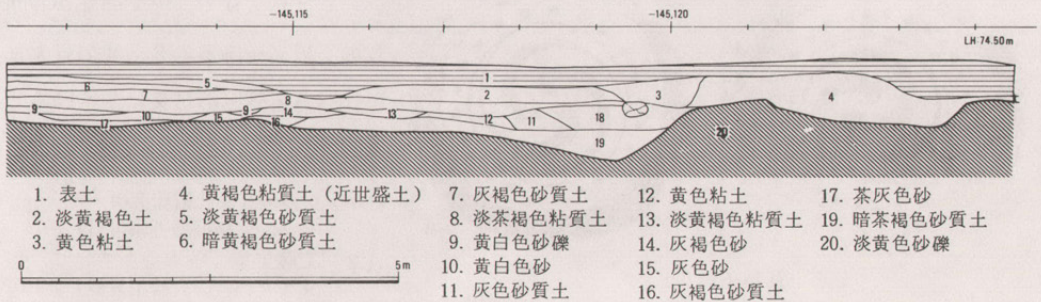
発掘調査は、敷地の制約から、東西4m、南北10mの小規模な発掘区を設定せざるを得ず、昭和58年12月8日から開始し、12月16日に終了した。発掘面積は45㎡である。

II 検出遺構

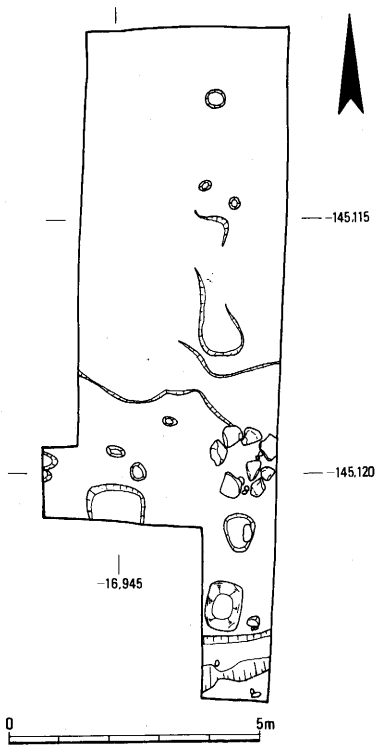
調査地の土層は、地表より約40mまでの表土をとり除くと、粘土層と砂層を厚さ10cm程度づつ積み重ねた整地層となる。その上面からは、この整地層に据えた大小の石からなる根石状の石組（径1.4~1.6m）が1箇所検出できた。建物の根石である可能性を考え、発掘区を拡張可能な西側と南側に広げ、調査をつづけたが、少なくとも石組から4m以内には、三方向とも対をなす石組は存在せず、発掘の不可能な東側でもボーリング調査を行ったが、石組は存在しなかった。このことから根石の可能性は低いように思われ、整地層には、鎌倉時代をさかのぼり得ない巴文軒丸瓦が包まれていることから、石組の年代がさほど古くないことがわかる。整地層は約60cmの厚さがあり、発掘区北寄りでは、堅くしまった砂礫層も存在するが、南寄りでは薄く、その下は、地



発掘区の位置 1/7500



東壁堆積土層図 1/100



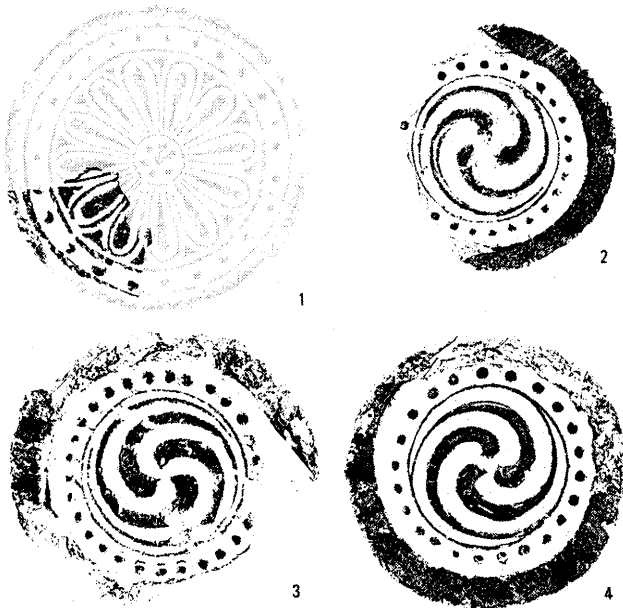
検出遺構平面図 1/150

山の淡黄色砂礫層となっている。整地土内からは、須恵器、土師器、灰釉陶器、瓦器、青磁などの土器類と瓦類が出土したが、量的にはわずかで、細片が多いため、整地の行われた正確な時期は決め難い。また、奈良時代、平安時代の遺構については、まったく手がかりは得られなかった。ただ、現存する不退寺の建物が、鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての建立であり、鎌倉時代後半に、多宝塔、南門が一貫した造営計画の下で建立されたものと推定されていること^{注2)}から、この時期および、本堂が再建されたとみられる室町時代初頭に、この整地の時期の一端を求めることも可能と思われる。

Ⅲ 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、表土および整地土より出土した瓦類、土器類が若干量あるにすぎず、またその大半は表土層より出土したものである。小片が多いが、瓦類には、軒丸瓦3点と鳥衾瓦1点がある。1は単弁12弁蓮華文軒丸瓦（平城宮6135A型式）で、弁間にクサビ

状の間弁を配している。2は巴文頭部が右回りの三巴文、3は巴文頭部が左回りの三巴文の軒丸瓦である。いずれも内外区を圏線で区画し、外区内縁に珠文帯を飾る。2は3よりやや小型で、3の巴文頭部はやや光る。巴文の尾部の長さは、どちらも $\frac{1}{2}$ 回転以上のびるが圏線には接しない。4は鳥衾瓦で、巴文頭部が右回りの三巴文を飾る。3、4の軒丸瓦に比べると外区の珠文はやや疎らである。（森下 恵介）



出土瓦類拓影 1/4

注1) 奈良国立文化財研究所
『平城宮発掘調査報告VI』1974

注2) 工藤圭章「不退寺」
(『大和古寺大観第五巻』) 1978

29. 多聞城跡の調査

本調査は、奈良市法蓮町1416番地の1において実施した奈良市立若草中学校校舎改築に伴う事前の発掘調査である。多聞城跡は、現在の若草中学校のある丘陵に位置している。1948年の若草中学校造成に伴う発掘調査では城郭が造られる以前に、丘陵部分が墓地として使用されていたことがわかった。しかし、この造成工事のために城跡の大部分は削平されてしまった。昭和53年に奈良市教育委員会が行なった城郭北側の発掘調査では丘陵の末端で井戸及び排水溝と考えられる施設を検出した。



発掘区的位置 1/7500

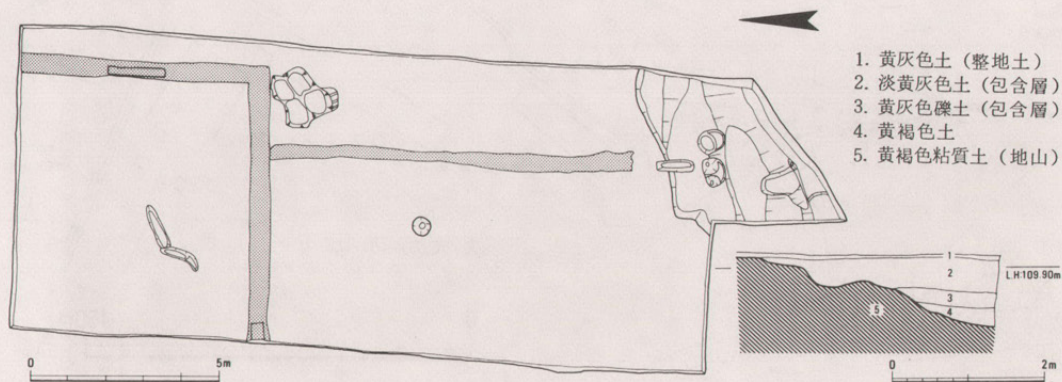
今回の調査地は、中学校の敷地の西側部分にあたり、南西には聖武天皇陵が位置している。城跡の西端部分は調査地よりも約1.5mほど高い平坦面となる。その周縁部分には今も土塁の痕跡が残っており、このことから見て調査地はすでに削平をうけているものと考えられたため、調査地の南側に東西8m、南北19m（発掘面積160㎡）の発掘区を設定して調査を行なった。

調査の結果、発掘区はすでに地山（明黄褐色礫質土）まで削平されており、旧校舎の基礎と発掘区南端で丘陵の旧南斜面を検出したのみである。旧斜面は、中学校造成時に丘陵を削平した時の土砂によって埋められている。埋土からは、城以前の墓地の遺物と考えられる五輪塔の空風輪墨書銘のある土師器羽釜片、火葬骨や、城の建物に使用されたと考えられる軒平瓦、鉄釘などが出土した。

（篠原 豊一）

注1) 「多聞城跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第10輯』奈良県教育委員会 1958

注2) 「多聞城廃城跡発掘調査概要報告」 奈良市教育委員会 1979



検出遺構平面図 1/200・東壁堆積土層図 1/100

30. 赤田横穴群の調査

I はじめに

昭和58年5月25日、奈良市西大寺赤田町一丁目7番地の1の医療法人平和会吉田病院から、敷地内での工事中に古墳らしいものを発見したとの連絡があった。現地に急行したところ、重機で削平された丘陵の南斜面に横穴が開口し、その内部に陶棺片が散乱しているのが確認できた。そのため奈良県教育委員会文化財保存課と連絡をとり現地視察を依頼した後、病院側に削平工事の一時中止と発掘調査の実施を申し入れた。

病院側との協議の後、調査は翌26日に開始し同年6月15日に終了した。調査地は奈良市西大寺赤田町一丁目556番地の1である。調査期間中に、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター西村康氏に定常波による遺跡探査をお願いしたほか、6月4日には現地説明会を開催した。

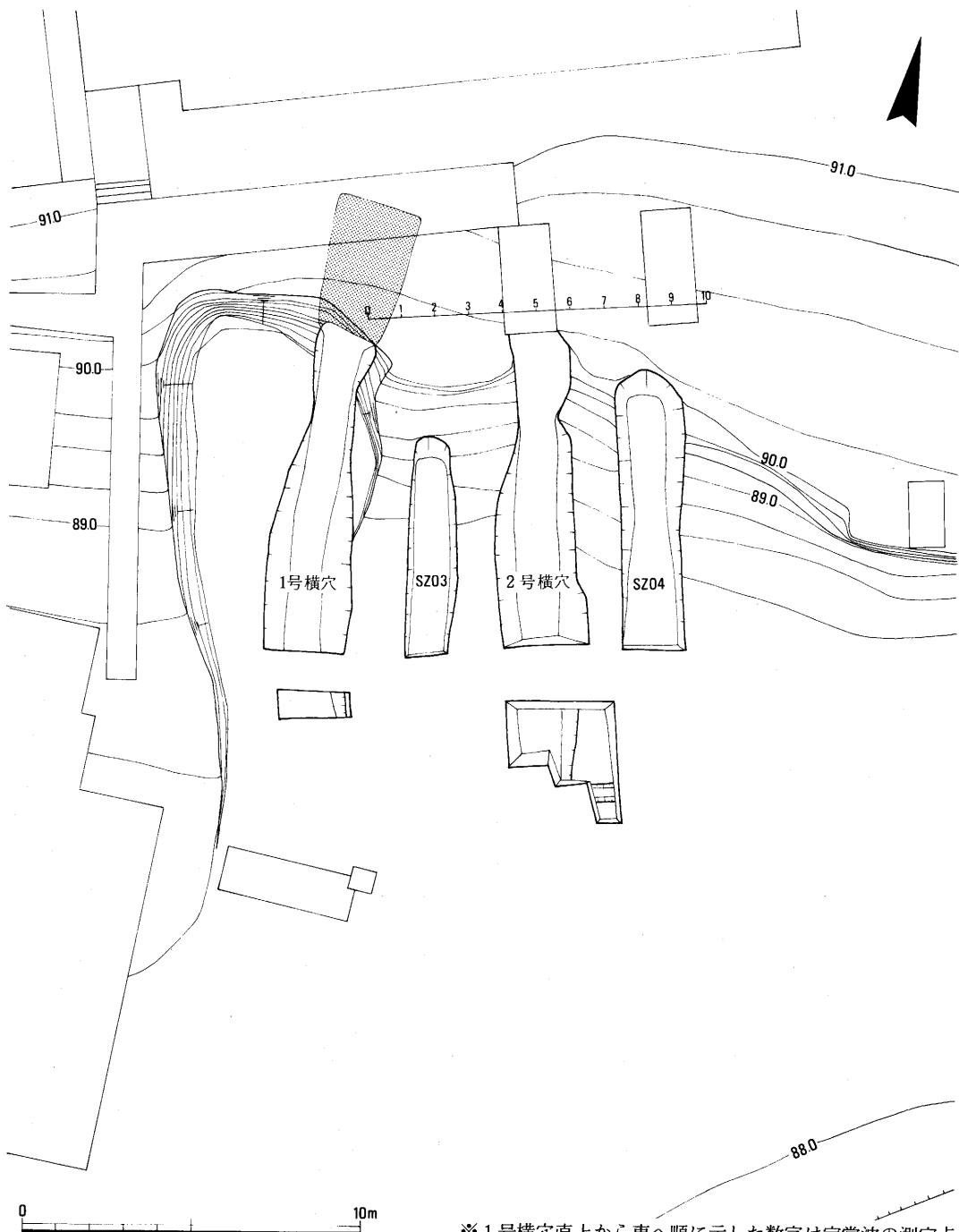
以上の経過から、今回発見された横穴をその字名をとり赤田横穴群と呼び報告する。なお、発掘調査の実施にあたっては吉田病院の御理解と多大の御協力があった。記して感謝する。



第1図 発掘区の位置 1/3000

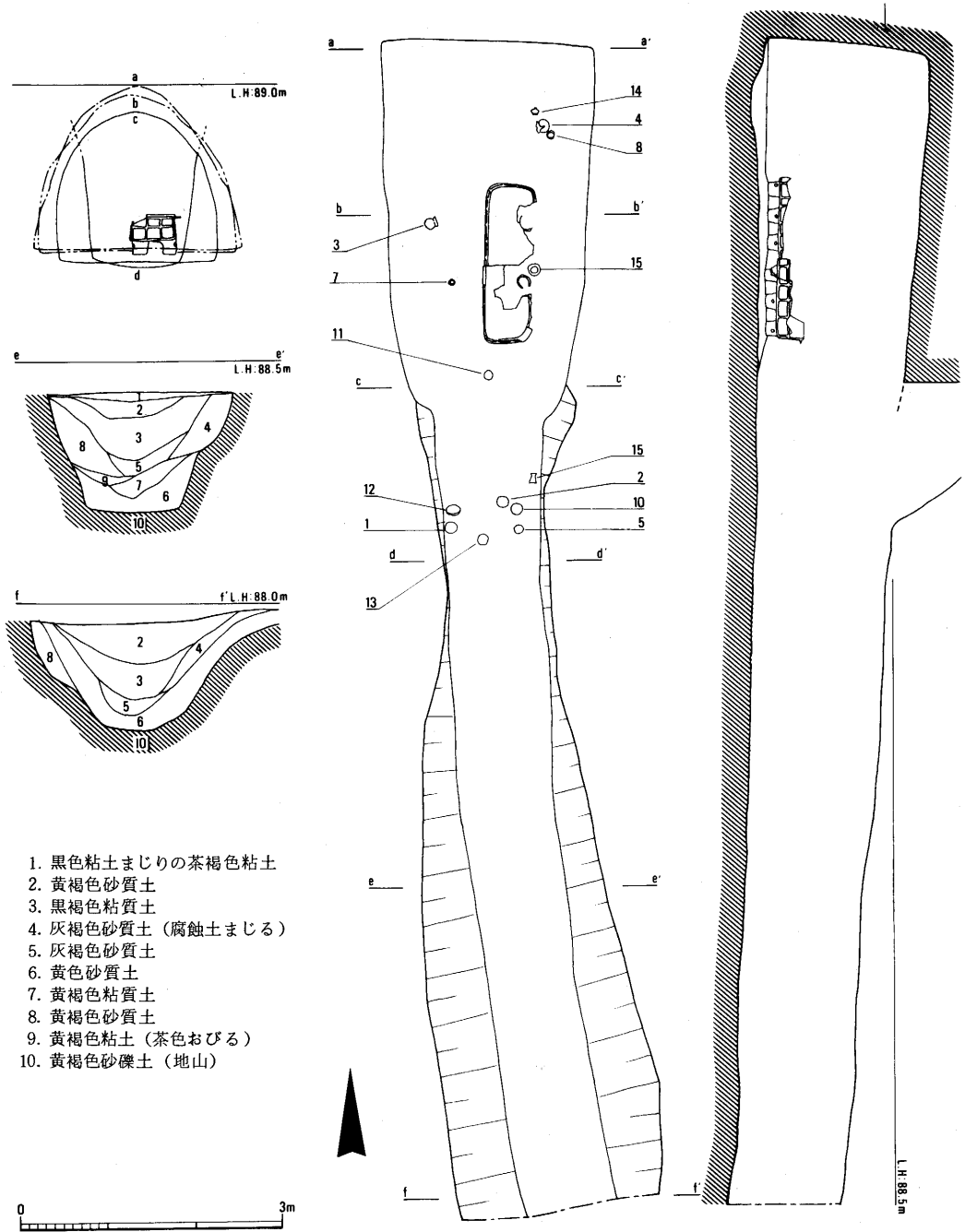
II 横穴群の位置と周辺の環境

横穴は、奈良市の西部を南北に走る西の京丘陵東縁の一支脈南斜面に開口している。標高はおおむね88.5mの地点である。調査地の西には6基の小円墳からなる赤田古墳群、陶棺2個が出土



第2図 地形図 1/200

注1)
 した新堂寺陶棺出土地などが存在したことが知られており、病院北側の宅地造成工事の際にも陶棺が出土している。
 注2)
 発掘調査中にも附近の踏査を実施したが、調査地周辺は徐々に宅地化が進み往時の地形、景観は失われつつあり、新たな横穴などは確認できなかった。



1. 黒色粘土まじりの茶褐色粘土
2. 黄褐色砂質土
3. 黒褐色粘質土
4. 灰褐色砂質土 (腐蝕土まじる)
5. 灰褐色砂質土
6. 黄色砂質土
7. 黄褐色粘質土
8. 黄褐色砂質土
9. 黄褐色粘土 (茶色おびる)
10. 黄褐色砂礫土 (地山)

第3図 1号横穴平面・立面図 1/80

Ⅲ 検出遺構（第2・3図）

以下、今回の調査で検出した横穴2基、溝状遺構について記す。なお、横穴各部分の呼称については、遺骸の埋葬部を玄室、玄室の閉塞部であると考えられる玄門、玄門に至る狭長な溝状の部分を墓道として報告する。

1号横穴（第3図） 黄褐色の砂礫層を穿ち、南に向かって開口する。玄室の平面形はやや丸みをもち奥壁に向かって広がる長台形で、奥壁部での幅2.44m、玄門部幅1.26m、長さ4.32mである。玄室断面は尖頭アーチ形で、高さは1.9mである。玄室の天井、側壁の一部が剥落している。玄門部は工事中に一部削平されており、特に埋葬時の閉塞施設は検出できなかった。玄門に至る墓道は断面逆台形を呈し、底部幅0.9m前後、上面幅1.2～2.5m、長さ11.5m以上である。墓道内の土層堆積状態からみても上部を覆った痕跡はなく、切り通しとしていたようである。墓道底部は南北方向にほぼ水平に掘削されているが、上面が丘陵斜面に従って傾斜しているため、墓道は南に行くにつれて浅くなる。

玄室中央やや左側壁よりに、ほぼ主軸にそって陶棺が安置されていた。玄室内を横穴掘削時の土砂で厚さ約0.25mにわたり整地し、その上面に陶棺を据えている。陶棺蓋部は盗掘のために完全に破壊されている。棺内には人骨、副葬品などは遺存していなかった。他に、玄室内からこの陶棺とは全く別個体の土師質亀甲型陶棺片、数片が出土した。さきの陶棺が玄室内やや左側壁よりに安置されていることもあわせて、本来複数の陶棺が安置されていた可能性もある。

2号横穴 1号横穴の東、約6mを隔てて存在する。玄室直上に旧病棟の基礎とコンクリート便槽が建設されていたため、玄室は破壊され旧状をとどめない。検出できた部分の規模は幅2.0m、長さ2.2m分である。平面形、断面形は不明。玄門部の幅は1.24mである。玄門に至る墓道は断面逆台形を呈し、底部幅0.8～1.3m、上面幅1.26～2.48m、長さは12.4m以上である。上部を覆った痕跡はない。1号横穴と同様、墓道上面が丘陵斜面にそって傾斜しているため、南へ行くに従い浅くなる。

玄室からの出土遺物はない。墓道埋土から若干の土師質亀甲型陶棺片、土師器片、土馬が出土した。このことから陶棺が安置されていた可能性も考えられる。

S Z 03 1号横穴と2号横穴との間で検出した溝状の遺構。横穴と並び丘陵斜面に掘り込まれている。長さ6.5m分を検出した。横断面は逆台形で、底部幅0.9～1.1m、上面幅1.4～1.5mである。底部はほぼ水平であるが、丘陵斜面に掘削されているため、南へ行くにしたがい浅くなる。検出面からの深さは北端で1.24m、南端で0.2mである。上部を覆っていた痕跡はない。遺物は出土しなかった。

S Z 04 2号横穴の東、丘陵斜面に掘り込まれた溝状の遺構。長さ8.2m分を検出した。横断
注1) 奈良県教育委員会編「生駒郡西大寺村新堂寺合葬陶棺」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第2輯（1941）
注2) 中本宏明氏よりご教示を得た。

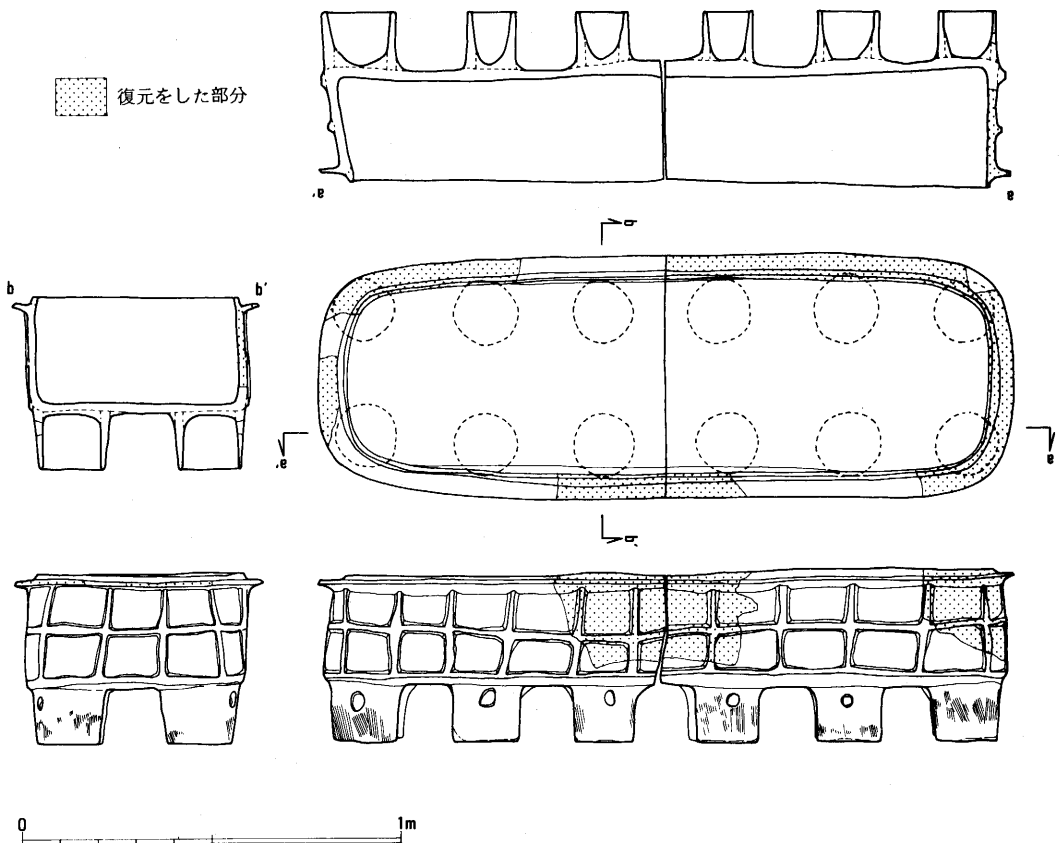
面はやや不整形な逆台形で、底部幅0.88~1.5m、上面幅1.73~2.0mである。S Z 03よりひとまわり大きい。S Z 03と同様、南へ行くにしたがって浅くなる。検出面からの深さは北端で1.74m、南端で0.4mである。上部を覆った痕跡はなく、遺物も出土しなかった。

S Z 03・04ともに出土遺物がなく、その時期は決し難く、性格も詳かではない。

IV 陶 棺 (第4図)

1号横穴に安置されていた陶棺について記す。

土師質亀甲形陶棺である。棺身、蓋ともに中央で左右に二分割されている。棺身は平面隅丸長方形で残存部の幅64.0cm、長さ181.5cmである。最大幅65.0cm、最大長184.0cmに復元した。内法は幅49.0cm、長さ169.3cmである。周囲の器壁はわずかに内傾して立ち上る。最大高46.0cm。棺底部、器壁の厚さは2.5cm前後で、内外面ともになで調整を行う。器壁の周囲には、縦方向にあわせて26本、横方向に2本の凸帯をめぐらす。凸帯の幅は0.8~2.3cm、高さは1.0~1.8cmと不揃いである。さきに横方向の凸帯を貼りつけ、後に縦方向の凸帯を貼りつけている。器壁の上端をほぼ直角に外方へ折返し、その上面内端に高さ約2cmの凸帯状の粘土を貼りつけ周縁をつくり受け部とする。棺底部に2行12脚の円筒状の脚をもつ。脚は平面円形で脚端部径13.5~20.0



第4図 1号横穴出土陶棺 1/20

cm, 脚高はほぼ15cmである。それぞれの脚の外側面に1箇所円孔を穿つ。脚外面を縦方向のはけ目で調整した後、棺底部に取りつけるが、その際に粘土を足しなでつけて補強するため、脚上半のはけ目はなで消されている。棺底部外面と脚下半を除く他の面に赤色顔料を塗付する。

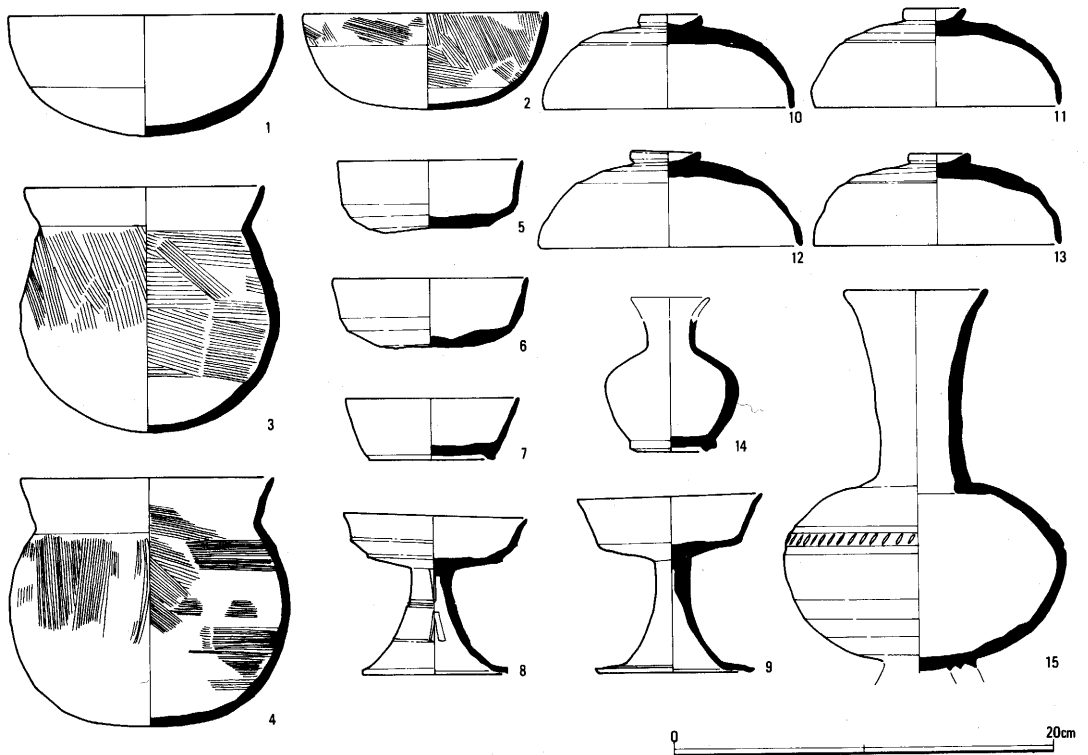
棺蓋は完全に破壊されていたが、ドーム状のものとなろう。最大高35.0cmに復元した。棺身とあわせた総高は80.5cmとなる。長側辺に4箇所ずつ計8箇所、短側辺に1箇所ずつ計2箇所に方形孔を穿つ。下端部端面に木の葉の痕跡がある。外面に赤色顔料を塗付する。

棺身、棺蓋いずれも一体で成形、調整した後に、強い糸あるいは針金様のもので中央から二分割されている。

V 出土遺物（第5図）

1号横穴から土師器、須恵器、鉄鏃が出土した。それぞれの出土位置は第3図に遺物番号で示した。土器は大きく玄室内出土のものと、玄門部出土のものに分けることができる。玄室内出土のものは原位置を保っていない。玄門部出土土器は土師器碗、須恵器杯、高杯蓋である。墓前に供献されたものであろう。

土師器には碗、甕と壺の体部下半と考えられるもの1点がある。いずれも色調は淡黄褐色、軟質である。碗（1・2）はともにやや内湾する口縁部をもち、口縁端部は丸い。1は口縁部内外



第5図 1号横穴出土土器 1/4

面をよこなでし、底部外面にはへら削りを加える。2は口縁部内外面ははけ目調整し、底部外面にはへら削りを加える。内面は全面をはけ目調整する。小型の甕が2点(3・4)ある。3は下ぶくれの体部にやや内湾する口縁部をもつ。口縁部内外面はよこなでし、体部外面上半は縦方向のはけ目調整、下半は、へら削りする。体部内面にははけ目調整を施す。4は球形の体部と斜め上方へまっすぐのびる口縁部をもつ。口縁部外面はよこなで調整するが、特に口縁部のつけねを強くよこなです。体部外面は、上半には縦方向のはけ目を施し、下半にはへら削りを加える。内面は口縁部、体部ともに横方向のはけ目をもつ。

須恵器には杯、高杯、高杯蓋、壺がある。杯が3点(5~7)ある。5・6はともに小型の杯で、口径は9.8cm(5)、10.4cm(6)と6の方がやや大きい。いずれも底部外面はへら切りのままである。7は高台をもつ小型の杯。底部外面はへらで切りはなした後、軽くナデる。高杯が2点(8・9)ある。8は杯部に断面三角形の凸帯を2条めぐらす。脚部は大きく外反し、脚端部は垂直な平面をもつ。脚部中位に浅い2条の沈線をめぐらせその上下の二方に長方形の透しをもつ。9は浅くやや角張った杯部に、大きく外反する脚部をもつ。脚端部はわずかに上方へはねあがる。透しはない。高杯蓋が4点(10~13)ある。いずれも頂部に扁平なつまみをもち、頂部と口縁部を区別する稜はない。頂部はへら切りの後、回転ナデでしあげる。口縁端部が丸いもの(10)と、ややとがりぎみのもの(11~13)とがある。いずれも杯身として使用されていたものであろう。壺が2点(14・15)ある。14は小型の壺。体部下半はへら削りの後、回転ナデを施す。高台をもつ。高台端面は内傾する。15は長頸壺。体部中位に2条の沈線をめぐらせ、その間に刻目がある。ミズビキ成形の後、体部下半に回転へら削りを施す。高台の痕跡がある。

VI ま と め

遺存状態のよい1号横穴についてふれ、若干のまとめとする。

1号横穴の形態上の特徴に、墓道が非常に長いことがある。墓道長(11.5m以上)は玄室長の約2.7倍以上にもなるのである。これは、横穴がゆるやかな丘陵斜面に掘削されているために、玄室の高さ(1.9m)を確保しようとすれば長い墓道を穿ち、奥まった位置に玄室を配する必要があるのだろうが、また、横穴式石室の羨道の形態を意識した結果とも考えられなくはない。

1号横穴から出土した土器は大きく三時期に区分できる。全ての土師器と須恵器のうち8~13・15は6世紀後半、須恵器5・6は7世紀前半、須恵器7・14は8世紀の後半にそれぞれ比定できる。このことから、1号横穴の築造の時期を6世紀後半に求めることができる。また、須恵器5・6はいずれも玄門付近で出土していることから、7世紀前半には墓前で祭祀が行なわれていることがわかる。その痕跡はないものの、この時期に追葬が行なわれたのであろうか。さらに、8世紀後半の須恵器が玄室から出土していることから、少なくともこの時期までは何らかの形で被葬者に対する祭祀が続いていたとすることはできまいか。

(西崎 卓哉)

付章 赤田横穴群の定常波探査

西村 康

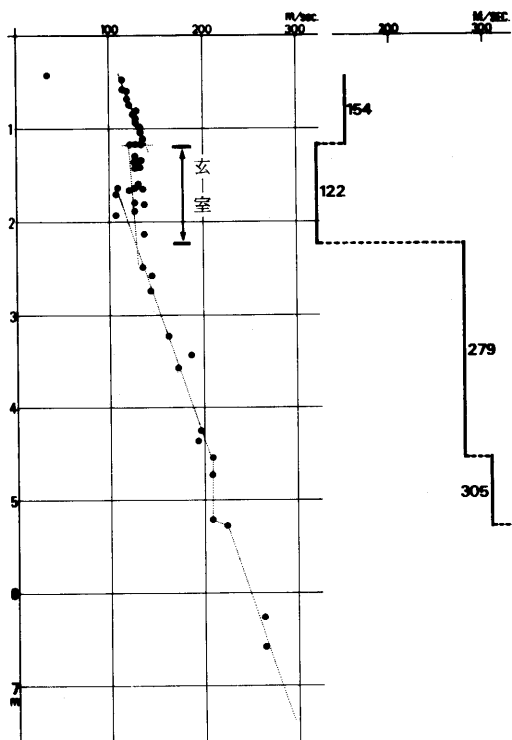
探査の方法 定常波探査は、ある一定の振動波を地中へ送りこみ、その伝播速度を受信・計測することにより、土層を細分していく方法をとる。したがって、遺構は他と異なる地層の部分として認識することになる。石や硬い層では振動波は速く伝わり、軟らかな部分や空洞では遅く伝播する。空洞の場合、振動波は空气中を伝わるのではなく、空洞を迂回するため、見かけ上遅いという結果が得られると、考えている。このように空洞あるいは軟かな土、または石や石敷など、他と比較して硬・軟の差が大きい遺構は、定常波探査法にとっては、探査が容易な対象といふことができよう。

測定装置は、振動波を発生させる部分と、これを受信・計測する部分からなっている。地面を加振して振動波を発生させる加振器と、振動波を受信する2基の振動検出器とが、地表面に直接設置するものである。振動検出器2基の間隔は、ここでは1mとした。測定結果は、この1mの間の土の平均的性質をとらえていることになる。

測定には、すでに発見されていた横穴墓の東で、東方へ測線を設定しておこなった(83頁、地形図)。原則として1m間隔で測定したが、ときには2mで、補測した部分もある。

探査の結果 測定に際しては、まず既知の横穴墓玄室上で、サンプルデータを採取することから開始した。本遺跡における一般的土層の状況を把握して、同時に玄室部がどのような測定結果として表現されるかを確認しておけば、測定データ解析の際の資料となり、判読が容易になるからである。

玄室上での測定結果が、第1図に示すものである。グラフは縦軸に深さ、横軸に伝播速度を表わしている。速度は、秒速何mで振動波が伝わるかを表現している。これによると、深さ約0.5m付近から、1.1mまでは深さと速さの関係を示す測定値のドットが、一直線に並ぶ。このように直線になる間は、単一の地層とみなすことができる。1.1mから下部の1.2mの深さにかけて、急激な速度のマイナスの移動がある。

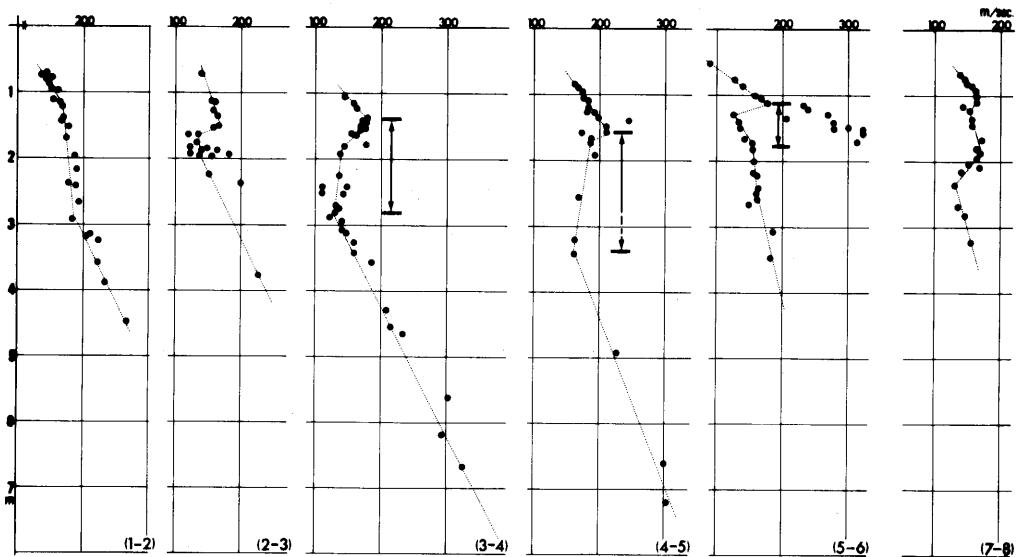


第1図 玄室部のサンプル測定

この速度の遅くなる部分が、空洞すなわち玄室をあらわしていて、天井部にあたる。床面は2.1 mの深さ付近とみられるが、明確でない。また、天井部と床面の間では、測定データが分散していて、必ずしも空洞部を適格にとらえているとはいえない。通常は、他の地層よりも、遅い伝播速度のみで検出できるものが、ここでは速度の速いデータと遅いものが混在しているのである。これは周辺の地層中に、異物たとえば石塊やコンクリート片等が、存在しているためではないかと推定される。

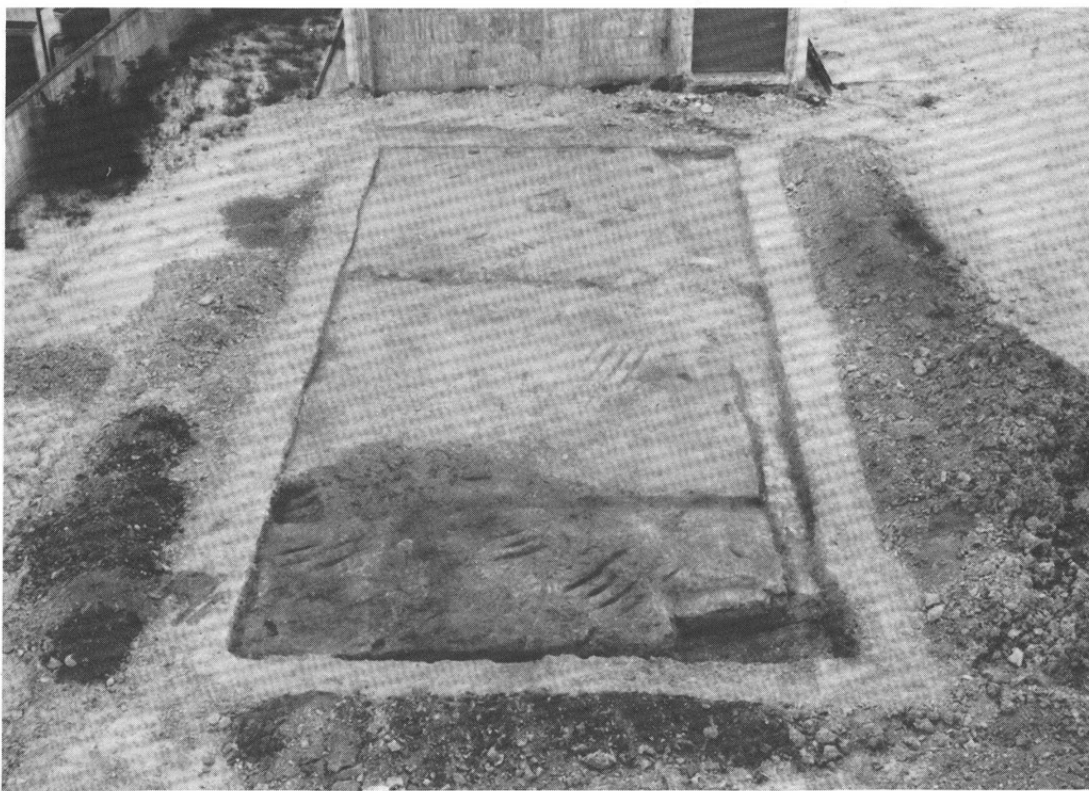
2.1mより下層では、7 mまでの間に少なくとも3層に区分できる速度変化がある。これら各層毎の、地層個有の伝播速度を計算して示したのが、第2図中の右側の折線である。深い層まで達する振動波は、当然浅い層をも通過しているので、測定時に得られる深い層の速度値は、みかけ上の値となって表われるため、分層して各層個有の速度を求める必要があるのである。玄室にあたる空洞部分は、他の層より伝播速度の遅いのが明瞭にわかる。

測定の結果が第2図で、測線に沿った地層の断面図である。測定した地点は、各々の速度変化図右下に示した。この中でマイナスの速度変化があつて、空洞または軟らかい土層の可能性がある地点は、2~3, 3~4, 4~5, 5~6である。しかし、2~3と5~6の間では、速度の遅い部分の範囲が、深さで0.5m前後の間と限られるため、小形の玄室か玄室の一部を検出したものと考えた。4~5の地点は、マイナスの速度変化の状況から、1.6mより下部が玄室であることは確実とみた。しかし床面は、データ採取が困難であったため、確定できなかった。3~4の間は、速度変化がゆるやかなため、玄室の存在を積極的には推定できない。発掘結果との照合は、このような場合の判断資料を、本探査法に提供するものとなるう。



第2図 測定結果

圖 版



1. 発掘全景（東から）



2. 発掘区全景（西から）



1. 発掘区全景（西から）



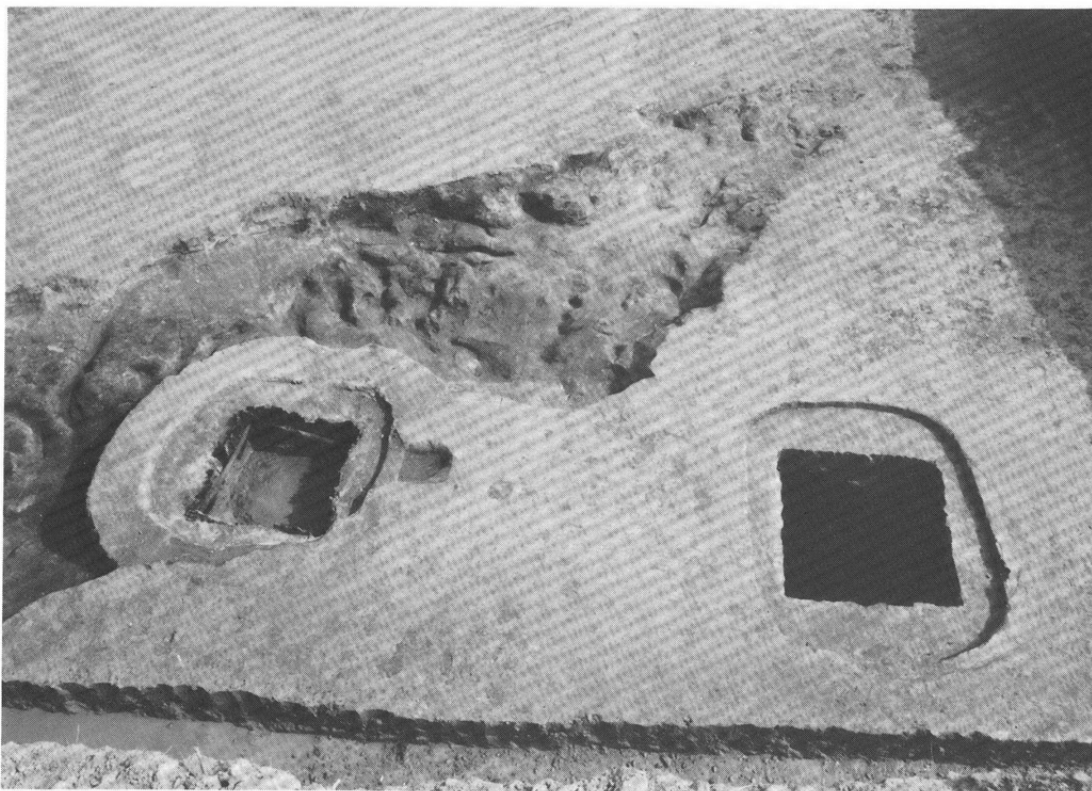
2. 発掘区全景（東から）



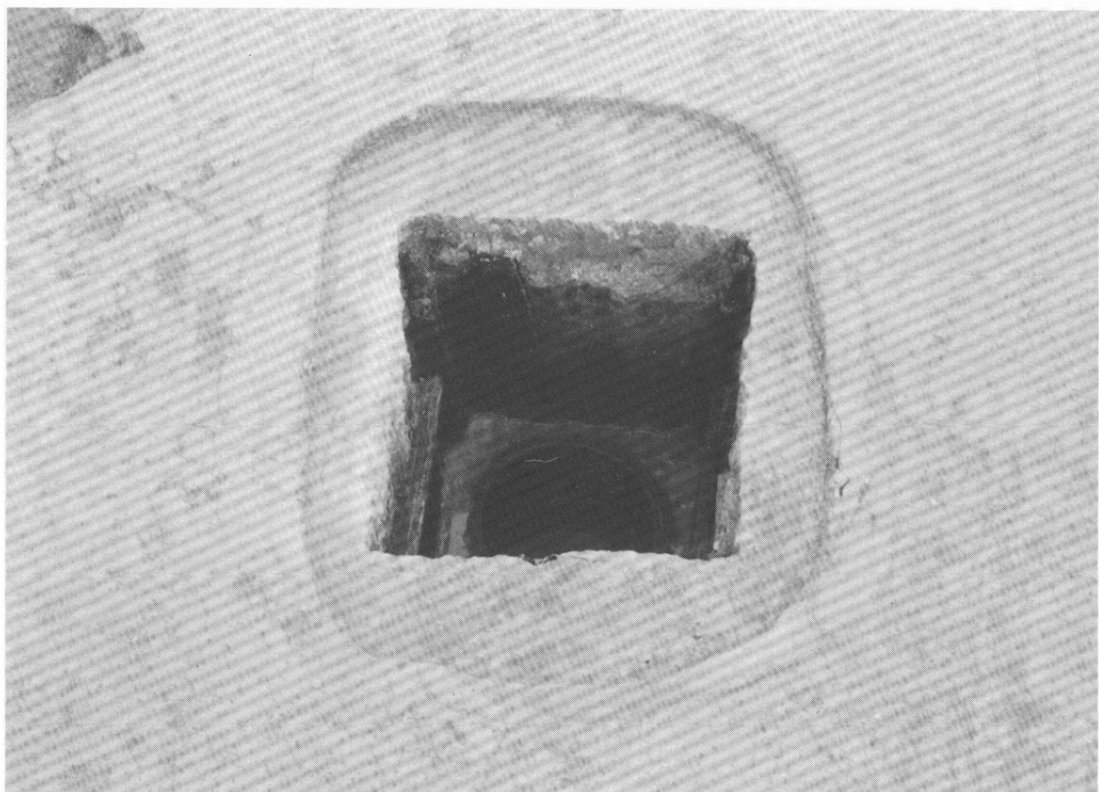
1. 発掘区全景 (南から)



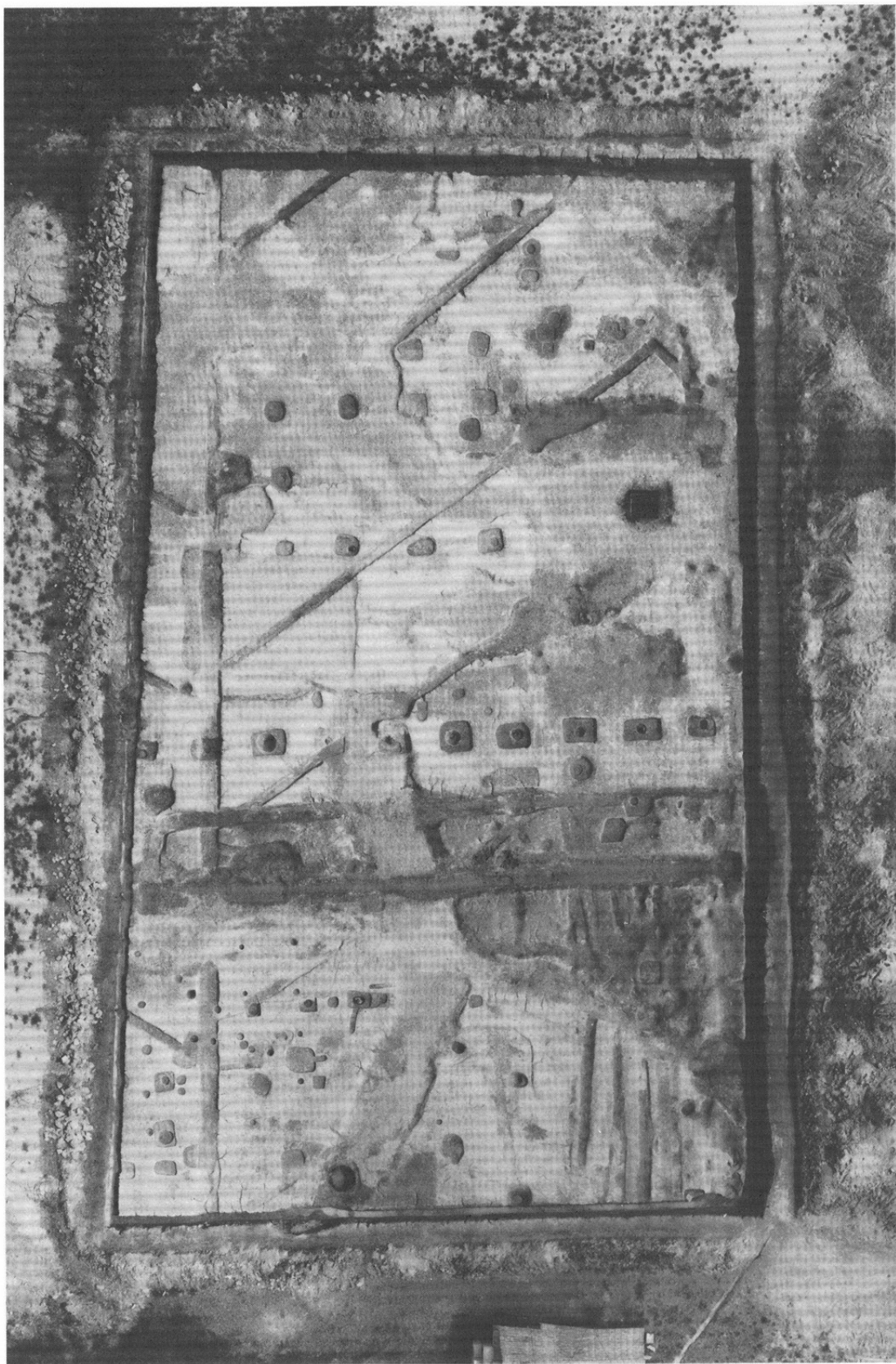
2. 発掘区全景 (西から)



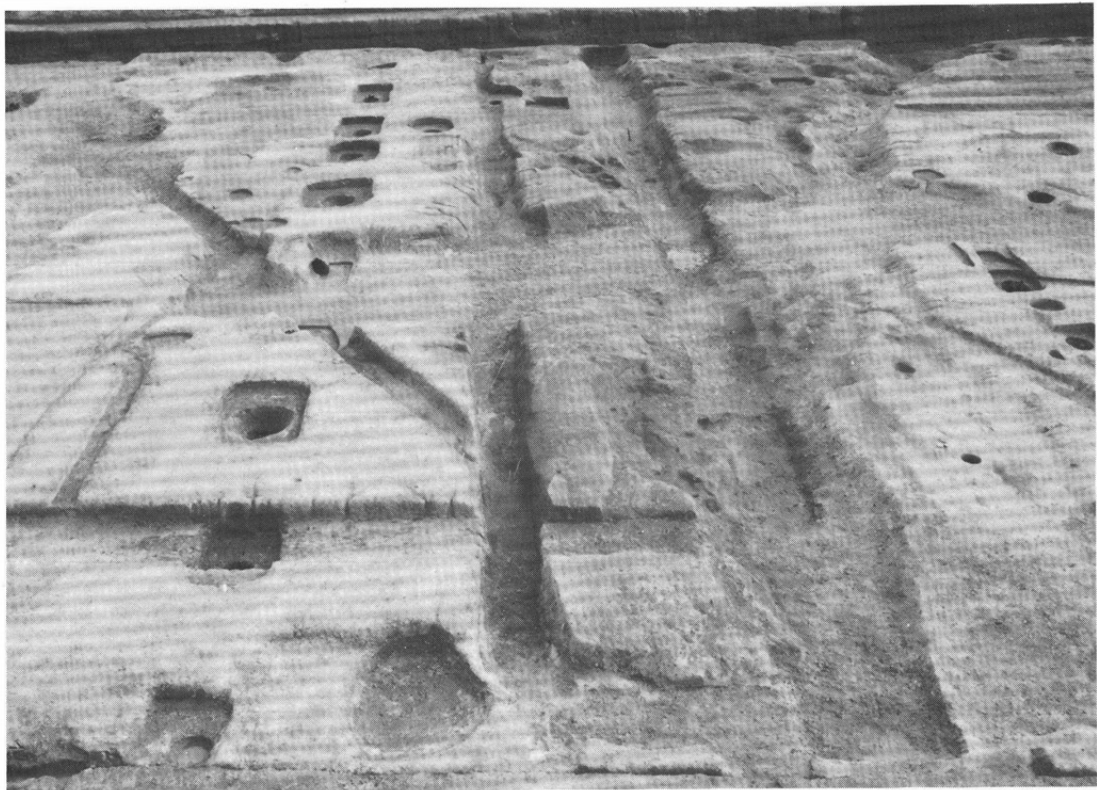
3. SE01・02 (西から)



4. SE01 (西から)



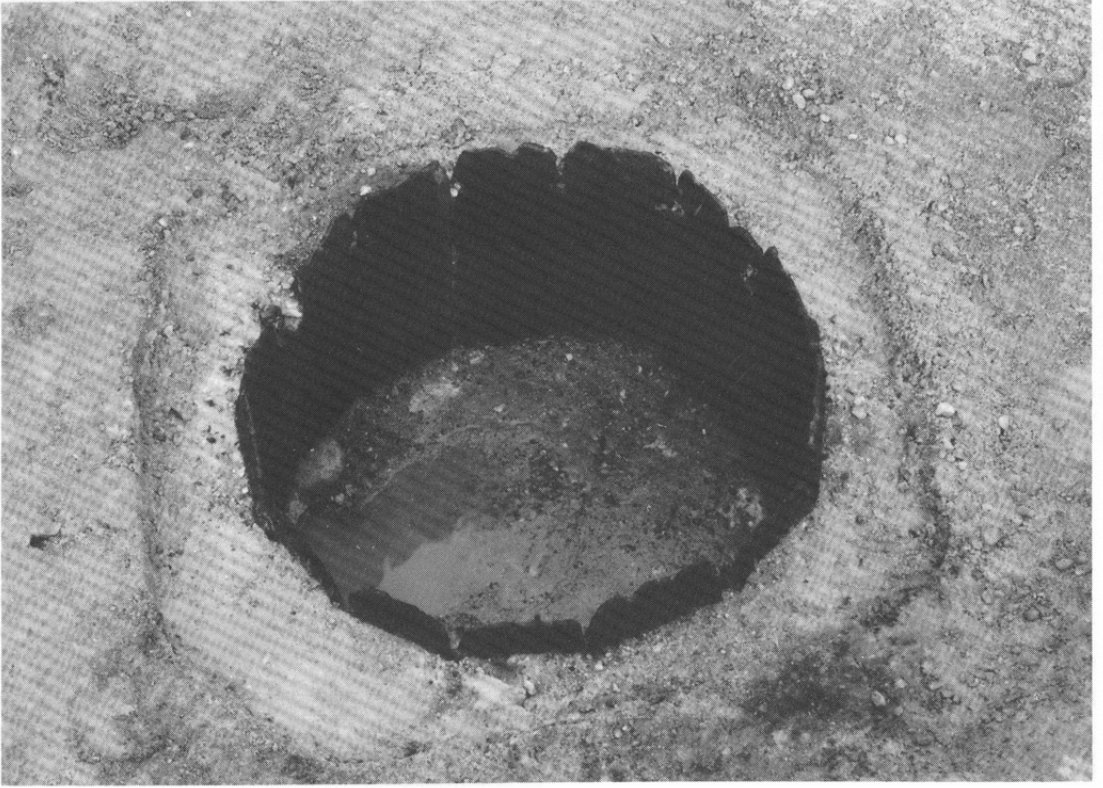
発掘区全景航空写真



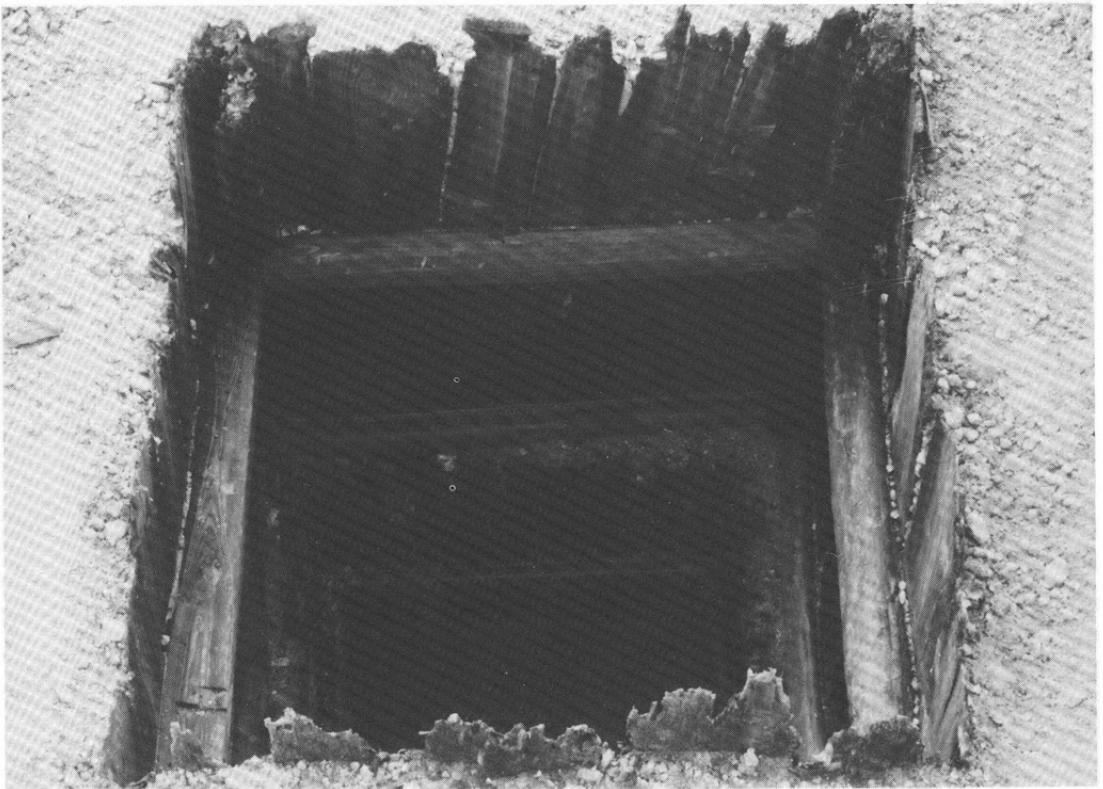
1. SA01, SD02・03 (北から)



2. SA01, SD02・03 (南から)



1. SE05 (西から)



2. SE06 (東から)



1. 調査地全景（東から）



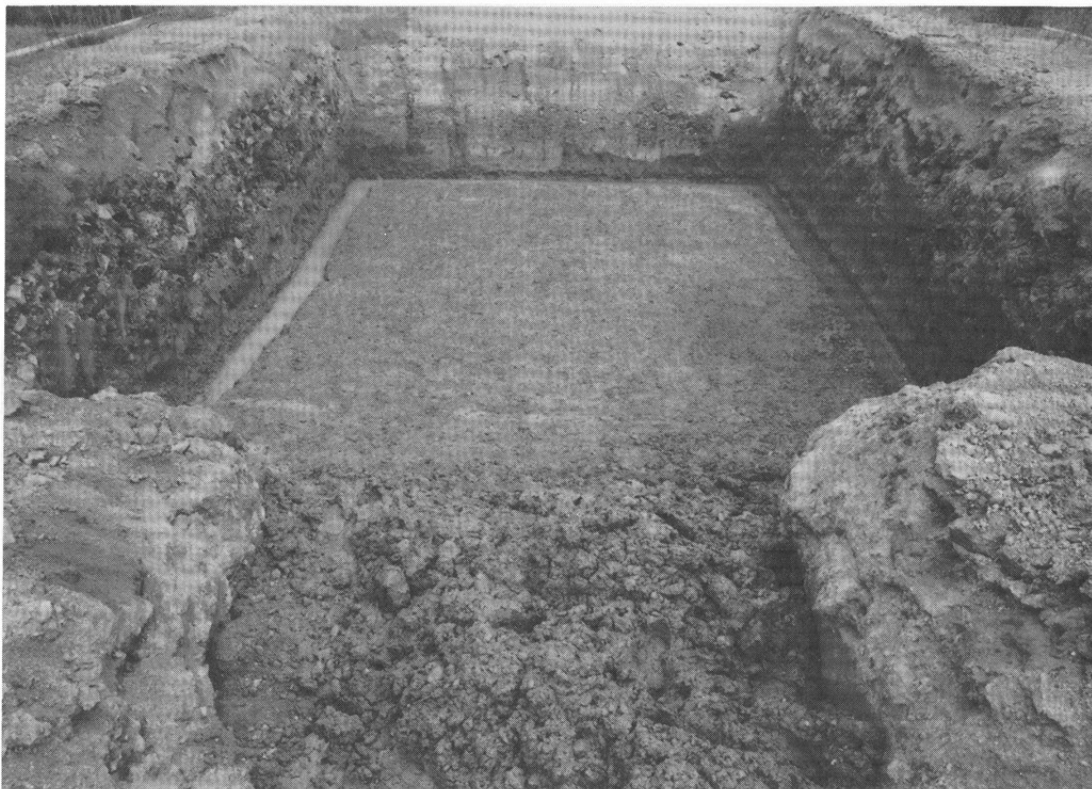
2. 発掘区全景（東から）



1. 発掘区全景（南から）



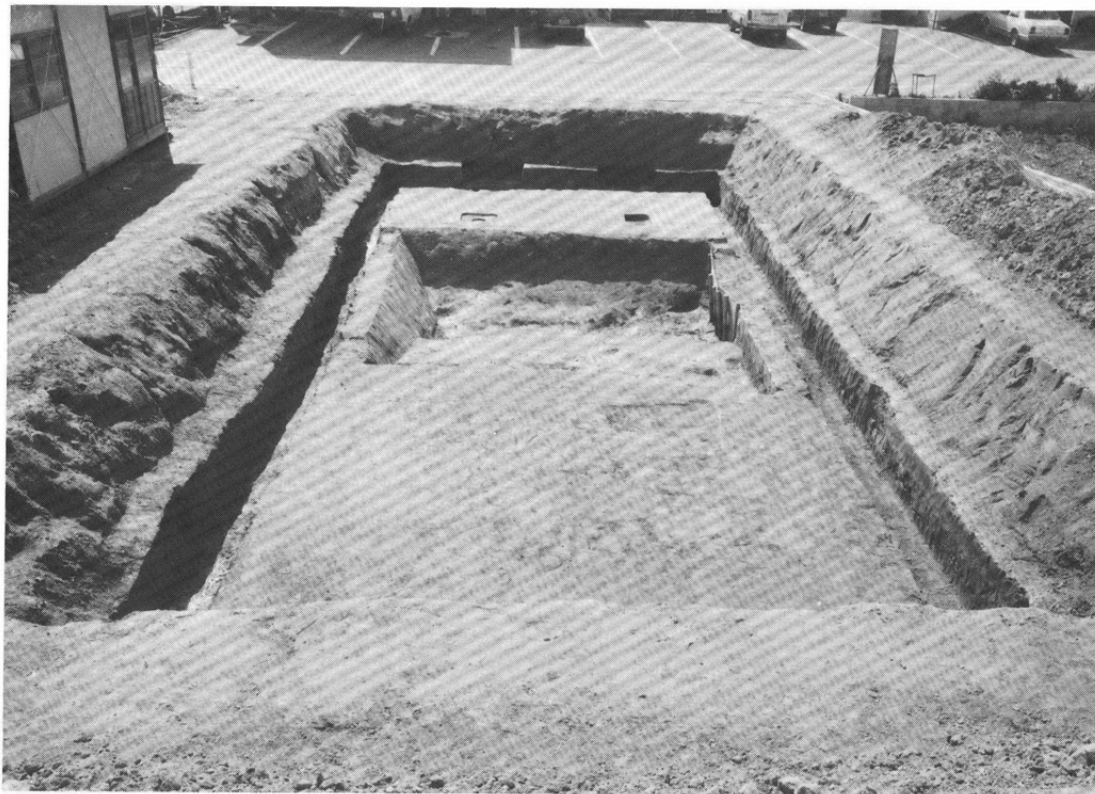
2. 発掘区全景（北から）



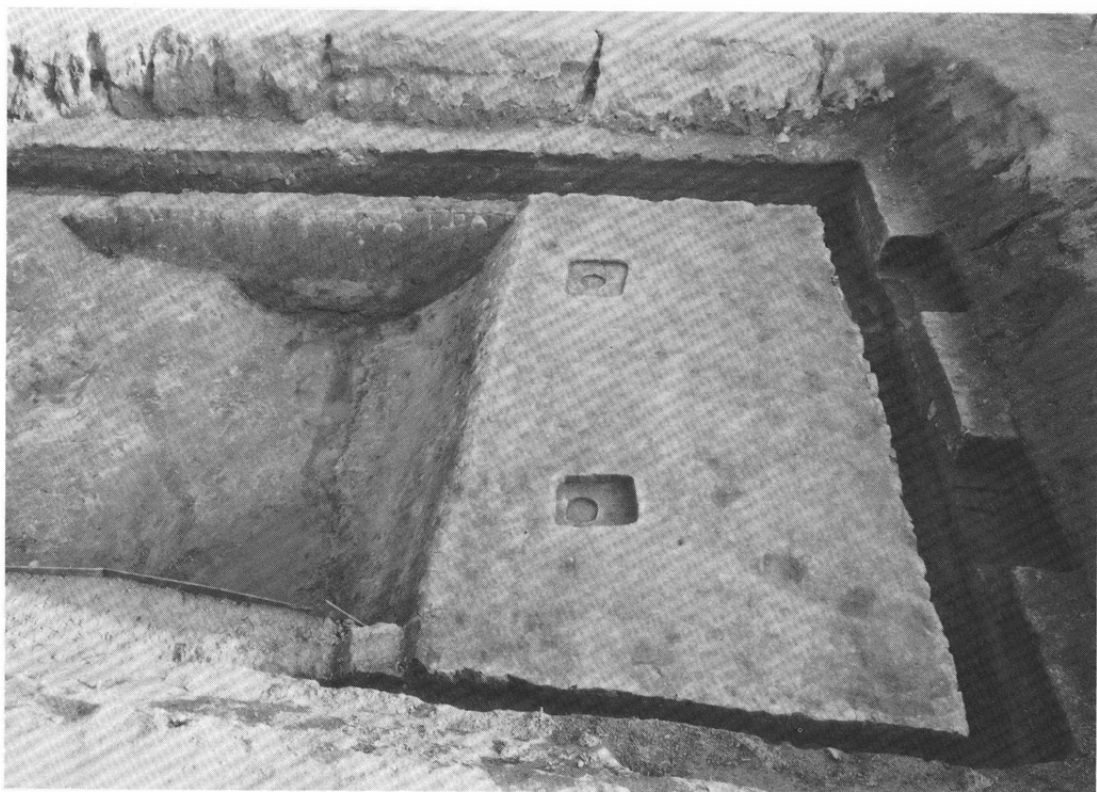
1. 発掘区全景（南から）



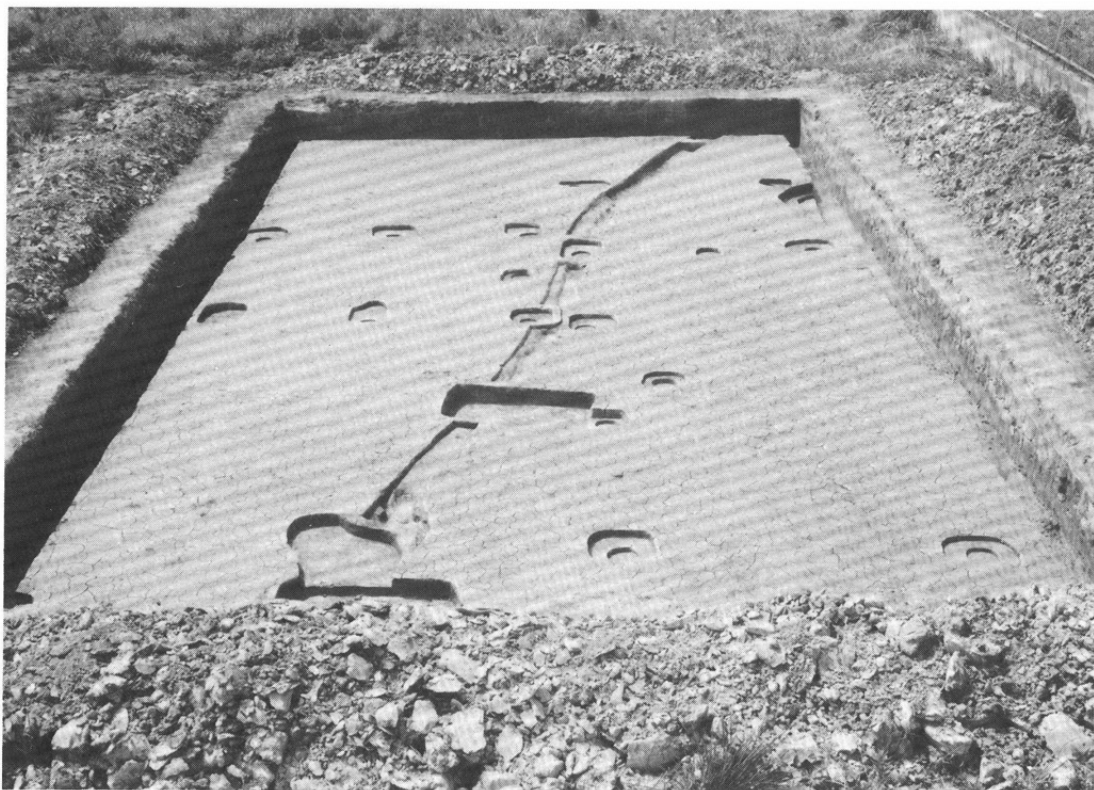
2. 発掘区全景（北から）



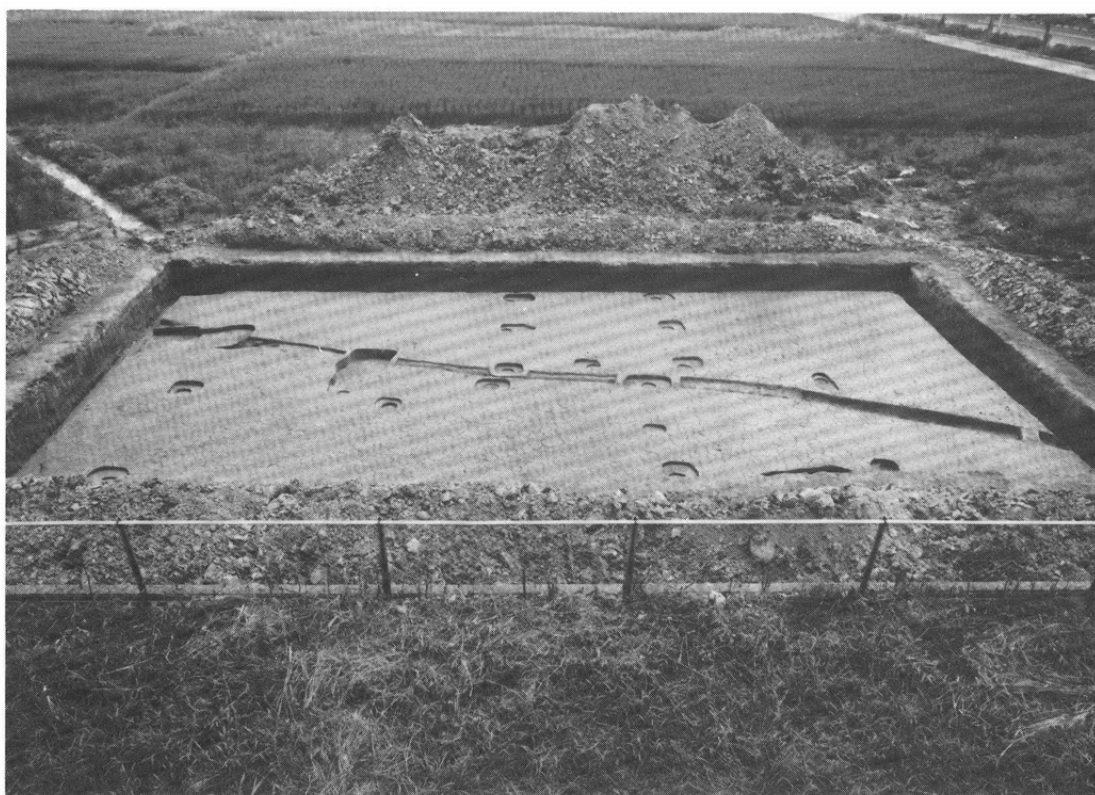
1. 発掘区全景（東から）



1. SA03, SD02（北から）



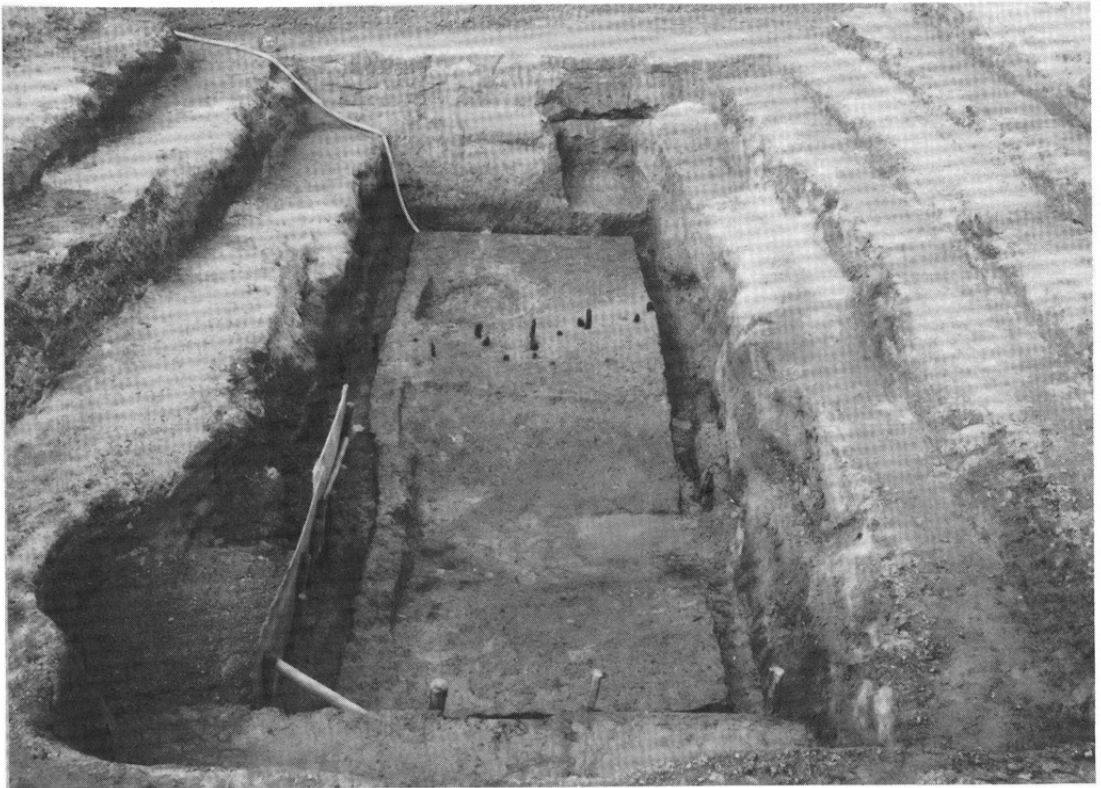
1. 発掘区全景（東から）



2. 発掘区全景（北から）



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



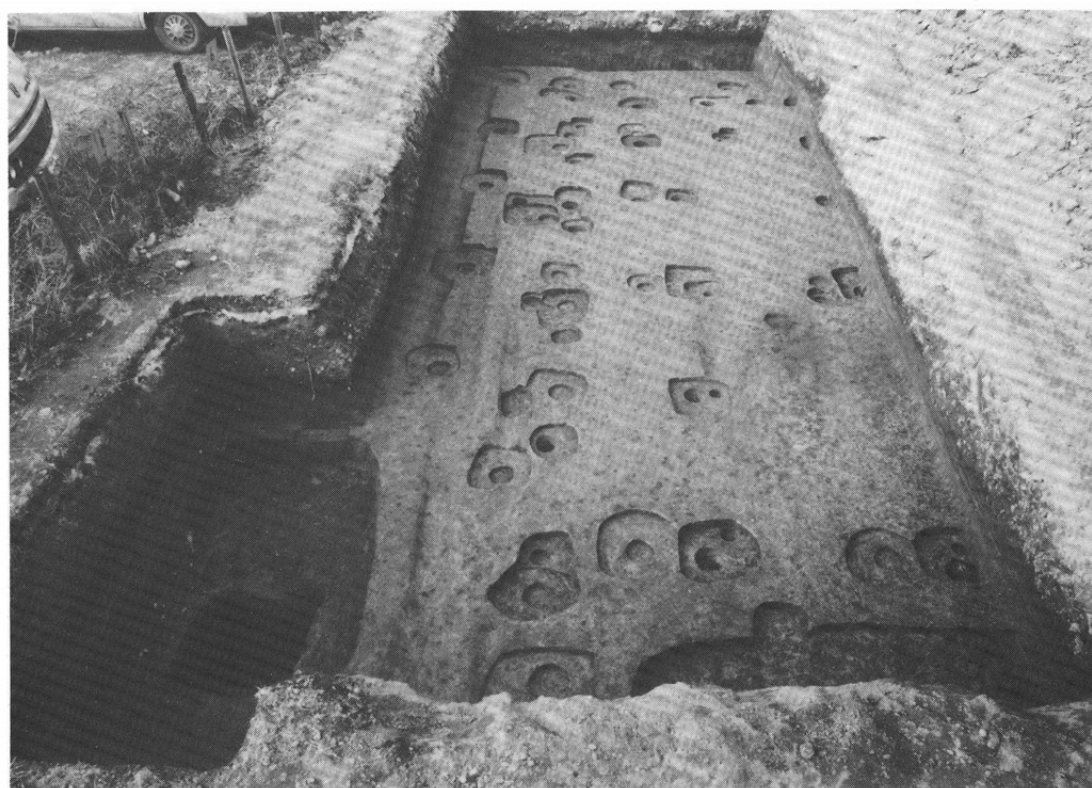
1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（東から）



1. 発掘区全景 (北から)



2. 発掘区全景 (南から)